

引き裂かれた代紋

シルバーフォックス

「ああー・・・良い！お前のここは、なんて良いんだ・・・」

しなやかな柔らかい筋肉の上にしっかりと指に吸い着くような心地良い脂肪の層を薄く載せた女の大腿を両手で思い切り押し開き、その暖かく潤った極上の内部に自分のモノを思い切り深く押し入れ、激しく全身から沸き上がる欲情の丈を、対峙する蠱惑的な女体にぶつけるように、激しく抜き差しを続けながら、黄原が感に堪えないような声を上げた。

「ああー、お客さんのも凄いわ！・・・ああっ・・・また、中で大きくなる！大きくなって行くわ！・・・突いて！もっと、もっと激しく突いて！」

黄原に組み敷かれた若い小柄の娼婦が、股間から込み上げる刺激に耐えきれないようにか細い肢体を悶えさせ、息が止まるような苦しそうな呼吸の下から、切れ切れに喘ぎ声を上げた。

黄原のモノを深々と呑み込んだその内部は、まるで何か特殊な仕掛けが埋め込まれているのでは無いかと思わず疑いそうに成る程妖しく蠢き、ある時は肉茎の根本を強い筋力でギュッと搾り上げ、またある時は、内部に植え込まれた無数の柔軟な襞を柔らかく蠢かせて、亀頭部分を優しく撫で上げ、硬く隆起したモノを包み込む様に、膣全体を動かして黄原の肉塊を奥へ奥へと吸引して行くかの様に感じられた。

そして膣孔全体から絞り出されるように溢れ出る濃厚で豊富な暖かい愛液に包み込まれて、得も言われない様な陶酔感に引き込まれるのであった。

しかし、そのような股間の筋肉を総動員した動きは、この細身の年若い売春婦にとっても大変な肉体の酷使を要求するのか、抱き締める黄原の腕の中で切なそうに身を振る華奢な体は、短く早い呼吸を繰り返し、雪の様に白い肌は赤く上気し、体温が上昇してしっとり汗を浮かべていた。

売春婦というものは客に媚びて、また客を早くイカせるため、わざと大げさなヨガリ声を上げたり、客の稚拙なテクニックに対してもイッた振りをするもので有るが、今、目の前に居る、自分に抱かれている女が、そのような演技をしているとは、女との情交に慣れた黄原にとっては思え無かった。

その興奮して熱く火照った体は、何処にでも居るような売春婦のどこか醒めた冷たい体を抱く時と全く違っていた。

そして、その火照った体から立ち上る、咽せるような若い女の甘美な匂いに幻惑されたように、両の手で細い女の体を強く抱き締めたまま、思わず夢中になって相手の唇に自分の唇を重ねていた。

相手の柔らかい唇に自分の唇を強く押し付け、その唇の弾力を楽しむと、舌先で柔らに突き出した唇の周りを撫で回した。

黄原に唇を奪われて、ウツトリとするように薄く唇を開いたのを逃さず、黄原は自分の舌を女の口内に突き入れ、その内部を優しくなめ回した。

女もそれに応えるように、舌を突き出し、しばらくの間、貪る様に互いの舌を絡め合った。

女の吐く息が間近で黄原の鼻腔を捉え、女の唾液が黄原の舌を潤した。

二人の熱い口交の間も、熱く潤った女の肉洞は、黄原のモノを食欲なまでに力強く、そしてまた一転して、優しく優雅に刺激し続けていた。

そして、その強弱のリズムは次第に短くなって来ており、女が最後の瞬間を求めて激しく動き始めたと感じられた。

ふと、甘酸っぱい女の息の匂いが女の性器から立ち登る匂いに同化したように感じ、女の唾液の味が性器から流れ出る、甘美な愛液の味に変化したように感じられた。

女の体全体が今や一つの性器と化した瞬間だと思った。

黄原はベッドに両手を付いて、上体を浮かすと、眼下で苦しげな荒い呼吸で大きく上下する胸に目をやった。

まるでプリンのケーキのように柔らかく弾力のある二つの乳房が、荒い息と黄原の突き立てる激しいピストン運動で、弾むように動いていた。

黄原の唇は無意識にそのプルプルとした弾力のある綺麗な形の乳房を這っていた。

黄原が舌の先端を窄めて、その乳輪の周囲を丹念に撫で回し、その中心に位置する乳首を舌先で責め立て相手の反応を楽しんだ後、そっと口に含んだ。

口内で黄原の舌による愛撫を受け続ける内に、乳首が固くしこって来るのが分かった。

黄原は、女の上体に身を覆い被せたまま、両肘で体を支えると、両手でボリュームの有る乳房を優しく揉み上げ、口と指先を駆使して、二つの乳首を交互に愛撫した。

黄原の愛撫を受け、ドーム状の乳房の頂点で二つの乳首がツンと屹立している様が見られた。

女は堪えられないかのように、両腕を伸ばし黄原の上体を引き寄せると、両手を黄原の背で交差して強く自分の胸に抱え込んだ。

黄原の筋肉質の厚い胸板と女の柔らかい乳房が隙間無く密着し、固くしこった乳首が黄原の胸を摩擦し、ドクドクする女の鼓動が直接黄原の心臓にまで届いた。

突然、女の腰がビクッビクッと激しく痙攣し、その瞬間、まるで真正面から厚い湯をバケツで投げ掛けられたように、秘奥深く突き立てた黄原の肉塊目掛けて、膣の最奥から熱く滾るような愛液がビュッビュッと大量に吹き出し、亀頭を洗うのが感じられた。

そのかつて感じたことの無いような快美感に、思わず黄原もその愛液の源泉に向かって、白濁した液を弾き出す様に放出した。

そして、二人は激しかった絶頂の余韻に浸るように、そのままベッドの上にくずおれた。

黄原はベッドに仰向けに寝たまま、右手を伸ばし、ベッドの隅に置かれた煙草の箱をゴソゴソと手探りで手にすると、箱のまま一本を口に咥え、再び手探りでライターを探して火を点けた。

そして、満ち足りた顔でフーッと紫煙を天井に向けて吐き出した。

黄原の横では、ついさつきまで激しく乱れていた若い売春婦が、まるで結婚したての新妻が夫との愛を確認し合った後、安堵して添い寝するかのように安らかに寝むっていた。

黄原の太い腕を枕にして、浅黒い筋肉質の体に白く柔らかな身体をピッタリと密着させて寄り添うようにスヤスヤと寝息を立てている。

女の頭の重みが黄原の左腕に心地良い圧力を与え、女の身体の温もりが密着した肌を通して黄原に気持ち良く伝わって来た。

ヤクザな世界に身を置き、常に殺すか殺されるかの修羅の日常を送る黄原にとって、自分にピッタリと寄り添って安らかに眠り続ける女と身体を触れさせていると、その女から伝わって来る暖かい体の温もりが冷徹な心を癒していく様な、何故か心が安らいで行くのが分かった。

ぐっすりと眠る女の右手が、まるで黄原に何処にも行かないでーと、願う様に、半分力を失った男性自身を握ったままにいることに気付いてフフッと微笑んだ。

女を食い物にする裏社会において、肉欲の赴くままに好き放題女を抱くだけ抱いて、これまで女に心を奪われた事の無い黄原であったが、この女の寝顔を無意識に見詰めていると、不意に心を奪われるような愛しみの感情が込み上げて来るのを感じていた。

それで、女を目を覚まさない様に、不自由な体勢で煙草に手を伸ばしたのであった。

これまで、ちょっと気に入った女が居たら金と暴力で自分勝手に抱いて来た黄原に取って、女とは単に自分の肉欲を処理させるための玩具に過ぎないと考えていた。

黄原にしてみれば、女など命のある性具、自動的に動くダッチワイフと同義であった。

自分が気に入った女を自分になびかせるため、女に対して努力することは在っても、それは単に並外れた美女を自分の膝下に支配したいという男の所有欲を満たすためのもので、決して女に愛情のような物を感じたことは無かった。

それが、この女に対して優しい気持ちになった自分に気付いて、我ながら驚きの様なものを感じるのであった。

この俺が、女に対して、しかも薄汚れた売春婦風情に心引かれる事などあり得ないーと、思い直し、煙草の煙を深く呑み込むと、改めて穏やかな寝息を立てる女の顔を見詰めた。

そこにはシルバーフォックス＝銀狐と呼ばれるような、狐と言う言葉からイメージされる計算高い狡猾な様子は、微塵も感じられず、男が助けてあげなければ何も出来ないような、清楚で、か弱い女のイメージしか無かった。

これまで、幾人もの金で自分の肉体を切り売りする様な女を抱いて来た黄原であったが、通常の売春女が、例え、表面上は厚い化粧の下に隠していても、その体内の奥深くに秘められた怨念にも似たベトリと纏い付く、陰険さや、狡猾さや、残酷さのような陰が、不思議とこの女には見られないと、女の安らかな寝顔を繁々と見詰めながら思うのだった。

黄原は目高組という暴力団の若手幹部であり、当然、裏の世界に通じていた。

数年ほど前から、その黄原の耳に、夜の世界に君臨するシルバーフォックスと呼ばれるどんな男でも虜にしてしまう性技を持つと云う売春婦の噂が耳に入ってきていた。

その女の事が気になって、色々情報を探る間に、その女は岡照組という暴力団の経営する秘密の会員制ソープの女であることが分かった。

その会員制ソープは、厳格に管理されており、その会員は、著名な金満家の財界人や政治家等にも及び、バックの無い一般人の立ち入れる所では無かった。

また、現在新規会員は募集していないという状況であったが、黄原は八方に手を尽くして、やっとの事で、ここに潜り込むことに成功し、念願叶って、今日ここにシルバーフォックスを抱く事に成功した訳であった。

じっと見詰める黄原の視線に気付いたのか、ハッと目を開けると、「あら、嫌だ！私お客様の胸の上で寝てたのね？」と、跳び起き、

「お客様が、あんまり上手だったから、そのまま気が遠くなって寝てしまったのね？」と、はにかんだような微笑を浮かべた。

「こんなに気持ち良くお客様にイカされたのって何年ぶりかしら？・・・お客様のコレと私のココの相性がとても良かったのね？」と、今は力を失って横たわる黄原の男のモノを細い指の腹で撫でながら呟いた。

そして、女のしなやかな指先の優しい愛撫に黄原のモノが僅かに反応する様子を発見して、女は、ウフッと慈愛を込めたように艶然と微笑むと、体を倒して、黄原のモノに唇を寄せて行った。

女の柔らかな口唇が黄原のモノに沿って上下した。

黄原の目には白い顔の中で赤く紅を引かれた唇が、厳寒の雪原に咲く一輪の赤い花の様に感じられた。

黄原の視線も気にならないのか、プリッとした柔らかな赤い唇を浅黒い黄原の肉塊に丁寧に舐め続けていた。

次第に力強さを蘇らせるその肉塊を丹念に舌先で愛撫し続け、やがて硬く屹立を始めた男の匂いを立ち上らせる肉茎を口に含んだ。

口内で亀頭を愛撫する巧みな舌使いに、黄原は思わずウツトリとした声を上げた。

黄原はこちらに下半身を向ける女の腰を両手で捉えて、女の尻が自分を跨ぐように移動させた。

今黄原の僅か目の上には、パツクリと開いた女の秘密の花園が隠す物無く映っていた。

女の股間には何故か其処に在るべき春草の繁みは無く、ビーナスの丘と形容される小高い盛り上がりとその僅か下から始まる深い切れ込みを持った谷が目の前に何も遮るもの無く映り、まるで童女のように艶々とした張りのある柔らかな肉を晒していた。

此までに、一体、延べ何百人、いや、何千人の男が、この秘所を通り過ぎて行ったのだろうか？と黄原は想像した。

延べ何千人もの男のモノを突き立てられ、何万回と擦り上げられ、随喜の体液を溢れさせたその箇所は、それなりに肥大し成熟していたが、不思議と色素の沈着は少なく、その形も崩れておらず、綺麗な若い女の花の佇まいを見せていた。

黄原は、両手でそっとその花卉を押し開き、その幾重にも可憐な襞で隠された内部に目を

やった。

黄原のモノに口腔で愛撫を加える女の体が、黄原の巧みな指使いに思わず感じたのか、ピクッと震えた。

ほんの少し前まで、黄原の太いモノを物の見事に咥え込み、しごき上げていた肉の筒は、今は何事も無かったかのようにピッタリとその扉を閉ざし、高価な蘭の花弁にも似た気品の在る佇まいを見せていた。

両手の指を駆使して、その花弁を押し開き、肉の壁を捲り上げて、丹念にその周囲を愛撫していた指で、その閉じられた扉をそっと押し開くようにして、スルリと中指を滑り込ませた。

その刹那女の腰が再びピクッと震えた。

その閉ざされていた内部は、まるで熱帯の海のように、暖かい液体で満たされていた。

更に人差し指も追加して、二本の指で、まるで暖かい海の中を遊泳するように、肉洞の内部をまさぐった。

そして、肉洞の壁に沿って指をなぞらせて、黄原を夢中にした無数に植え込まれた柔らかな突起を確認した。

黄原の優しい指先の愛撫に、黄原のモノを喉の奥にまで誘い込み口蓋全体の筋肉を使って陰茎全体を愛撫しながら、黄原の指先のテクニックに感じているようにビクビクと腰を震わせ、甘い呻き声を上げた。

黄原は指をそっと抜くと、そのひっそりと閉じられた部分に唇を押し当て、舌先で優しく扉をこじ開けて、溢れ出た海の滴を嚥下した。

若い木の洞から滲み出る樹液を貪る様に、舌を長く延ばして肉孔の中に突き立て、その周囲を徘徊し、次々と湧き出す甘い粘液を舌先を激しく動かして絡め取った。

一頻り、豊かに溢れ出る甘美な愛液を堪能した後、黄原の舌は、そのまま鼠蹊部に沿って上昇した。

いわゆる蟻の戸渡りと呼ばれる、二つの陰門を隔てる艶々とした粘膜の表面に丹念に舌を匍わせながら、その舌先は薄い莖色した菊の蕾に達した。

突然、黄原の舌先が菊門を襲ったことに、電気に撃たれたように体をビクッと硬化させた。

菊の花の様に深く刻まれた皺を舌先を使って丁寧に引き伸ばすように、丹念に女の菊花の周囲を嘗め回した。

舌先の愛撫で、女の肛門が柔らかく開き始めたことを確認した黄原は、舌先を窄めてグッ

と内部に押し出た。

黄原の舌先が肛門括約筋を押し分け、直腸の内部に達した。

独特の渋みとエグ味が黄原の舌先を刺激した。

黄原の舌先で直腸内部を愛撫され、その甘美な蝕感にアア、アア・・・と、女が鼻を鳴らした。

これまで黄原にとって女とは、単に生きている性具＝自動的に動くオナニーの道具の様な物にしか過ぎなかった。

自分が気持ち良くなるように女に行為を強制することはあっても、自分から女を気持ち良くさせるため、サービスするような気持ちは持ち合わせていなかったが、この女と接して、何か自分でも理解出来ない激情に駆られるように、無心に女の体を貪り、その肉孔を激しく愛撫しているのだった。

やがて黄原は、女を煽り立てる激情に、逆に自ら煽り立てられるかのように舞い上がり、女の絶妙な口技とも呼応して、まるで桃源郷に迷い込んだかのように、くらくらと霞むような快感に目を回して、女の口内に熱くて粘り樹液を発射した。

女は口腔内に放出されたドロドロと粘りのある、生臭い粘状物を溢さないように口を窄めて、喉を鳴らして呑み込んでいた。

口腔内に撒き散らされた、濃厚な男のエキスを全て飲み干し終えた後、女はまるで後の掃除をするように、口内に含んだ亀頭を舌先で清め始めた。

絶頂を終えてまだ興奮したままの神経が過敏になっている鈴口部分をざらつく舌で丹念に愛撫され、ツンと窄めた舌先で鈴口を左右に押し開け尿道内に残った残液を残らず啜り上げた。

その波の様に襲い来る鋭い快感に、黄原は思わずハァーと息を吐いた。

女がふと黄原の方を振り向いた。

女の唇の端には、溢れ出た白濁した唾液がスジを引き、男の精を飲み干した女の顔には、男の生命の一部を奪い取った達成感じみた笑みを浮かべ、一種凄惨とも言える美貌が溢れ、思わずドキッとするものを感じた。

「お客さんは、私の前の穴を褒めてくれたけど、後の穴も負けないくらい凄いのよ・・・」  
澄んだ鳶色の瞳で黄原の方をじっと見つめながらコケティッシュな微笑みを浮かべた。

「どう？追加料金になるけど後の穴も試して見る？」

今、日本国中バブル景気の真っ盛りであった。

男達は女の歓心を引くため金に糸目を付けない時代であった。

この秘密の会員制ソープの客となった有り余る程の金を持った男達は、より深い快感を得るためには幾ら金を注ぎ込んでも惜しいとは思わないことだろう。

この若い売春婦もその男達の下心につけ込んで大金をせしめているのだろうーと、思った。

「ああ・・・試してみたいね。」

艷然と微笑む女の瞳を見つめながら黄原が呟くように応えた。

「それじゃ・・・準備をしないとね。」

女はベッドから身を起こした。

「ここは、本来バッチイ所だから綺麗にしておかないとね・・・」と、呟くと、悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「ねえ、あなた、女の子がウンチする所を見たことある？・・・見てみたいと思わない？」

と、黄原の目を見詰めながら問いかけた。

黄原が黙って頷くのを見て、

「本当は、このソープの規則で、ウンチする所を見せるのは特別サービスで、10万円の別料金を頂くんだけど、お客さんがとっても素敵だから今日は、私が自腹を切って、特別にタダで見せて上げるわ！」

「別に、10万円くらい払ってやるよ・・・」

「本当？有り難う！」

女が嬉しそうに声を上げた。

女は、ベッドの傍に置かれた、高さ60センチくらいで直径80センチくらいの円筒状の台の上に上がった。

そして、その平らな台の上でまるで和式便所を跨ぐ時のように足を開いて腰を下げた。

ベッドに横になる黄原の目の高さから、丁度股を開いた女の局部が丸見えになる様になっていた。

女が何かのスイッチを操作すると、円周状に台の周囲に埋め込まれ照明が点灯した。

そのカクテル光線の様な目映い光は女の秘部を下方から明々と照らし上げ、その微細な襞の奥まで隠すことなく晒し上げた。

黄原がベッドに横になったまま興味深げに、右手を大きく開かれた股間に伸ばした。

そして、スベスベとした感触の良い柔らかな秘裂に指を這わせ、

「お前、生まれ付きココに毛が生えないのか？」

と、剃り跡が見えない陰部を撫でながら聞いた。

黄原の突然の変な問い掛けに、女は思わずプツと噴き出して、

「変なこと言わないでよ！放つといたら生えて来るわよ。これでも毎日ちゃんと処理をしているんだから！」

「カミソリで剃っているのか？」

「カミソリで剃ると後がチクチクするから、毛抜きで一本一本抜いているのよ・・・」

女が、股間を鏡で映しながら毛抜きを使う姿を想像した黄原は、

「それは痛そうだな！痛くは無いのか？」

と、思わず聞いてしまった。

「もう慣れたわよ。それにココがツルツルの方が気持ちが良いって言うお客さんが多いから毎日手入れするのよ。」

と、当然の様に答えるのだった。

女は開いた股の真下に、直径30センチ程の、理科室で使うような透明のガラス製の大型シャーレを置いた。

ウンッと一つ息を吐くと、息んで下腹が緊張する様子が、黄原の目に映った。

女が台に仕掛けられていた何かの仕掛けを操作したので、女を乗せたまま台がゆっくりと半回転した。

女の細くくびれた腰から続く豊かな形の良い臀部がベッドに寝そべる黄原の目の前に現れた。

黄原の方に尻を向けた姿勢のため、秘部の中の奥まった菫色の蕾が、表に向かって迫り上がり、少しずつ開いて行く様子がありありと映った。

ベッドに横になったまま、紫煙を燻らす、黄原の目の前で、それは火山のように大きく突き出し、まるで噴火口が開く様に、ジワジワと開口し始め、その濃いピンク色をした内部を見せ始めていた。

黄原の見守る前で、今や大きく開いた肛門の中心に何やら褐色の塊がその醜怪な頭を見せ始めた。

その褐色の塊は、見る見るその巨大な姿を現し始め、乱暴に菊花の肉を押し退けるように、

表に醜悪な姿を現すと、そのまま真下に向かって垂れ下がり始めた。

ウンウンと息み続ける女の肛門からは、棒のように長く伸びた便がユラユラと揺れながら下に下にと延びて行った。

再び女が台に仕掛けられたスイッチを入れたのか、女を乗せた台がゆっくりと回転を始め、女が排便する恥ずかしい姿が前からも後からも見えるようになった。

大きく股を拡げて、その開き切った割れ目の奥に隠しようも無く女の命を宿す隠微な祠を真正面から男の目に示しながら、その僅か後方では、唇をツンと前に突き出すように、チューブのように外部に肛門が飛び出し、その中から次々と連続して長い長い便が送り出され、下に置かれたガラスのシャーレの中に蜷局を巻いて収まって行った。

「どう？臭くないでしょ？ウンチの臭いが臭くならないように、毎日お薬を飲んでいるんだから！これでも色々経費が掛かっているのよ。」

男の目に、恥ずかしい排便姿を展示しながら、黄原に背を向けた女が黄原の方を振り返って、少し頬を赤らめながら言った。

排便が終了して、台から降りた女が、台の上に残されたシャーレにガラスの蓋を被せた。

その蓋をされた大きなシャーレの中に残された太く長々と伸びた蜷局を巻く褐色の大便を、黄原は興味深そうに繁々と見詰めた。

「嫌だ！そんな物ジロジロ見詰めないでよ！私だって恥ずかしいんだから！」

女が恥ずかしそうに顔を赤らめて笑った。

「へへ・・・中々良い色艶した、見事な一本糞じゃないか？」

女に指摘され、無意識の内に、女の裸身より、ガラス容器に収まった便の方に視線を向けていたことに気付いて照れるように言った。

女は浴室のシャワーで汚れた肛門周りを洗浄すると、黄原を手招きした。

「洗腸よ！これから、お腹の中を綺麗にするのよ。」と、黄原の手に巨大な500ccのガラス製の浣腸器を手渡した。

その意味を察した黄原は、ガラスシリンダーからピストンを抜き取り、まだ湯船に張られたままのたっぷりとした温いお湯の中に、シリンダーを浸し、ピストンを差し入れて、準備した。

黄原の手には微温湯を満たした太い浣腸器が握られていた。

女に四つん這いの姿勢を取らせ、腰を高く上げさせると、巨大な浣腸器を女の尻にねじ込んだ。

大人の指先ほどもありそうな太い嘴管で女の菊花を抉った時、女がウッと声を上げて体を硬直させた。

黄原は、女の反応に躊躇することなく深々と嘴管を女の身体の中に植え込むと、グッとピストンを押して出た。

透明な容器内の液が次々と女の腹の中に消えて行く様子が映った。

「ああー、入ってくる、入ってくるわ・・・」

男の強い力で乱暴に腸内に印加される強い水圧に堪らないように、そっと声を上げた。

女の呻き声も気にならないかのように、乱暴に注入作業を終えると、尻穴から抜き取った浣腸器を湯船に沈めて、再びシリンダーへの注入を開始した。

その黄原の作業を不安げに見遣りながら

「ああ・・・そんなに入らないわ・・・」と、不安そうな声を上げた。

「入るさ・・・大丈夫だ。」

女の心配を無視するように微笑むと、黄原は再び女の腹の中に、微温湯を注入していくのであった。

都合4回の注入をされ、女の下腹が少し膨らんだように感じられた。

腸内から込み上げる膨満感に女が苦しそうな息をした。

「10分間だな・・・」

黄原が腕時計を見詰めて言った。

「ああ・・・そんなに・・・」

女が哀しげな目で黄原を見詰めた。

「その間、退屈しないように、俺のを嘗めて貰おうか・・・」

黄原が四つん這いの姿勢のままの女の口を押し開けて、再び隆起し始めた肉茎を押し入れた。

女が慈しみを込めた舌使いで丹念に黄原のモノを舐めた。

腸内から込み上げる圧力で、苦しうに、尻を蠢かせるが、顔には出さず、その苦痛を転化するかのよう、一層激しく黄原のモノをしゃぶり上げるのであった。

残り時間が少なくなって、女の苦痛の極限に近づいている事が分かった。

黄原は、女に自分のモノを加えさせながら、脱脂綿を厚く千切って、それで女の尻穴を押

さえ付けた。

脱脂綿を通して、女の肛門が表に向かって迫り上がり、激しく脈動するのが感じられた。

女は、フンフンと鼻で荒い息を吐きながら、一層強く黄原のモノをしゃぶり続けていた。

腸内の液が漏れ出してくるのか、黄原が指を添える脱脂綿がしっとりと暖かく湿って来るのが感じられた。

「時間だ・・・出しても良いぞ・・・」

腕時計を見ながら、肛門に押し当てていた脱脂綿を除いた。

その瞬間、ビビという大きな音を立てて黄褐色の液が噴き出し、弧を描いて浴室の壁や床に四散した。

その撒き散らされた褐色の液の中に、大型のペットボトル一本分の湯に溶かされた腸内の便の残滓が点々と床の上に転がっていた。

既に排便を終了した後だったため、噴出した固形物の量は余り多くなかったが、これで腸内の便は全て排出が終わったように思われた。

浴室内に四散した汚物をシャワーで排水溝に流して清掃し終わると、女は再び腸内を洗うように黄原に求めた。

こうして、数度の洗腸を終えて、最初は黄褐色の液を噴出していた肛門から、最早透明な液しか流れ出さなくなっていた。

「コレで良しと・・・最後はこれよ！」と、黄原に僅かに黄色を帯びた透明な液が満たされた浣腸器を手渡した。

訝る黄原に、「消毒液よ！これで生で入れても、全然平気よ！」と、笑みを浮かべて話掛けた。

たっぷりと消毒液を腸内に注入された女は、

「アアーッ！・・・きついわ！・・・痛いわ！辛いわ！」

と、黄原の方を向いた蹲踞の姿勢で、身悶えながら苦しそうに眉根を寄せて呟いた。

消毒薬が女の腸内で、強い刺激を発生していることが、黄原には分かった。

「ヒイーッ！強いわ！熱いわ！・・・」

女が悲鳴の様な叫びを声を上げ、激しく身を振った。

そして、その腸の内側から込み上げる激痛を一時でも忘れようとするかのように、無我夢中で自分の乳房を両手で激しく揉み上げ始めた。

そんな腸内から込み上げる苦痛に脂汗を浮かべて身悶える女に、冷徹な心を持った黄原も

憐憫の情を感じたのか正面に膝を着いて、強く抱き締めるのであった。

女も一時でも苦痛を忘れようとするかの様に、前から抱き締める黄原の口に強く自分の唇を押し付けた。

黄原もそんな女の激情に応える様に激しく舌を吸い上げた。

「どう？お客さん、気持ち良い？」

そう言うと、女はギュッと肛門を窄めて黄原のモノを搾り上げた。

背面座位で、女のアヌスを貫きながら、前に回した右手で女の乳房を揉み上げ、左手をスベスベする股間に這わした後、指先でツンと尖った女核の皮を優しく剥き上げ、その露出した先端を刺激しながら、

「ああ・・・良いよ・・・ああ・・・こんな気持ちの良い尻の穴は初めてだ！」

と、感に堪えないように掠れた呻き声を上げた。

黄原のモノを喰い絞める肉洞は、突き立てられた肉茎を、強くまた弱くりズミカルに締め上げ、しごき上げ、まるで無限の深さを持つ魔窟の深淵に誘うように黄原のモノを奥へ奥へと吸い上げようとしているかのようにであった。

本来外部に排泄するだけの器官を使って、逆に、突き立てられたモノを奥深くに吸い上げようとする、鍛えられた腸の蠕動運動に舌を巻き、その感性を揺さぶるような快感に酔い痴れるのであった。

「ああー、お客さんのものも良いわ・・・中でビクビク動いて・・・このまま・・・逝ってしまいそう・・・」

直腸から込み上げる太い肉塊との摩擦運動により発する快感に身悶える女が黄原の方に甘えるように背を押し付けた。

「ねえ！私もっと凄い秘技を持っているのよ！特別サービスだから別料金だけど試して見ない？」

艶然とした笑みを浮かべた女が、上体を仰け反らせ、黄原の方に顔を向け耳元で囁いた。

まるで、飢えた貪欲な捕食動物が、久しぶりに口にした餌を無我夢中で嚥下する時の強引に消化器官に注送しようとする食道の蠢きのように、腸の筋肉を駆使して強い吸引力を発揮する常人では出来ないようなテクニックを持ちながら、更に凄い秘技を示そうという女に、黄原の性欲がそそられた。

「ああ・・・試して見たいね！」

黄原は女の乳房を揉み上げ背後から貫いた男根を上下させながら応えた。

「別料金で30万円だけど、あなた払える？」

「30万でも100万でも構わないさ・・・だけど本当に凄い技なのか？」

黄原が肉の筒から受ける快感に酔い痴れながら聞いた。

「今まで、私のこの技を受けて、1分と保った男はいないのよ。」

女が唇に不適な笑みを浮かべて応えた。

「おれは、世間の柔な男とは違うさ・・・もし、俺がお前の言うように1分以内に射精したら、倍払ってやろう。」

黄原の挑戦的な言葉に、俄然闘志を燃やしたように笑みを浮かべると、

「それじゃ、約束よ！」と、女が大きな声を上げた。

女は、背後から黄原に突き刺されたまま、体を振るとベッドの宮に取り付けられた扉を開けて、中から何やら白い鶏の卵のような物を取り出した。

「卵形のバイブよ。」

ニッコリと笑って黄原に示した。

それは普通の一般的な鶏卵と同じ程の大きさで同じような形状をしていた。

女が仕掛けられたスイッチを入れると、ブーンという低い振動音を上げて全体が小刻みに震え始めた。

女は高い周波で振動するバイブを黄原の掌に握らせた。

掌が痺れるような強い振動を発するそれは、電池やモーターを内蔵するためか、実際の卵の何倍もズッシリと重く感じられた。

女はバイブを載せた男の手を掴むと、開き切った自分の股間に誘導し、卵形バイブの尖った先端を前門にあてがうように位置させた。

後門を貫く黄原の肉茎に前門の表皮を通して、微かではあるが、ブーンとする振動が流れ込んだ。

その時、黄原のモノをリズムカルにしごき上げる筋肉とは独立した、女の前の穴の筋肉が、完全に別の動きを始めた。

前門の扉が柔らかく開き、押し当てられた卵形バイブを内部に吸い上げようと蠢き始めたのだった。

バイブを掌に載せた黄原の手首を握る女の腕がグイッと動き、大きく捻じられた膣孔にそ

のバイブが先端から半分程入り込んだ。

卵を大きく呑み込んだ事により、薄い粘膜一枚を通して、黄原の陰茎にバイブの大きさが直接感じられるようになり、はっきりとした振動が伝わって来た。

その陰茎を刺激する鋭い快感に黄原は、思わずアアーッと呻き声を上げてしまった。

肛門の括約筋で黄原の陰茎の根本をギリギリと締め上げながら、膣口の筋肉と膣の筋肉が独立して蠢く様子が、腸管に埋め込んだ肉茎を通して分かった。

本来膣口の筋肉も肛門括約筋も一つに繋がった筋肉であり、この様な独立した動きは不可能のはずだと、驚きを感じた。

バイブを載せていた掌が急に軽くなった。

重量感の在るバイブが、女の妖しい筋肉の蠢きに誘われるように、スルスルと上昇を始めたことが分かった。

後の穴の筋肉で、絶え間なく男のモノに快感を与えつつ、薄い膜一枚を通した、前の穴の筋肉が食欲に卵を丸呑みするように活動を続けていた。

黄原の掌を離れた卵が完全に女の秘孔に姿を没した事を、女の秘所をまさぐる指先が確認した。

黄原の男根が、膜一枚を通して、突然出現した卵形バイブの大きさを知覚し、その痺れるような振動を甘受した。

膣内に完全に吸引したバイブは其処に留まることなく、膣壁の筋肉を激しく強く蠢かせて、更に卵を奥へ奥へと上昇させていくのだった。

奥深くねじ込んだ黄原の男根の表面を丹念になぞるように、ブルブルと振動しながら卵が通り過ぎ、その奥の行き止まりにまで達した。

裏から責める肉棒と、膣の行き止まりまで達したバイブが女を激しく刺激するのか、一瞬女が体を震わせて辛そうな呻き声を上げた。

そして、その頂点にまで達したバイブは、今度はゆっくりと産道を下降し始めた。

直腸内に収められ黄原の肉茎を裏側からモゾモゾとなぞるように刺激しながら、膣内の最下点まで到達した。そこでほんの僅か留まっただけで、女の筋肉が激しく動き、卵は、再びまた上昇を開始始めた。

直腸の筋肉を駆使して、黄原のモノを強く、そしてリズミカルに締め上げ、奥へ奥へと誘いながら、その男根の最も繊細な神経が通る線に沿って振動しながらゆっくりと上下運動を続けるバイブに責め上げられ、生まれて初めて経験する、得も言われぬ快感に、思わず

我を忘れそうになった。

黄原は女の乳房を揉むことを忘れ、卵を呑み込んだ秘所の周りとは下腹に手をやり、卵の動きを確かめた。

卵が上下に移動する状況が、下腹の筋肉の緊張とバイブの発する振動を通して下腹を撫でる黄原の手に伝わった。

そして卵形バイブが最下部まで降下した時は、黄原が触れる秘部の薄い襷を通して、ブルブルとした振動が伝わって来た。

柔らかい脂肪を載せた太股が、ビクビクと痙攣して、大腿の筋肉まで動員して、卵の上下運動を操作していることが分かった。

その卵の移動は、同時に女の性感も昂進させるのか、黄原が触れる秘所からは夥しい花蜜が止め処なく流れ落ちていた。

その下腹と秘部の複数の筋肉を同時に独立して酷使するという過酷な運動は、女に極度の疲労を要求するようで、ゆっくりと卵を上下動させながらも、女は全身を熱く火照らせ、辛そうに眉根を寄せて、苦しげに息を吐き続けた。

嵐のような激烈な快美感をおのれの肉棒に受け、快感の終着駅である射精を求めてビクンビクンと脈動する怒張を、強靱な意志力で何とか喰い止めようと、全身汗塗れになって、苦しげな呻き声を上げながら、身悶え続ける黄原であった。

黄原の崩壊が間近に迫った事を感じた女が、倍のお金をせしめようと、勢いついて、ここを先途と責め上げた。

黄原の快感に身悶えする様子から、陰茎の裏筋にある最も敏感な箇所を発見した女は、その部分を中心としてバイブを押し付けるように膣内の卵を上下させ、薄い粘膜一枚を挟んだ肉塊の周囲を押し包むように左右に往復させた。

そのジーンと痺れるような余りに強力な快美感に、黄原は意識が白く飛びそうになるのを感じた。

しかし、痙攣したように体をガクガク震わせながらも、これまで何百人もの女をイカせて来た自分が易々とイカされてしまうと言う負けを認めたく無いという対抗心から、超人的な抑制力により最後の一線を越える事を押し止めていた。

一方女の方も、極度に神経を集中させ、筋肉を酷使させる運動は、同時に二つの性感帯に耐えようの無い性的刺激をもたらす結果となり、快感の頂点を求めて、神経と筋肉が自制

も効かず暴走を始めたことを感じていた。

「アアッーもうダメ！アッー！早くイッて！ねえ早くイッてーえ！！」自分の意志を裏切り、食欲なまでに性欲の充溢を希求する女の本能に支配されてしまったかのように、快感の頂点を目指して暴走を始めた肉体に恐怖を覚えたのか、このままでは自分の方が先に自失してしまうと、悲鳴のような叫び声を上げた。

いつしか、激烈な肉欲の疼きに我を忘れたように、女は、本能的に両手で自分の乳房を抱え込み揉み上げ始めていた。

快感の頂点を、まさに徳俵に指一本の形で踏み止まる男と、抑えることも効かず、快感の頂点目指して爆走し始めた女が、体を抱き締め、乳房を揉み上げ、汗に塗れて苦闘していた。

劈<sup>つんざ</sup>くような女の悲鳴と押し殺した男の声が同時に上がり、女が激しく絶頂を極め、男も女の腸内に熱い飛沫を放射した。

激しかった絶頂の余韻に浸るように、ベッドの中で男と女が抱擁し合っていた。

互いに愛おしむように熱くて長い接吻を交わした後、

「お客さん、凄いわね・・・こんな強い人に会ったの始めて・・・」

と、はにかんだ様に笑みを浮かべた。

「これと逆に、前に貴方のモノを入れて、後にバイブを入れて同じような技も出来るんだけど、・・・今日はもう駄目。腰が震えて出来そうに無いわ・・・貴方が強過ぎるからいけないのよ。」

と、拗<sup>こ</sup>ねるような目で黄原を見詰めて、指先で男の体を優しく愛撫しながら言った。

「俺もこんな良い女とヤッタのは、初めてだぜ・・・」

と、感極まったように呟いた。

そして、暫くの間、何か思いを巡らすように視線を彷徨させた後、言葉を継ぐと、

「決めた！俺はお前をここから連れ出し、俺の物にする！」

と、きっぱりと口にした。

この突然の黄原の言葉に口をあんぐりと開けて、ポカンとした表情を浮かべた後、

「あなた！気は確かなの？此处は岡照組の経営するソープで、私は岡照組に囲われる女なのよ！・・・例え、冗談でもそんな事が岡照の組員の耳に入ったら、あなた半殺しの目に遭うわよ。」

と、女が男の無謀を諭す様に言った。

「なに、岡照組なんか恐れることは無いさ、・・俺は自分が欲しい物は絶対に手に入れる主義だ。俺に考えがある。・・俺を信じて待っていてくれ」

と、妙に自信に満ちた表情で女をじっと見詰めながら言うのであった。

黄原は迎えに来た配下の若い衆の運転するベンツの後部座席に収まると、心地良く疲労した体をゆったりとした座り心地の良いシートに預けた。

車に揺られながら、ボンヤリと薄く目を閉じていると、先ほど体験した女との燃え上がるような情事の光景が次々と蘇り、言いようの無い高揚感が込み上げて来た。

シルバーフォックスと源氏名を名のるソープ嬢、・・本名は銀子と言っていたな・・

事業に失敗した両親が岡照組から借りた借金の形に取られ、15才の時から体を切り売りする生活をしているとの事だった・・

その借金の額は今では、利息も積もって10数億円以上か・・

銀子からベッドの中で寝物語に聞いた話を呟きながら反芻してみるが、心の中では、その売春婦らしさを感じさせない悪戯っぽい笑顔が浮かび上がり、男を誘う女性フェロモンを放散させるかのような髪の毛の香りや、股間から立ち上る馥郁たる牝の臭いの記憶が蘇り、体が火照り、今日何度も放出したと言うのに、また股間がジワジワと熱くなった。

そして、硬く熱く膨張した黄原のモノを咥えて有頂天にさせた口技が蘇り、突き立てた怒張を搾り上げその奥へ奥へと誘う前と後の極上の肉孔の記憶がマザマザと蘇ると、疲労困憊しているはずの黄原の男のモノがズボンの中で、再びムクムクと起立する気配を見せていた。

黄原が去った後、銀子は次の客が来るまでの間、一人部屋の中で疲弊した体を休めていた。

「今日で丁度10年目か・・」

壁に掛けられたカレンダーをボンヤリと見詰めて独り言を呟いた。

銀子の親は、かつては大きな会社のオーナーであった。

裕福な家庭にやっと誕生した一人娘として両親は銀子のことを溺愛し、その将来を期待していた。

銀子の名前も、高名な実業家にあやかって一字を貰って名付けたと聞いたことがある。

恵まれた環境で何不自由無く育ち、大金持ちや上流家庭の子女が通う有名な小中学校に英

国製の高級外車に乗りお抱え運転手に送り迎えされる毎日であった。

そんな何不自由無い、銀子の環境が一変したのは、銀子が中学3年に進級する頃であった。数年来続いた社会的な景気の大幅な落ち込みで、父の経営する事業も次々と採算が悪化し、取引先の倒産などが重なり資金の回収が困難となり経営を圧迫させていた。

思わしくない業績を回復するため、次々と打った手も尽く裏目に出て、逆に経営の足を引っ張るようになってしまった。

会社存続に必要な資金を得るため、あちこちの銀行や債権者から金を借りて回ったが、経営状況はいつこうに改善することなく、逆に重く負債がのし掛かることとなり、銀行も融資を断るようになった。

そして、とうとう一時的な資金を繋ぐため、闇の金にまで手を出して締まったのだった。

結局、父の会社は倒産してしまい、債権者達の取り立てに合うことになった。

自分も中学卒業を待つように、闇の債権者に借金の形として誘拐されてしまったのだった。卒業式を終える間も無く、暴力団の男達の手により、卒業式の会場から拉致されるようにここに連れ込まれ、それ以降現在まで、ここで男達にこの肉体を切り売りする生活をして来たのであった。

暴力団岡照組が父に1億円を貸したと、借用書を見せ付けられたことがあった。

そして、この1億円を完済するまで、ここで男達を相手に働くように命じられたのであった。

しかし、いくら銀子が身を切り裂いて男達に捧げたとしても、闇の金利で膨らんで行く莫大な借金を返済出来る当ても無く、このまま一生ここから出られないのでは無いかと思っていたのであった。

何時か白馬に跨った王子様が現れて、囚われのお姫様を助け出してくれる一と、言うような少女じみた幻想を持つ程、最早ロマンティストでは無いが、丁度10年目の今日現れた、自分をここから連れ出すときっぱりと断言した男のことが何故か気になるのであった。

「あの男、黄原と名乗っていたな・・・」

銀子が黄原の記憶を蘇らせていた。

逞しい体、厚い胸板、太い筋肉・・・それから、背中一面に彫られた色鮮やかな般若の刺青。

そして、その精悍な体のあちこちには傷跡が付いていたことを思い出していた。

ヤクザの組のお抱え女である銀子には、その傷が刃物や銃砲による傷であることが分かっ

ていた。

だから黄原も、自分の生き血を吸う暴力団員と同じようなヤクザ者で在ることは間違いな  
いと思ったが、何故か黄原と一所にいと、他の男では味わえないような安らぎ感のよう  
なものを感じるのであった。

「糞！ どうして銀子の事が、頭から離れないんだ！」

黄原が忌々しげに頭を振った。

始めて銀子の体を抱いてから数日が経っていたが、その記憶は薄れることなく益々強くな  
り、常に黄原の心の中を占めていた。

「糞！ 俺としたことが本当にあの女に惚れてしまったのか？」

そう呟きながらも、臉の裏には銀子のコケティッシュな笑顔が浮かんで来ていた。

女など自分を気持ち良くさせるための湿った壺が取り付けられた唯の道具に過ぎないと  
常々思っていた黄原にそんな高校生のような純真な感情が残っていたことに自分でも驚き  
を覚えるのであった。

黄原の属する目高組も売春組織を抱えており、気まぐれに何人かの娼婦と接した経験はあ  
った。

売春婦は皆、自分は大企業の社長の娘であったとか、親は貴族の流れを汲む上流社会の人  
間だったとか、医大で医学の勉強をしていたが、家の都合で身を売らなければならなくな  
ったとか、自分の身の不幸を脚色して言うのが常であったが、全て見え透いた嘘であるこ  
とは、在り在りと分かった。

しかし、銀子の話を聞いているとまんざら嘘では無さそうな感じがした。

興味本位に10年程前の複数のニュースを調べてみると、銀子の言っていた会社は存在し、  
1300億以上の負債を抱えて倒産した事が報道されていた。

東京オリンピックから万博に続く高度経済成長に乗り、一代で巨万の富を築き、事業を拡  
大し多角事業化を図り、沢山の関連会社を傘下に抱え繁栄していた会社であったと言うが、

1973年に発生した石油輸出国機構参加国による大幅な原油価格の値上げ—所謂オイル  
ショックによる狂乱物価とその後長く続いた不況が最初の躓きであったと解説していた。

その不況下で子会社の多くが不採算となったが、経営判断を誤って子会社の整理が遅れた  
ため、本体の経営も悪化し、更に取引先の倒産が相次ぎ経営難に陥ったと書かれていた。

そして、経営者の家族は倒産と同時に姿を隠し、約2億円以上の行方不明金があることが

記事に載せられていた。

恐らく会社の残り金を着服して逃亡したのであろうと、記事では推測していた。

裏の世界に長く生きる黄原には、その間の筋書きが浮かんで来た。

ー 運転資金に困窮した銀子の親の会社に目を付けた岡照組は、裏の情報網を通じて資金提供を申し出た。

しかし、それは困窮した会社を救済するのが目的ではなく、今にも死に絶えそうな会社に齧り付き最後の死肉を漁ることが目的だったのだ。

次々と打った手が全て裏目に出ていた銀子の親は、経営者としての正常な判断力も最早失われており、暴力団の恐ろしい金に手を出してしまい、結果、岡照組に全てを支配されることになってしまった。

計画通り、岡照組は銀子の親の会社を破滅させ、他の債権者が嗅ぎ付ける前に、会社に残された資産を横取りして、その罪を銀子の両親に被せてしまった。

恐らく二人は岡照組に殺されてどこかに埋められているのだろう。

従って岡照組は火事場泥棒のように暴利を貪って、最初から借金など帳消しになっていたはずだ。

所が、銀子の美貌に目を付けた岡照組は、強引に銀子を誘拐し、有りもしない借金の片に、

10年に渡って売春行為を強制しているのだー

岡照組らしい阿漕なやり方だーと、思った。

さて、銀子をどうやって助け出すか？ーだが・・・恐らく端っから銀子には借金など無い筈だ。しかし、それを交渉しようにも証拠が無い。

逆に、岡照組の方は借金の借用書を持っている訳だから、黄原が掛け合っても旨く行くとは考えられない。

黄原の才覚を持ってすれば一億円位なら簡単に用意出来る金額ではあるが、これまで幾ら銀子一人で借金を埋め合わせたのか判らないが、恐らく闇の利息で増大した借金の額は、10年前よりも一桁も二桁も膨らんでいる筈だ。こうなると黄原一人で、この金額を用意するのは、かなりのリスクを覚悟しなければ困難だと思えた。

岡照組と自分の所属する目高組は、共に巨大暴力団組織である村崎會の門下であり、岡照

組の岡元照男組長も目高組の奈和組長も若い頃、村崎親分の元で修行して来た事は両者の組員の中で知らぬ者は無かった。

互いに地方の弱小ヤクザの組に生まれ、先代の後を継いだ境遇も似ていた。

二人は互いに励まし合い、切磋琢磨し合って現在の二つの大きな組を築き上げて来たのだった。

従って岡元組長も奈和組長も同じ釜の飯を食い合った親友同士であり、二人の仲は非常に良好であった。

奈和組長から岡元組長に説得して貰うか？

銀子の稼ぎ方を考えれば、今や銀子は岡元組の重大な資金源と成っている筈であるから、あの吝嗇な岡元組長が、いくら親友からの頼みだとは云え、おいそれと大事な金蔓を手放すとは思えない。

事実、以前岡元の親筋に当たる村崎會の村崎親分が、銀子を身請けしたいと希望した事が在る様だが、岡元は断っているとの話だ。

自分の親筋の村崎親分に対しても首を縦に振らない岡元が、奈和から頼まれて、幾ら親友だからと言って手放すとは思えないだろう。

それに、奈和組長だが、自分の組にも売春組織を持っているくせに、女に対して妙に潔癖的な所がある。

普通、暴力団の組長と云えば、あちこちに愛人を抱えているのが当然であるが、そう言う女で浮いた話を聞いたことが無い。

性格的に、他の男の手垢の付いた水商売のような女や男に直ぐ身体を許す尻軽女を毛嫌いするような所があり、組の売春婦とさせるため借金の片に拉致してきた人妻にも、例えどんな美人であっても身体に染み込んだ男の匂いを感じるのか指一本触れた事が無い。

目高組で一番の幹部の位置にいる女好きの赤石でさえ、仲間を前に声高に女の話をしている所に親分が来たりするとピタリと話を止めてしまう程だ。

従って、奈和親分に余所の組の売春婦を身請けしたいと頼んでも、動いてくれるとは思えなかった。

色々思案を重ねたが、どうにも良い考えが浮かばなかった。

「しっかりしろ！俺は、この才覚一つを頼りに、これまで欲しいモノは何でも手に入れて来た男じゃないか！」と、諦めそうになる自分の心を鼓舞した。

「・・・ならばどうするか？」

「・・・力尽くで、奪い取るしか無いのでは無いか？・・・」と、思いが至るのであった・・・

美咲

「名前は、美咲と言うんだ。今日からみんなの仲間だ！宜しくやってくれ！」

岡照組の経営する秘密ソープランドの運営を任されている内田が、手空きの売春婦を集めて挨拶した。

ソープランドの事務室の中に岡照組の抱える売春婦達が、下着も着けない裸の上にタオル地のバスローブを羽織っただけの姿で集合していた。

女達を目線の先には、内田の隣で恐怖に小さな体を震えさせる少女の姿が在った。

まだ、歳の頃は15か16位であろうか？長い黒髪を三つ編みのお下げにして、白い清楚なニットのセーターに赤いチェックのスカートを履いた、まるで世間の汚れを知らない様な清纯そうな少女が怯えた青ざめた顔でガタガタと細い体を震わせていた。

「可哀想に・・・こんな年端も行かない子供に男を取らせるんだよ・・・」

声には出さなかったが、居並ぶベテランの売春婦達が心の中で呟いた。

大方、借金で首が回らなくなった両親から生爪を剥ぎ取る様に奪い取って来たのだろう、と思った。

「おい！銀子！確かお前も美咲と同じ位の歳で、此处に来たはずだな！暫くお前に預けるから、男に抱かれる心構えとか、男のあしらい方なんかを教えてやれ！」

居並ぶ売春婦の内に銀子の姿を見付けて内田が声を掛けた。

「美咲、良いか？このお姐さんわな、お前と同じ年齢でこの仕事を始めて、今じゃナンバーワンの稼ぎ頭だ！銀子に倣ってお前もしっかりと稼ぐんだぞ！」

と、言うのと怯えて目にいっぱい涙を溜めた美咲の手を取って銀子に押し付けた。

銀子が客を相手に使う部屋の中で、ベッドの上に小さく腰掛ける少女と化粧台用のスツールに腰を降ろした銀子が向かい合っていた。

まだ男女の睦み事など何も知らない少女の様であったが、部屋の雰囲気や部屋の中に置かれた異様な調度物に、何か得体の知れない恐怖を感じているように、時々チラッと様子を

覗っては怯えた表情を浮かべていた。

銀子は目の前で体を小さく屈めて怯えた表情を見せる少女に、自分が岡照組に誘拐されて、ここに連れ込まれた時の恐怖に苛まれていた自分の姿を重ねていた。

まだあどけなさの残る少女の緊張を少しでも解す様に銀子が優しく言葉を掛けた。

銀子の問い掛けに、美咲がポツリポツリと身の上を語り出した。

時折恐ろしかった事を思い出したのか、ワッと大声を上げ両手で顔を覆って泣き出したり、嗚咽して言葉を詰まらせた。

自然と、ベッドに腰掛ける美咲の傍に寄り添い、嗚咽する少女の背を優しく撫でるのであった。

美咲から聞いた話は、大方、銀子が予想した通りのものであった。

個人会社を経営していた両親が、事業に行き詰まり、岡照組から金を借りたばかりに、娘を借金の片に取られることとなったのだった。

怯えた様に震える華奢な身体を、愛しみを込めて抱き締めながら、銀子は少女の編まれた髪を優しく解きほぐした。

腰まで届きそうな長い黒髪が解けて、さらりと流れた。

涙をいっぱい溜めた潤んだ瞳で銀子の方を見つめる美咲の顔を改めて見詰めた。

長い黒髪を流した美咲の顔には、何も知らない無垢の少女の殻を破って、これから美しい大人の女に開花しそうな、ほころぶ寸前の硬い蕾の様に感じられた。

その硬い殻を通して、男の心を引きつけて止まない様な女の貌が垣間見えた。

こんな可愛い娘だったら男達は黙っていないだろう・・・

美咲の美貌の奥に、肉欲に飢えた男達が、先を争ってその華奢な身体を求めることになるであろう不幸を見いだすと銀子の心は重く塞がれるのであった。

優しい両親の愛情に育まれ無垢のまま育って来たこの幼い女が、これから獣の様な男達の餌食に成るのかと思うと銀子の胸は重苦しく詰まった。

まだ男を知らない無垢の女体の持つ一番の資産である秘めたる宝を、無慈悲な男にこじ開けられ、無理矢理、奪い取られるのだ。

泣いても叫んでも許して貰えず、その少女の悲鳴が残忍な男達には心地良い響きと聞こえるかの様に、冷酷な男達は益々嵩に掛かった様に少女を責め立てる事だろう。

その時の強烈な痛みと恐怖が銀子の心の中にはっきりと蘇った。

そして、無理矢理、女にされた少女は女体調教師と呼ばれる残酷な男に引き渡され、前の孔も後の孔も無慈悲に押し広げられ、男を喜ばせるための技術をその幼い体に覚え込まされるのだ。

これから目の前の少女に襲い掛かる絶望的な事態に思いを巡らせると、銀子には昨日の事のように鮮明に蘇り、今では男を喜ばせるための唯の器官と化してしまった秘所がキリキリと痛みを覚えた。

「美咲ちゃん・・・」

銀子が何かを決意した様に目の前の少女を見詰めて言った。

「貴方は、此処に居てはいけない！お姉さんが逃がして上げるわ。」

突然の銀子の言葉に少女は、銀子の方に顔を上げて、泣きはらした目で銀子の目をジッと見詰めた。

縋る様に見詰める美咲の頬がポッと赤くなった。

銀子は、立ち上がると化粧台の引き出しを開けて中をゴソゴソと掻き回した。

客から貰った金品は、全て岡照組に没収されてしまっていたが、それでも暴力団員の目を盗んで、客から貰った幾ばくかのチップを隠していたのだった。

合計で20万円程貯まっていた現金を残らず驚掴みにすると、「さあ、これを持って」と、美咲のスカートのポケットにねじ込んだ。

「いいこと、私の後を遅れない様に付いて来るのよ！」

自分の背後に美咲を庇う様にして、危険な賭けに挑む様に真剣な眼差しで美咲の目を見詰めて言った。

美咲も覚悟を決めた様に緊張した表情で肯いた。

部屋のドアをそっと開けて左右を覗いたが幸い見張りの暴力団員の姿は見えなかった。

廊下の何方所かには監視カメラが仕掛けられていることを銀子は知っていたので、なるべくカメラの死角になるような所を選んで廊下を進んだ。

扉で隔てられた部屋の中から悲鳴にも似た女の嬌声と獣じみた男の歓声が漏れ聞こえていた。

その生々しい男女の呻き声は、清純な少女には、あまりにも毒々しいものであり、思わず

美咲の両耳を覆ってやりたい衝動に駆られたが、その余裕は無かった。

この岡照組の経営する秘密売春組織の建物は裏通りの7階建てのビルに在った。

1階は岡照組の経営する怪しげな貸金業のオフィスとなっており、2階は暴力団員の詰め所となっていた。

秘密クラブの会員は、ビルの入り口から階段を登ってこれらの階を通らず直接3階の受付に上られるようになっていたが、もし何かあったら、組員が直ぐに飛び出して来て、地上と3階の間の階段を封鎖出来るようになっていた。

そして、3階の受付も常時施錠された厚い鋼鉄の扉で表と隔離されていて、ドアの脇に在る小部屋の中に常時組員が待機しており、ドアの外の様子を写したテレビモニターで常に監視していた。

そして、ドアの横にも常時組員が待機していた。

秘密クラブの会員が訪問した時は、先ず小部屋の中の男がテレビモニターの画面で不審な様子が無い事を確認して、小部屋の硝子窓越しにドアの傍に待機する男に知らせて、ドアの男は厚い扉に取り付けられた覗き窓から、会員名簿の顔写真と照合し確認してから、再び小部屋の中の男に合図し、部屋の中からリモコンでドアのロックを解除して貰う。その後、ドアの男は、ロックを解除されたサムターンを回して扉を開けて、客を招き入れる手順となっていた。

即ち、常時入り口のドアには二人の岡照組の組員が張り付いており、二人が連携してドアを開ける操作をしなければ、どちらか一人では、ドアを開けることも出来ない仕組みとなっていた。

まだ鮮鋭に映るカメラが市販されていない時代であったので、この様な手の込んだ警備体制となっていたが、二人の組員が連携する事により非常に厳重な警戒態勢となっていた。

これらの厳重な警戒態勢は、警察の捜査から内部の秘密を守るために施されたものであるが、同時に組で囲っている女の脱走を防ぐ役目も持っていた。

従って、この建物から逃げ出すためには、先ずこの厚い扉の傍の二人の見張り人を何とかしなければならなかった。

銀子の部屋は最上階の7階に在ったが、奇跡的に誰にも見とがめられず、3階まで降りてくることが出来た。

恐らく廊下の監視カメラを覗いている男達は油断し切っており、大方仲間同士で博打でも

売って監視カメラのモニターを見ていなかったのだらうと思ったが、最後の防壁に待ち受ける二人の男にはそうは行かないだらうと覚悟した。

物陰からドアの傍に控える男の姿をチラッと確認して、背後に控える美咲に小さく囁いた。

「いいこと、あのドアはドアの横にある小部屋の中からリモコンで解錠しないと開かないようになっているのよ。だから私が小部屋の中にあの男を誘い入れて、解錠するから、ドアのロックが外れる音がしたら、そっとドアを開いて下の階の組員に気付かれない様に逃げるのよ・・・」

「でもそんな事をしたら、お姉さんが・・・」

自分を逃がした後に銀子が受けるであろう、責めを心配する様に美咲が潤んだ瞳で銀子の目を見つめた。

そして、一緒に逃げだそうと言う様に銀子の両腕を掴んだ。

「私の事は良いのよ・・・それよりも、リモコンで解錠しても鍵の外れている時間は少しだけだから、直ぐに逃げるよ。」

ヤクザの根城から脱走を図る緊張感で顔を強ばらせる美咲を勇気付ける様にニッコリと微笑んだ。

そして、一人物陰から鋼鉄の扉に続く廊下に身を曝した。

扉の傍の椅子に腰掛けていた男は、うたた寝していたようであったが、流石に銀子が自分の方に近寄って来るのに気付いて、ハッと目を覚ました。

「何だ、銀子じゃないか？・・・駄目だらう、無断で下まで降りて来ちゃ！」

男は椅子に腰を降ろしたまま、咎める様に言った。

疑り深そうな男の視線を無視する様にウフフと艶然と微笑むと、

「ご免なさい・・・東さん・・・でも、今夜は、珍しくお客様が来ないでしょう・・・だから何だか・・・とっても・・・身体が疼いて寝付けないのよ・・・」

素肌の上にタオル地のバスローブを羽織っただけの姿で、ローブの上から乳房と股間を揉む様な仕草をして、ナヨナヨと身体をくねらせた。

その妖艶な姿に東が思わず生唾を呑み込んだ。

「そうか、お前も長年こんな泥水稼業を続けている間に、片時も男無しでは居られない淫乱な身体になったんだな・・・」

銀子の扇情的な艶技に乗せられ、最初の猜疑心は込み上げて来る性的欲望に押し退けられようとしていた。

込み上げる陰情にギラギラするような眼で銀子の方を見つめた。

「ウフフ・・・そうよ・・・だから・・・その小部屋の中で山本さんと一緒に 3 人で楽しみましょう。」

椅子に腰を降ろしたままの東の腕を掴むと頬擦りをするように東を立ち上がらせようとした。

何時客が来るか判らないと拒む東を、客が来たらその時には戻れば良いじゃないの、と囁かれ銀子の身体から発する淫靡な雰囲気に対し切れず席を立つのであった。

監視室の中で硝子窓越しに外の様子を覗いていた山本が、銀子に腕を引かれる様に東が小部屋の方に向かって来たことに驚いた表情を浮かべたが、二人の様子から全てを察したようであった。

ドアを開けて東の背を押して小部屋に押し込み自分も扉をくぐりながら、

「御免ね、山本さん、今夜は何故か体が疼いて寝付けないのよ・・・」

表の様子を監視するためのモニター画面が幾つも設置された壁に面して設置されたリモコン操作卓の椅子に腰掛けたまま、驚いた表情を浮かべる山本に艶めかしく身体を蠢かせながら銀子が怪しげな笑みを浮かべて囁いた。

「でも、今夜の事は、三人だけの・・・ヒ・・・ミ・・・ツ、よ！」

と、赤いルージュの引かれた唇に人差し指を立てながら、色っぽく片目を瞑って囁き掛けた。

秘密クラブの売春婦を組の男が抱く事は、規則で堅く禁じられているため、銀子の名器の噂だけは聞いていたが、実際に抱く事は出来ず何時も垂涎の対象でしか無かった。

今その銀子が目の前にいて、その身体を堪能出来るかも知れないと思うと、逸る心の中で厳しい組の掟も何処かに消し飛んでしまっていた。

幸い前の見張り番と交代したばかりで、次の交代まで時間はあるし、通常この時間帯に来客は無いはずだと思った。

熱に浮かされた二人の男をあやす様に、二人の首根っこを両脇で絞める様に抱き抱えると、どっかとモニター画面の並べられた机の上に尻を載せ、背中で画面を隠した。

「ねえ、銀子の此処をこんなに近くで見たことある？」

厚いタオル地のローブの前を開いた。

そこには下着も着けず剥き出しの下腹が現れた。

ツルツルに剃毛され、覆い隠す物が無い秘裂が、二人の男の目の前に拡がり、男達が瞬き

もせずその部分を血走った目で注視した。

「もっと近くで良く観て！」

左右から凝視する男達の後頭部を掴む様にして、男達の顔を股間に押し付けた。

男達が見やすい様に、机の上で股を大きく開いた。

「ねえ？銀子の此处はどんな匂いがする？」

と、二人の男の首根っこを押さえ付けて、大きく開いた太股に押し付けた。

其処は常時高価な香水が塗されており、男の鼻を擽る甘美な香りが満ちており、その薔薇の花の様な高貴な香りの奥に成熟した女の香りが混じり合っていた。

男達は、開け放たれた女体の中心に鼻を押し付けるようにして、憑かれた様に銀子の股間から立ち昇る怪しげな女の性臭を嗅ぎ続けていた。

二人の男は女陰から発する匂いだけで既に幻惑されてしまったかに見えた。

「ねえ、オッパイも吸って！」

と、言うのとガウンの紐を解いて乳房を露わにした。

まるで母猫の乳房を夢中で吸い上げる子猫の様に二人の男は、両側から銀子の剥き出しとなった乳房に武者ぶり付き、柔らかで弾力のある乳首を口に含みざらつく舌でしゃぶり上げた。

柔らかなローブが銀子の肩から滑るように流れ落ち、机の上に並んだりモコン錠の解錠ボタンの上を覆った。

「ねえ！ここを触っても良いのよ！」

二人の手を掴むと開き切った股間に導いた。

二人の男は口唇で銀子の乳房を貪りながら、指先で勃起し始めた木の芽をまさぐり、ジットリと濡れ始めた秘裂を奥まで堪能した。

「ねえ・・・もっと銀子に悪戯して・・・ああ・・・良いわ！」

銀子の艶技に煽られ、今や二人の男は必死の形相で銀子の身体を貪っていた。

東が片方の乳房を咥えながら、手でもう片方の乳房を揉み上げていた。

一方、山本は銀子の股間に顔を突っ込み、舌先を甘い樹液を滴らせる股間に舐ませていた。

山本が作業しやすい様に、机に腰を降ろしたまま、更に大きく股間を広げた。

見張りの男達が、自分の肉体に完全に心を奪われて、注意力が無くなっていることを確信した銀子は、硝子窓越しに物陰から様子を覗っている美咲に目配せした。

銀子に言われていた様に美咲が腰を屈め、硝子窓から見えない様にドアの傍まで進んだ。

銀子は益々男達を夢中にさせるように、男達の背を愛撫したり、鼻を鳴らして、身をくねらせた。

そして、自分の肉体に男達が、完全に溺れて意識がモニター画面に行っていないことを確信して、後ろ手を机の上にはわせ、解錠ボタンを探り当て、被せられたバスローブの隙間から音が漏れない様に注意しながら、ボタンをそっと押した。

金属が開く乾いた音がして、鋼鉄の扉のリモコン錠が解錠されたが、銀子に心を奪われたままの二人の男の耳には入らなかったようであった。

音を立てない様にドアが僅かに開き、そして音も無く閉じたことを硝子窓越しに確認して、ホッする気持ちが込み上げて来た。

「アアーッ！もう駄目！ねえ！突いて、二人の逞しいモノで銀子を突いて！」

股間をビショビショに濡らしながら、銀子が叫ぶ様に言った。

警察官の捜査や不審な動きが無いかを監視するため、廊下や階段やビルの周囲には幾つもの監視カメラが仕掛けられており、その様子は、この部屋のモニターに映し出される事になっている。

従って、美咲が扉を開けて表に逃げ出しても、その姿を監視カメラに捕らえられては、脱走は失敗する事になる。

美咲がこのビルから完全に逃げ出し、監視カメラの視界から逃れ出る時間を稼ぐために、更に自分に注意を集中させようとしたのだった。

「嫌！一人ずつなんて！二人で同時に突いて！」

投げ捨てる様に衣類を脱ぎ全裸となった二人の男が、どちらが先に入れるか口論している様子を見て、じれる様に叫んだ。

山本を床に横たえさせると、その上に覆い被さる様に身を預け、前の穴に山本の隆起したモノを迎え入れ、背後から東に貫かせた。

東の体勢はモニター画面に背を向ける形となり、こうすれば、モニター画面で表の様子を知ることは出来ないだろうと思った。

山本の位置からはモニター画面が目に入るかも知れないが、自分が顔を寄せて口を吸い合えば、画面に注意が行くまいと思った。

気付かれない様に山本の口唇に自分の唇を押し当てると、舌を絡め合って、タバコ臭い唾液を吸った。

二人の男根を下腹に含んだまま、銀子は有りっ丈の秘術を駆使して、男達を夢中にさせモ

ニターに意識が行かない様に仕向けた。

「おお！これはスゲー！こんな良い女とやったのは初めてだ！まるで中にグイグイ吸い込まれて行く様だ！」

「俺も女の尻の穴に入れたのは初めてだがこんなに良いモンだとは知らなかった！・・・おお！又、締め上げるぞ！」

銀子の計略とも知らず、二つの孔を占領する男達は、その良く鍛えられた肉の技巧にすっかりのめり込み、今は無我夢中となって玉の様な汗を浮かべながら必死に腰を振り立てていた。

「馬鹿野郎！お前達何してやがんだ！」

不意に小部屋の中に内田の怒声が響いた。

銀子に前後から突き立てた儘、山本も東もまるで金縛りの様に全身を硬直させて、見る見る恐怖に顔色が青ざめて行った。

ジットリと濡れた銀子の肉洞の中で二人の男のモノが勢いを失い小さく萎んで行くのが判った。

ふと気付くと何人ものヤクザ者が狭い部屋の中に詰めかけており、襟首を掴まれる様な姿で泣きはらした顔をした美咲の姿もあった。

自由への扉を押し開いて、表に飛び出した時に、折悪しく戻って来た内田と鉢合わせしてしまったのだった。

そして、下の階を占めるヤクザ者達に苦もなく取り押さえられてしまったのだった。

この世に神など居ないのでは無いかーと、恐怖に硬直したままの二人の男の冷たい身体に挟まれながら、暗い気持ちが込み上げて来た。

怒気を撒き散らす様に内田が、二人の男にサンドウィッチにされたままの銀子に近づくと、銀子の顔を掴んで思い切り張り上げた。

美咲の悲痛な叫び声が部屋の中に響いた。

美咲の脱走未遂の話は岡元組長にまで伝わって、岡元が秘密クラブにやって来た。

銀子の部屋の中では、脱走に失敗した美咲と銀子を取り囲む様に、岡元を中心に据えて、この秘密クラブで働く暴力団員が取り囲んでいた。

これから行う脱走未遂に対するリンチを見せしめとして示すため、この秘密クラブの売春

婦も集められていた。

部屋の隅には、先輩ヤクザ達に殴る蹴るの暴行を受けて、顔を紫に腫れ上がらせた東と山本が背を寄せ合い、意識も失った様に、グッタリと脚を投げ出して床にしゃがみ込んでいた。

銀子の部屋は決して狭い部屋では無かったが、大勢の人間が詰め寄ったため、人息でムッとする様に熱くなっていた。

しかし、その室温も感じない様に青ざめた顔をした美咲がガタガタと身体を震わせていた。そんな美咲の恐怖心を宥めるように、全裸のままの銀子が、庇う様に強く抱き締めていた。

「おい！銀子！お前ナンバーワンの稼ぎを上げているからと言って良い気になっているんじゃないか！？」

銀子が客と寝るために使うベッドにどっかりと腰を降ろし、腕組みしていた岡元が、スックと立ち上がると、怒気鋭く二人の前に迫った。

「そんな物は関係ないんだ！ここから逃げだそうとするヤツはどういう目に合うか、とくとその身体に教えてやる！」

と、ほざく様に言うと、美咲から引き離す様に銀子の身体を思い切り蹴り上げた。

岡元に蹴られて、ゴロツと床に倒れる銀子の姿を目の当たりにして、美咲が引き攣った悲鳴を上げた。

ここから逃げようなんて太い女はこうだ！こうだ！と、岡元が銀子の後ろ髪を鷲掴みにして引き起こすと、何度も何度も銀子の顔に張り手を喰らわせた。

岡元に殴られても銀子は呻き声一つ上げなかったが、その平手打ちを銀子が喰らう様子を間近に見た美咲が、その度に、まるで火でも押し付けられたように悲鳴を上げた。

「悪いのは私です！どうか銀子さんを助けて下さい！」

銀子を平手打ちする岡元の腕に美咲が縋り付いた。

「当たりめーだ！一番悪いのはお前だ！しかしなあ、お前には明日水揚げする予約が入ってしまっているから、傷物にする訳にいかないんだよ！」

必死に腕に縋り付き、銀子を殴らない様に身を挺する美咲を睨み付けながら叫んだ。

「水揚げが済んだら、お前にもたっぷり折檻してやるから、これから銀子がどんな責めを受けるか、じっくりと見ながら楽しみにしてやがれ！」

と、一声叫ぶと、邪魔だとばかり腕に縋り付く美咲を力尽くで引き剥がし、傍に居たチンピラ達に押し付けた。

暴れ出さない様に左右のチンピラ達が両手両肩をガッシリと押さえ付けた。

「よくもこの俺に恥をかかせやがったな！」

この売春組織の管理を任されている内田が、険しい顔つきで腕を捲りあげながら銀子の方に歩み出た。

この男の残酷さは、ここの売春婦なら良く知っている。

居並ぶ売春婦達も憐憫の目で銀子を見詰めた。

銀子もバスタブの前の冷たい人造大理石を敷いた床の上に仰向けに身体を横たえながら、観念して目を閉じた。

「アツッ！」

不意に下腹部に激痛が走った。

ふと目を開けると内田が両手に火の点いた太い蠟燭を握り締めていた。

下から見上げる銀子の目にその二本の蠟燭から蠟涙が滴り落ちて来るのが見えた。

熱蠟の滴が下腹といわず、太股といわず、乳房といわず襲いかかった。

声を上げるまいと必死に堪えたが、灼熱した蠟の雨が肌を打つ度にヒッヒッと、声にならない悲鳴が上がり、ビクビクと蠟の滴に弾かれた様に身体が痙攣した。

瞬きも忘れた様に必死の形相で見詰める美咲も蠟涙が銀子の肌を焼く度に悲鳴を上げ、押さえ付けるチンピラ達の手の中で身体を痙攣させた。

溶けた蠟が柔肌に当たり灼熱が皮膚の奥まで伝播して堪えようのない苦痛を与えた後、皮膚の上でまるで瘡蓋のような層を作った。

今や銀子の肌は、乳房から大腿までびっしりと固まった蠟が覆っていた。

「おら！脚を開くんだよ！」

蠟燭を握り締めたまま内田が邪険に銀子的大腿を蹴り上げた。

「ほら！脚を開けて、言ってるんだよ！」

仰向けに倒れたままの銀子の下腹を革靴で踏み付けると、踵をグリグリと押し付けた。

見守る男女に目に柔らかな下腹の中に踵が沈み込むのが見えた。

その激痛に根負けした様に、言われるままに股を大きく開き始めた。

しかし、それは加虐者の目の前に、新たに女性ならでわの急所を差し出すことであった。

見詰める男女の目の前で徐々に股間が大きく広がり、剃毛されて覆い隠す物の無い陰部が赤ら様に開け広げられた。

「ああー、嫌！止めて！」

内田の次の狙いを覚った美咲が、細い身体をブルブルと震わせて、悲鳴を上げ続けた。

狙い定めた蠟の滴が、銀子の股間を直撃した。

大きく開いた股間の中心の秘裂に沿って、溶けた蠟がツーと流れ落ちた。

繊細な神経をその下に張り巡らせた薄い粘膜を直撃した衝撃で、銀子の身体が反射的に反り返った。

その瞬間、ヤクザ達が押さえ込む美咲の身体も反射的に仰け反った。

「おら！自分の指でオコを開くんだよ！」

扇の様に大きく開いた内股の間に立った内田が革靴の爪先で銀子の太股を邪険に何度も蹴り上げた。

その度に柔らかな脂肪を載せた大腿に靴先がめり込み堪らず悲鳴が上がった。

「さっさと、その小汚いコを広げるんだよ！」

悲鳴にも動じない様に、醒めた目で身悶える銀子を見下ろしながら、非情に命令した。

内田の次の狙いは明らかであった。

女の最も奥深い部分を嗜虐者の前に晒したまま、無防備なその敏感な粘膜に熱蠟を流し込まれたら、どの様な激痛が襲うだろうと恐怖心が込み上げて来た。

「怖いわ・・・助けて・・・」

熱蠟が女の最も敏感な箇所を襲う恐怖感にガタガタと身体を震わせながら、無駄だと知りつつ、思わず涙を浮かべて加虐者に哀願する銀子であった。

「ほら、開けて言ってんだろ！」

内田が革靴の爪先で剥き出しの秘丘をグリグリと突き上げた。

尖った革靴の先が秘孔の中に埋没し、爪先が艶々と輝のが見えた。

この敏感な粘膜の奥にまで熱蠟を流し込まれたら、激痛の余り息の根も止まってしまうのでは無いだろうか？と、思った。しかし、何時までもこのような責め苦を受け続ける位なら、いっそ今此处で死んでしまった方が益しでは無いかと諦めにも似た気持ちになると、秘裂に両手の指を掛けて押し広げ始めた。

血走った目で凝視する男女の前に、秘裂の奥の充血した粘膜と赤黒い秘孔が露わになって

いった。

次の事態を想像した美咲が、嫌、嫌、と讒言の様に口走り身体をガクガクと震わせた。

大きく開いた銀子の股間に腰を沈めた内田が狙いを定めて、たっぷりと溜まった蠟を一機に流し込んだ。

至近距離から注がれた蠟は狙い変わらず、銀子のクリトリスとワギナの上に落下し、左右に押し広げられた肉洞の中に流れ込んだ。

敏感な神経の束を灼熱感が襲い、甲高い呻き声を上げて、反射的に身を反らし、そのまま意識を失ってしまった。

「ケッ！気を失いやがったぜ・・・」

足下で死んだ様に横たわる銀子を見下ろしながら、内田が呟いた。

そして、手にした蠟燭を銀子の下腹部に押し当てて火を消した。

ふと岡元が美咲の方を振り返ると、美咲も完全に意識を失ってしまい、支えるヤクザ者達の手の中でグッタリとしているのを見た。

人が気を失うのを見て自分も気絶してしまうとは、随分と感じ易い子だーと、売春婦として育て上げた時の楽しみを見い出したように微笑んだ。

「おら！何時まで寝てんだよ！」

散々虐待行為を繰り返した内田であったが、意識を失ったままの銀子を未だ許す積もりは無い様で、大股を上げたまま気を失っている銀子の後ろ髪を掴むとそのままバスタブの傍までズルズルと引きずって行った。

「ほら！早く目を覚ませよ！」

髪の毛を鷲掴みにしたまま上体を引き起こすと、そのままバスタブ一杯に張られた湯の中に飛沫を頭を上げて押し込んだ。

水の中に顔を沈められ、呼吸が出来なくなった事により、本能的危機感から銀子の意識が蘇った。

そして、息が出来ない苦しさで窒息の恐怖に思わず顔を水面から出そうと藻掻いたが、内田が力いっぱい上から押し付けその抵抗を抑え込んだ。

長時間水中に顔を押し込まれ、何時しか意識が朦朧とし、呼吸を求める生理的反射により開いた口に水が流れ込み、喉まで流れ込んだ水に咽んだ。

売春婦のリンチに手慣れた内田は、銀子が窒息しそうになるのを見計ると水面から銀子の

顔を上げさせ、短時間呼吸をさせると再び水の中に押し込んだ。

それは、窒息しそうな肺の中に充満させるには、十分な呼吸量ではなく、苦しきのあまりまた水を飲み込んでしまうのであった。

呼吸出来ない上の口に代わって下の口が息をしようとしているかの様に、部屋に集まった男女の方に向いた双臀の間で肛門がパクパクと痙攣する様に閉じたり開いたりを繰り返し、痙攣する膣孔から先程流し込まれた蠟の塊がドロリとこぼれ落ちた。

ああ・・・自分は此处でこのまま溺れ死んでしまうのだわ・・・と、銀子は覚悟した。

不思議と死に対する恐怖心は湧いて来なかった。

こんな苦しい人生を送る位なら、いっそのまま死んでしまった方が楽になるのではないかと、哀しい諦めの様な気持ちになっていた。

混濁した脳裏にこれまでの記憶が走馬燈の様に過ぎった。

中学の卒業式の会場から拉致される様に、式が終わるのを待っていた暴力団の男達から連れ出され、そのままこの秘密ソープランドに押し込まれた・・・

小さい時から女性ばかりの学校に通い、男の性など何も知らぬ自分の処女を暴力的に奪って行った男達・・・

凶暴な男達の性欲の生け贄とされ、泣きはらしていた毎日・・・

そう言えば、そんな惨めな自分に、意地悪く、まるで傷口に塩を擦り付ける様に辛く当たる女が居たっけ・・・

その女は当時売り上げナンバーワンの女で、自分の力を誇示する様に、銀子達に陰険に接していた・・・自分はその女を何て嫌な女だろうと思っていた。

そして、何時しか自分はその女に強烈な敵愾心を燃やす様になって、この女から売り上げナンバーワンの座を奪ってやるんだ！と心に決めたっけ・・・そのため自分から進んで、男を夢中にする身体と性の技巧を学ぶため、鬼の蔵源と呼ばれていた女体調教師の蔵田源一郎の肉体改造も受けたのだった。

ただ、その女を見返してやる！という意地だけで、女にとって地獄の様な女体調教にも堪え、毎日進んで男を取り、何時しか自分がナンバーワンの売り上げを誇る女に成っていた。

こうして思い返して見ると、自分が今までこうして生きてこられたのもあの女に対する敵意だったのでは無いだろうか？

冷静になって考えてみれば、こんな警戒が厳重なこの売春組織から脱走できるわけが無

い・・・

例え、逃走に成功したとしても、ヤクザ社会の闇のネットワークで再び此処に連れ戻されてしまうだろう。

そらなら、美咲ちゃんに可能性の無い期待を抱かせるよりも、自分が鬼に成って自分に恨みを抱かせる様にした方が、生きる張り合いを持たせる事が出来るのでは無いか？

窒息状態の混濁した意識の中で此処まで考えが廻った。

窒息死寸前まで苦しめた後、タイミングを見計らって銀子を水面から引き上げた内田がギョッと驚いた表情を浮かべた。

夥しい水を顔面から滴らせながら、銀子の顔が笑っているのに気付いたからであった。

「このアマ！何が可笑しいんだ！」

内田は、銀子が拷問の苦しさの余り発狂してしまったのではないかと心配した。

銀子は窒息死寸前状態で酸素不足になった体内に新鮮な空気を取り込むため激しく息を吐きながら、楽しそうにケラケラと笑って呟く様に言った。

「いえね・・・私は自分の馬鹿さ加減がほんと嫌になって、思わず笑ってしまったんですよ・・・」

と、苦しそうな息をしながらも自嘲笑いを続けて言った。

「良い歳こいて、こんな泥水稼業を何年もやって来たこの銀子姐さんが、今日入ったばかりの小娘にすっかり騙されてしまうなんて！」

ヤクザに身体を拘束されたままの美咲の方を憎々しげに見つめながら吐き捨てる様に言った。

意識を取り戻していた美咲は、銀子の敵意を込めた鋭い視線を受けてハッとした様に声も上げられなかった。

「銀子さん、お願いします！どうか助けて下さい！・・・なんて・・・泣いて縋られてさ・・・馬鹿だね！私もつい仏心を出してしまったばかりにとんだ迷惑を被ったよ！」

銀子の打って変わった様子に内田も呆気にとられた様に銀子を押しえていた手を弛めた。

内田の手を逃れた銀子はフラフラと立ち上がると、大声で憎々しげに恨み言を言いながら、美咲の方に近づき、左右から押さえ付けるヤクザ者の手を払って、その細い手を邪険に掴んで自分の方に引き寄せた。

「おいで、お前にも思い知らせてやるよ！」

意外な展開に岡元が、

「銀子！お前の気持ちも分かるが、美咲は明日水揚げの大事な身体だ！傷物にしちゃなんねー！」と、銀子を制する様に言った。

そんなオロオロする岡元を醒めた目で見詰めながら、

「判ってますよ。親分！大事な身体には傷一つ付けませんよ！」

と、岡元の方を見つめながらキッパリ言うと、美咲を自分の前に立たせた。

「先ず、明日水揚げされるという立派なお体を見せて貰おうじゃないか！さあ、服を脱ぐんだよ！」

これまでと打って変わった銀子の邪険な態度にドギマギする美咲に、

「何をグズグズしているんだい！？さっさと脱ぐんだよ！」

と物凄い剣幕で怒鳴りつけるのであった。

銀子の脅迫的な態度に、恐れを為した様に青い顔をして、ガタガタと震えながら白いセーターを脱ぎ始めた。

白いブラウスと赤いスカートを履いた美咲が立っていた。

早くしないか、と言う様な冷たい銀子の瞳に、諦めた様にブラウスのボタンを一つ一つ外し始めた。

ブラウスを脱ぐと素肌の上に付けているのは白いブラジャーだけだった。

無駄な脂肪の付いていない若い瑞々しい身体の華奢な胸の上に小振りだが形の良い乳房が白いフリルの付いたブラジャーに覆われていた。

染み一つ無い雪の様に白い肌の上にツンと突き出した清楚な下着姿を見ると、雪野原に咲く白い可憐な花を連想させた。

目を皿の様にして美咲の半裸身を見詰める男達が思わずグッと身を乗り出した。

怯えて身体を震わせ、必死に両手で胸を抱え込む美咲の姿を眺めて、肉欲に飢えた男達にとって、この処女の穢れない肉体は、どの様なお馳走にも勝る食指を延ばす柔肉だろうと、銀子は心の中で思った。

この哀れな娘を助けることも出来ず、むざむざ野獣の様な男の餌食にしてしまうのかと思うと銀子の胸がキリキリと痛んだ。

「ほら！早くブラジャーを脱いでオッパイを見せるんだよ！」

邪険な声で命令したが、美咲は涙を浮かべて胸を隠すだけであった。

業を煮やした様に、銀子が美咲の背中に手を伸ばして、ホックを外し、無理矢理ブラジャ

一を筆り取った。

乱暴な銀子の行為に美咲がアッと声を上げて背を丸めた。

「ほら！何を隠しているんだい！？さっさとその剥き出しの胸を見せないかい！」

背後に回った銀子が乱暴に美咲の両腕を掴むと、両乳房を覆い隠していた両手をねじ上げた。

「ほう・・・？綺麗な桜色だねー！私にもこんな時分が在ったかねー？」

お椀の様に形の良い小振りの乳房の先に佇む、薄いピンク色の乳房を見つけて、時分の物と見比べる様に溜息を吐いた。

「乱暴な男達に強く吸われたり、噛まれたり、挙げ句の果てには針まで突き立てられたりして、今じゃこんなに大きく醜く成ってしまったよ！」

指先で可憐な蕾の様な乳首をくりくりと揉み立てたので、美咲がイヤイヤと声を上げた。

次に背後から美咲の乳房の重さを量る様に両手で下から持ち上げた。

そして、その大きさを確かめる様に掌を拡げると乳房全体を揉みしだいた。

「ふーん？まだ男から揉み上げられていないからコリコリしているね・・・」

「アアーッ！痛いわ！許して！」

乱暴に乳房を揉み上げられて美咲が涙を流しながら哀願した。

「何が痛いことがある！？男の力はもっと強いんだよ！それに此处が真っ赤に腫れ上がって血が滲むまで鞭で打つ残酷な男もいるんだよ！これぐらいの痛みに耐えられなくてどうするんだよ？」

銀子に厳しく叱咤されて、抵抗するのを止める美咲であった。

「さて、胸の形が良いことは見せて貰ったけど、次は肝心の臍から下の方を見せて貰おうかね・・・」

銀子の邪険な態度で、此处が泣いても許して貰えない地獄の様な場所だと理解した美咲は、もう羞恥に胸を隠すことも止めて、大人しくスカートのホックに指を掛けた。

白い滑らかな大腿にそって赤いスカートが滑る様に下に落ちて行った。

その下は、ブラジャーと対になったフリルの付いた白いショーツだけであった。

女性らしい柔らかな肉置き的大腿とその間のショーツに覆い隠された、こんもりと盛り上がった丘の様な、三角の地帯に男達の視線が集まり、思わず生唾を呑み込む音が聞こえた。

背後に位置する銀子が、その柔らかさを楽しむ様に臍の周りを両手で撫で回した。

腹の上を這いずり回る銀子の嫌らしい手付きに、イヤ！イヤ！と腰をくねらせた。

「柔らかい腹だね・・・この中に何が入っているのかな？浣腸して出してみたいね・・・」

と、耳元で囁き美咲を怯えさせた。

「さあ！最後の布切れも脱ぐんだよ！お前には、もうそんな物は必要ないんだよ！」

銀子が冷たい声を上げた。

一度は地獄の様な部屋の中で、抵抗を諦めた様な美咲であったが、最後の女性の盾を奪われる事に羞恥が込み上げて来て、嗚咽しながら首を激しく左右に振った。

「何をしているんだい！さっさと脱がないか！」

銀子が背後から美咲の乳首を指で摘み上げ、残酷に捻り上げた。

胸を襲う激痛に、脱ぎます脱ぎます、と泣きながら自らの指をショーツに掛けた。

血走った目で見詰める男達の前で、ショーツがずり下がり、隠されていた部分が明るみに出た瞬間、オオーッという歓声が上がった。

思わず動きを止めた美咲の背後に居た銀子が、強引にショーツを足首まで引き下げ、そのまま取り去った。

「ホーッ！これが処女様のオコかい？綺麗な色をしているじゃないか？私もこんな時分が在ったのかねー？」

前に回った銀子が、すっかり露出してしまった股間を見詰めながら言った。

未だ生え揃わないのか、それとも生まれ付き薄い体質なのか、まばらな春草の下に深い亀裂がハッキリと見えていた。

明日になれば、この秘裂が引き裂かれ、血に塗れるのかと思うと、何もしてやれない自分が哀しかった。

「ほら！もっと良く見せてごらん！脚をもっと開くんだよ！」

剥き出しの尻を乱暴に平手打ちした。

邪険な銀子の態度にオロオロする美咲を目の前に直立させたまま脚を大きく開かせた。

そして、開いた股の間に指を差し入れると、二枚の肉の貝を開きその奥の秘められた襞を一枚一枚開いて行った。

「アアーッ！イヤーッ！」

泣き叫んで銀子の手を除けようとするのも構わず、強引に秘所を開いて行った。

「在ったよ！在ったよ！処女膜！・・・ふーん、こうして見ると綺麗なもんだねー、私にもこんな物が引っ付いていたのかねー？見た覚えが無いよ・・・」

と、淫靡な目でこちらを見詰める男達の方を振り返って戯けて言った。

「まあ、こんな物あつと言う間に擦り切れて無くなってしまうけどね・・・さあ・・・処女様のオ●コ<sup>コ</sup>の匂いを嗅がしてごらん。」

銀子が大きく押し広げたままの股間に顔を埋め、秘所に鼻を押し当てたので、焼け火箸を押し当てられて様に悲鳴を上げた。

「フン！小便<sup>しょうべん</sup>の臭いがするよ！」

男達の方を振り返って笑いながら言ったので、男達もつられてドッと笑い声を上げた。

銀子に秘所の様子を暴かれショックで貧血を起こしたのか、蒼白の顔色となってヘナヘナと腰から床に崩れ落ちた。

「ほら、何をしゃがみ込んでいるのさ！」

と、美咲の上体を邪険に前に押して、無理矢理四つん這いの姿勢を取らせた。

丸出しの秘所と肛門を男達の方に向けて犬の様な姿勢を取らされた美咲が羞恥で泣き声を上げた。

「ほら！お前の大事な所を親分に良く見て頂くんだよ！」

と、岡元の方に向けた尻たぶに両手を掛けて左右に押し開いた。

肉の狭間に隠れていた秘所が男達の目に赤ら様に晒された。

羞恥のためかヒクヒクと痙攣する肛門を繁々と見詰めて、

「ふーん、使い込まれていないから色素の沈着も無い綺麗な菊の花じゃないか？」

と、感心する様に呟いた。

そして、その中心部に指を添えた時、美咲が激しい悲鳴を上げた。

「ふん！固くて指一本入りやしないよ！これは、男のモノを突っ込まれる時が楽しみだねえ！」

と、意地悪く笑いながら言った。

美咲が腰を震わせてヒイヒイと悲鳴を上げた。

四つん這いになった美咲の尻に銀子が顔を埋め、菊花に口付けして舌をその中心に舐めたのであった。

「なかなか良いお味じゃないか・・・それに此处を嘗められて声を上げたりしてさ、案外感じ易いんだね？これは益々楽しみだね・・・」

犬の様に四つん這いの姿勢の美咲の襟首を掴んで引きずりながら、

「お前のお陰で、男のザーメンがタップリ入ったお湯を散々飲まされたんだよ！お前にも飲ましてやるよ！」と、憎々しげに叫ぶと、さつきまで自身が水責めに遭っていたバスタブの前まで連れて来た。

岡元が不安そうな目で、二人の動きを追った。

銀子は洗面桶に風呂の湯をタップリと掬い取ると、指で美咲の鼻を摘み、無理矢理口をこじ開けて、洗面器の縁を口に押し当てて、中の湯を口内に流し込んだ。

突然の大量のお湯が口腔内に流れ込み、咽んだが、若い喉が上下に動き注ぎ込まれたお湯が嚥下されていった。

洗面器から溢れ出たお湯で、バスタブの傍に腰を降ろす美咲の身体がビショビショに濡れていった。

大量のお湯を飲まされ苦しげに息をする美咲に構わず、再び銀子は洗面器にお湯を一杯に汲み上げた。

成る程、その手が在ったか？と銀子の責めを見ながら岡元が肯いた。

何度もお湯を体内に流し込まれ、美咲が苦しそうに息を吐いていた。

大量のお湯で華奢な腹が少し膨らんだ様に見えた。

「どうだい？苦しくなって来たろう？」

銀子が意地悪く美咲の下腹を撫でながら聞いた。

そして、見詰めるヤクザ者達の方を見回しながら、

「もう直ぐこの子は粗忽をするよ！みんなで笑っておやり！」

と、甲高い笑い声を上げながら叫ぶ様に言った。

「どうしたの？・・・オシッコがしたくてしょうがないんでしょう？・・・良いのよ、ここでお漏らししても・・・さあ、男の人達の前で笑い者になりながらオシッコをしてしまいなさいよ・・・」

美咲の下腹をグイグイと押したり、陰裂の上を指で撫でさすりながら、美咲の耳元で囁いた。

大量に飲まれた水が膀胱に集中し、下腹が痛い程張っていた。

出口を求めて狭い管に流れ込もうとするのを、銀子が意地悪く尿道孔の上から指の腹で押し上げ、内からの圧力に抗する様に表から力を加えた。

「ああーっ、イヤ！許して！」

ズキズキする様な下腹から込み上げる痛みを伴った灼熱感に美咲が眉根を寄せて、喘ぐ様な声を上げた。

「アアーッ！もう駄目！お願いします！トイレに行かせて下さい！」

迫り来る尿意に激しく顔を振りたてながら哀願した。

「エエッ？・・・トイレだって？馬鹿じゃないの？この子は？・・・此処に居る岡照組の皆さんはね、お前が犬みたいにシャーとする所を見たいと言うんだよ！トイレなんか行ったら肝心の所が見えないじゃないか！」

と、意地悪く下腹を押し付けながら言った。

美咲の尿意は極限に迫っていた。

「どう？するのね？」

銀子が冷酷な目で美咲の目を見詰めながら聞いた。

ビッシヨリと額に汗を浮かべた美咲が、苦しげに肯いた。

美咲の身体を起き上がらせると、蹲踞の姿勢を取らせた。

まるで和式の便所を跨らせる様な姿勢で、床の上に腰を落とさせた。

背後に回った銀子が意地悪く美咲の大腿に手を掛けて、大きく左右に開かせたので、股間の奥深くが見詰める男達の目の前に露わとなった。

「ほら！もっとお前の恥ずかしい所を男達に見て貰うんだよ！」

美咲の両手を掴んで前に回すと、大きく開股した中心に在る秘所に白くて細い指先を押し当てさせ、銀子も指を添えて、その柔らかな襞を左右に押し広げさせた。

イヤーッ！と悲痛な声が部屋に甞した。

綺麗なピンク色をした処女の秘孔が男達の目の前に赤裸々にさらけ出され男達から、オオッ！と、言う声が上がった。

体内から込み上げる激烈な圧力と、自分の手で秘所を押し開き野卑な男達の前に開陳を強制される羞恥に、精神は混乱し狂った様な悲鳴を上げ続けた。

今はもう逆らう事も出来ず、自らの指で押し開いたパツクリと露出した秘裂の奥で、内部からの圧力に抗う尿道孔がヒクヒクと痙攣している様子が、淫靡な目で見詰めるヤクザ達の目に映った。

「アアーッ！イヤ、見ないで！」

突然股間の奥深くから一条の放水が始まり、浴室の床の上で弾けた。

羞恥に顔を染め俯こうとするのを後ろ髪を掴んで男達の方に向けた。

「ほら、みんな！この娘の恥ずかしそうな顔を良く見ておやり！」

羞恥に泣き叫ぶ美咲であったが、大量に体内に溜まった尿は、益々勢いを増して噴出するのであった。

銀子に強制され自らの指で秘孔を大きく晒した気も狂う程の恥ずかしい姿のままで、大声で泣きながら排尿を続けていた。

そのあどけない少女の羞恥図に男達は狂った様に笑い声を上げ続けた。

浴室の床の上に見る見る黄色い液が池の様に拡がって行った。

長い放尿の末、体内に留められた水分が減少し始め、その勢いは次第に弱くなっていった。

恥ずかしさに美咲は泣き続けていた。

「もう、良いのかい？」

陰毛を伝ってポタポタと滴が落ちるのを見ながら、美咲の後ろ髪を掴み自分の方に向けながら聞いた。

美咲が恥ずかしそうに肯いた。

「面白かったねー！・・・さて、次は何をして遊ぼうかね？」

冷酷な目で床に蹲ったままの美咲を見下ろして呟いた。

銀子の残忍な目を見て美咲が怯えた表情を浮かべた。

その時、一人の三下が慌てた表情で部屋に飛び込んで来て、何やら岡元に耳打ちした。

「何！・・・全くなんて事だ！困ったことをしでかしてくれたもんだ！」

子分から連絡を受けた岡元が苦々しい表情を浮かべた。

「おい！松岡！お前の所の新入りが困ったことをしてくれたぞ！」

横に座っていた若者頭の松岡を忌々しげに睨み付けた。

「おい！今日はもう中止だ！行くぞ！」

と、席を立つと主立った子分を連れて外に出て行った。

## 抗争の始まり

その事件があつて暫くした後、黄原が客として銀子の元を訪れた。

「銀子！いったい何があつたんだ？！」

腫れ上がった銀子の顔を見て、黄原が驚いた声を上げた。

黄原の顔を見て、銀子は堪えていた物が外れた様にワッと泣き出して黄原の胸に顔を埋めた。

ベッドに並んで腰を降ろしながら、黄原が銀子の背中に手を回して優しく抱き締めていた。

「そうか・・・そんな事があったのか・・・お前も辛かったろう？」

銀子の背を優しく撫でながら呟く様に言った。

時々黄原の手が銀子の傷口に触れるのかビクッと身体を震わせたが、黄原の優しい気持ちを考えて痛みを堪えて呻き声を上げることは無かった。

「・・・それで、岡元は慌てた様子で出て行ったのか？」

「私の聞いた話だけど・・・」と、潤んだ瞳で黄原の目を見つめながら顛末を話し始めた。

実は、美咲の脱走騒ぎが始まるのと前後して、岡照組の三人の若い組員が無銭飲食をしたのであった。

岡元の組も黄原の属する目高組も古くからS市を縄張りとする暴力団であり、岡照組の縄張りとも目高組の縄張りは互いに接していた。

長い間の経緯で互いの縄張りは網の目の様に絡み合い、一部では飛び地となって相手の縄張りの中に自分の縄張りが点在していた。

もし目高組と岡照組が緊張関係にある組同士であれば、たちまち抗争の原因となる所であったが、岡元組長も奈和組長も若い頃、共に村崎親分の下で修行した身であり、二人は互いに仲が良く、親分同士が親友関係のため二つの組の間でもこれまで諍いが起こることは無く、互いの組員が縄張り内ですれ違っても揉め事を起こすこともなく仲良くやって来れたのであった。

ところが、この三人の組員は、つい最近不良グループから岡照組の組員になったばかりで、その辺のところが判っておらず、自分の縄張りの内の飲食店ならタダで飲み食いしても良いだろうと、目高組の息の懸かった店とも知らず、飲み食いをしたのだった。

そして、支払いを求める店主を三人で袋叩きにして大怪我を負わせてしまったのだった。

目高組が用心棒代を取る店で他所の組の組員に暴れられたとあっては、当然目高組の顔に泥を塗った事になり、抗争の原因となってもおかしくなかった。

「そうか・・・それで、その跳ねっ返りの兄貴筋に当たるのは誰だ？」

ベッドで銀子に添い寝しながら聞いた。

「若頭の松岡よ！本当に嫌な奴なんだから！」

毛嫌いする松岡の事を思い出して口を尖らせて黄原に告げた。

「そうか・・・松岡か？」

暫くの間、何か思いを巡らしていた黄原が、パッと目を輝かせて銀子の方を見つめた。

「喜べ！銀子！もう直ぐお前をここから連れ出してやれるぞ！」

「エッ！本当？！」

銀子の顔が明るくなった。

「こうしちゃいられん！行くぞ！」

と、ベッドから起き出すと身繕いを始めた。

「ええー？もう行っちゃうの？まだ何もしていないのに・・・」

銀子が驚くと共に物足りない様な表情で部屋から飛び出ていく黄原を目で見送った。

「ああ・・・お前さんかい？・・・ああ、こっちは何も怒っていないよ・・・なに、昨日今日入ったばかりの右も左も判らない跳ねっ返りがやった事さ、これからゆっくりと教育してやれば良いさ・・・」

目高組の事務所では奈和組長を前にして、岡照組に恥を搔かされたと目高組の組員達が、今すぐ報復すべきだと息巻いていた。

そんな激昂する組員達に、岡元組長を親友と思う奈和が一喝した所であった。

超武闘派と呼ばれる血腥い目高組を、暴力と恐怖で支配している奈和組長のカリスマ性は絶大であり、岡照組への殴り込みも辞さずと息巻いていた荒くれ男達も黙り込んでしまうのであった。

そんな所に岡元組長から直接電話が入ったのであった。

「何？・・・村崎親分に立ち会って貰って詫びの儀式を上げたいだって？・・・そんな大親分に出張って貰って手打ちする程大げさな話じゃないさ・・・」

電話を通して平謝りに謝り、ヤクザとしての形をつけて詫びを入れないという岡元の声が周囲の男達の耳にも漏れ聞こえていた。

「まあ・・・お前さんがそうしたいと言うなら、そうすれば良いさ・・・ただ、こちらは何かと思っちゃいないぜ・・・」

岡元との長い電話を切ると、周囲を取り囲む男達を厳しい目で見詰めて、

「良いか？この話はこれでお終いだ！変に動くんじゃ無いぞ！」

と、改めて一喝した。

親分の強い言葉に、男達も不承不承報復を諦めるしかなかった。

その次の早朝、岡照組の若頭の松岡が自宅の前で死体で発見された。

刀や銃による傷跡は無く、長時間に渡り殴る蹴るの激しい暴行を受けた末の撲殺死体であった。

状況から見て松岡を誘拐してリンチに掛け、殴り殺した後、車で自宅前まで運んだと思われる。

殺害者に関する証拠は何も残されていなかったが、前後の経緯から、自分の手下が仕出かした不始末の責任を取らされる形で、目高組の男達から凄惨なリンチに会い、その結果としてなぶり殺しに遭ったのは間違いないと岡照組の男達は確信した。

ヤクザの世界には対等と云う考え方がある。

成る程、最初にこちらが不始末を仕出かしたのだから、それ相応の報復をする権利は、目高組にはある。

しかし、相手の縄張り内で犯した不始末の代償としての組の若頭の惨殺とは余りにも対価が違い過ぎる。

「こうなれば、目高組の幹部に対して報復しなければ、組としての対面が保てない！」

「鬨り者になった末に殺された松岡の無捻を晴らさなければ、後に残された女房や子供の悔しさを晴らす事が出来ない！」

と、激昂する組員が岡元組長にけしかけた。

岡元は内心拙いことになったと感じていた。

「あの脳味噌まで筋肉の暴力馬鹿め！俺が正式に詫びを入れると言って置いたのに、それまで待てなかったのか？・・さて、どうしたものか？」

と、考えを廻らそうとしたが、次々と部下から激しく詰め寄られて、冷静に考える力を失っていた。

暴力と恐怖で組員を支配して来た奈和組長と違って、陰險な陰謀を廻らせて此处までのし上がってきた岡元組長には、奈和組長の様に部下を一喝して黙らせる程のカリスマ性が無かった。

激昂する部下達から次々と強硬な意見をぶつけられて、オロオロとして苦しさ紛れに

「誰でも良いから、目高組の幹部の首を一つ上げて来い！」

と、命じてしまったのだった。

岡照組の報復は早かった。

その日の内に、古田という目高組の古参幹部が血祭りに上げられた。

愛人を囲ったマンションを訪れる際に、部屋の前で待ち伏せしていた数人の岡照組の組員が匕首を手に襲い掛かった。

全身に無数の刀傷を負った古田ではあったが、発見が早く、奇跡的に命を取り留めた。

そして、運び込まれた病院のベットの上で駆け付けた目高組の男達に、犯人は岡照組の男達だと告げた。

岡照組に自分達の縄張りは荒らされるわ、幹部は斬り付けられるわで、怒り心頭に達した目高組の荒くれ者達が、今すぐ殴り込みを掛けようと、奈和親分に詰め寄っていた。

激昂する男達に睨みを利かせながら、奈和自身も岡元組長に猜疑心を抱き始めていた。

事の真偽を問いたそうと直接岡元に電話を掛けても継がらなかったことも猜疑心を深めて行った。

岡元とは若い時分からの付き合いで、今でも心を許せる親友だと思っている。

しかし、同時に岡元が此处までのし上がって来れたのは、陰険な陰謀を廻らせて組を大きくして来た事も良く知っている。

「俺は暴力による恐怖で、彼奴は陰険な陰謀で此处までのし上がって来たんだ・・・」

奈和が心の中で独り言の様に呟いた、

「もし、その陰謀を親友である俺に振り捲いて来たのだとしたら・・・」

正式に詫びを入れると時間稼ぎをしておいてその隙に何か仕掛けてくるのでは無いかと、不安に襲われるのであった。

「今の時勢は国を挙げてのバブル景気の真っ最中だ・・・都市部の土地は高額な金額で飛ぶ様に売り買いされている。人間、金の前では友情すらゴミの様に捨ててしまいかねない時代だ・・・岡照組の縄張りは旧赤線街と呼ばれる遊興街が多く、目高組の縄張りは繁華街が多い・・・岡元の奴がこのバブル景気に踊らされて、大きな金を生み出す金の卵の様な繁華街の縄張りに目を付けてきてもおかしくない・・・」

色々考えを廻らせる内に、奈和は益々猜疑心に囚われていくのであった。

しかし、一方では若い時村崎親分の下で共に修行をして、無二の親友として過ごした懐か

しい思い出が蘇って来るのであった。

「さて・・・どうしたものか？」

## 最後の詰め

「ほら！銀子さんの大好きな赤い薔薇の花をいっぱい買って来て上げたわよ！」

闇の貸金業を営む沢田というキザな男が、一抱えもある大きな薔薇の花束を抱いて銀子の部屋を訪れていた。

「わーっ！嬉しい！沢田さん、有り難う！」

沢田の持ち込んだ大きな赤い薔薇の花束に嬉しそうな声を上げた。

闇の金融業で膨大な利益を得ている沢田は、銀子の重要な常連客の一人であった。

金に証せて派手なデザインの高級ブランドのモード服の上下を身に纏い、イタリア製の高価な革靴と高級ブランドのメタルフレームの眼鏡を気障ったらしく何時も身に付けている男であった。

銀子が甲斐甲斐しく沢田の高級な衣類を脱がせ、ハンガーに掛け、下着を脱衣カゴに畳んで仕舞った。

外見上は痩せぎすのキザ男に見える沢田であったが、身長は180センチ近くもある大男であり、服を脱がせるとボディービルで鍛えた贅肉の全く無い腹筋の割れた筋肉質の体が現れた。

銀子も着ていたバスローブを脱ぎ全裸となると、愛おしげに沢田の硬い筋肉に覆われた体に柔らかな体を擦り寄せた。

気障ったらしいヤサ男に拘わらず、股間から垂れ下がった陰茎は大きく長く、銀子が大切なモノを手にする様にその巨大なモノを両手で支え上げ、その先端に愛おしげに唇を舐めさせた。

「前回来た時は、私に責められて散々絶頂に達した挙げ句、白目を剥いて口から泡を吹いて気を失ってしまったわね。その直後に突然オシッコを漏らし始めてベッドをびしょ濡れにしてしまって、ビックリさせられたけど、今度は大丈夫よ！・・・良い物を見つけてきたから・・・」

と、手にして来た大きな革製のボストンバックを開いて、何やらブルーの透明の軟質プラスチックで作られた棒状の物を取り出した。

それは直径が1.5センチ程のボール状の物を幾つも団子の様に繋いで、全長10センチ程の棒状にした物であり、端を摘む沢田の手の先で、まるでゼリーの様に上下にプルプルと揺れていた。

「銀子さんのオシッコの出る穴に詰め込むためのプラグよ！・・・これを最初から根元まで差し込んで置けば、何時意識を失ってもオシッコを撒き散らす心配は無いから、安心して気をやっても良いわよ・・・」

と、薄気味悪い笑みを浮かべて不安そうな表情を浮かべる銀子の方を見つめるのであった。一開け放たれたままとなったボストンバックの中から、ロープや拘束具や性具など不気味な器具が幾つも姿を覗かせていた。

沢田はその持ち物も巨大で在るように性に関しては絶倫男であり、自分が射精するまでに何回も女を絶頂に導かないと気が済まないような所があるが、それだけでは無く、残酷な嗜虐趣味も併せ持つ変態性があり、自らの肉塊を使うだけでなく怪しげな性具も駆使して女を責め上げる習性があった。

何時も沢田が客として訪れる度に、銀子は果てることを知らない肉茎と恐ろしい器具を同時に使って責め立てられるのであったが、今回は特に酷く、行為の最中に完全に意識を失ってしまったのであった。

その失神状態に在る間に、股間の筋肉は痺れ切って緩み、膀胱に溜まっていた小水が噴き出しベッドをビショビショに濡らしてしまう事件があった。

沢田はその事を言っているのだった。

「それじゃ始めましょうか？」

長時間のネットリとした執拗な前技で銀子の身体が温かく熱を持ち、柔らかく解れて来たのを確認した沢田が薄気味悪い笑みを浮かべた。

「ああー、怖いわ・・・」

「大丈夫よ！女の人は此処にも性感を持っていて、此処に物を入れられるのが好きな人は大勢居るのよ！銀子さんもその内病み付きになるかも知れないわね・・・」

軟質樹脂で出来たプラグを手にする、銀子の愛液に満たされた肉洞の中に挿入した。

アッ、と小さく声を上げて銀子が体をくねらせた。

「本当は入れる前に潤滑ゼリーを塗して滑りを良くするんだけど、もう銀子さんはこんなに沢山ネバネバを出しているんだから必要ないわね。銀子さんのお汁を使わせて貰うわよ。」  
何度かその細いプラグを膣内に潜らせた後、タツプリと愛液に塗れたそれを、その僅か上の部分に開口した孔にあてがった。

「ああっ・・・怖いわ・・・」初めて尿道に性具を押し入れられる恐怖に、流石の銀子も怯えた声を上げた。

そんな銀子の不安そうな表情も気にする様子も無く、

「ふふ・・・銀子さんの此处ってとても可愛いわね。その内小型のバイブが入る位まで拡張して上げるから・・・」

と、その時の様子を想像した様に陰惨な笑みを浮かべた。

「アアーッ！痛いわ！」

これまで幾多の特殊な性交を経験して来た銀子にとっても、その部分は初めての経験であり、狭い肉の管を分け入ってそれが内部に押し込まれて来る時の激痛に悲鳴を上げた。

「ほら！じっとしてないと痛いわよ・・・ほほほ・・・どんどん入って行くわ！・・・ほら！全部入った！」

今や沢田の挿入したプラグは抜き出し用の紐の部分を残して完全に銀子の体内に没入していた。

ああっ・・・と、小水が尿管を通る時の感触にも似た下腹から込み上げる異物感に銀子が声を漏らした。

「こうして、内側から尿管が膨らむと男の子のオチンチンの様に見えなくも無いわね。」  
膣孔の僅か上に位置するその部分を繁々と見詰めながら、挿入の結果を確認するように言った。

「それじゃ、本格的に行くわよ！」

と、気味の悪い笑みを浮かべて、二つの孔を責めるための特殊な器具を手にとって銀子の身体の上に体を預けて行った。

銀子の部屋の扉を通して、アアーッ！とかヒィー！という悲鳴の様な喘ぎ声が廊下に響き渡った。

「貴男は、そんな風に女を残酷に責め上げて満足なの・・・」

涙と苦痛の混じった女の喘ぐような声が聞こえた。

「そうさ、銀子の悶える姿を見るのが堪らなく好きなのさ・・・」

「アアーッ！悪魔！」

沢田が銀子の何処かを激しく責めたのか、悲鳴の様な声が上がった。

「そうさ、金さえ払えば殺さない限り、何をやっても構わないのさ・・・」

と、悲鳴を上げ続ける女の声を押し潰す様に男の笑い声が聞こえた。

その後も長時間に渡って、銀子の部屋からは喘ぎ声とも悲鳴ともつかない艶めかしい女の声が長時間に渡って聞こえていた。

「まあ！嬉しい！来てくれたのね！」

痺れる様な性の快楽を銀子の華奢な身体から絞り上げ、満足して沢田が帰った後、次の客として黄原が銀子の部屋を訪れた。

沢田の凶暴で残酷な愛技により銀子の身体は、既にボロボロとなっており、全身は石の様に重く、腰はキリキリと痛みを発し、下腹の二つ在る男にこの上ない快感を与える壺は、熱を持って疼痛を発していた。

沢田にプラグを挿入されていた尿道には未だに異物感が残っていた。

「おいおい！大丈夫か？・・・無理はしなくて良いんだからな！」

ふらつく体で、目の下に濃い隈を作り、すっかり憔悴した表情の銀子を見て黄原が驚いて声を上げた。

「良いの・・・貴男だけは本当に愛して上げたいの・・・」

やつれた顔に艶然とした笑みを浮かべて、力の入らない体を黄原に投げ出し、縋り付く様に両手で抱き締めながらに言った。

疲弊してふらつく銀子の身体を支える様にしっかりと抱き締めながら、前の客に相当酷い仕打ちを受けたのだろうと想像した黄原は、銀子に深い哀れみを感じて、一刻も早くここから連れ出さなければならない！と心の中で誓うのだった。

「ああー、あなたから元気を貰えるわ・・・」

疲弊し切ったその部分の筋肉は完全に麻痺しており、何時ものテクニックを使って黄原に官能の喜びを与える事は出来なかったが、黄原の燃えるような暖かいモノを体の奥深くに受け入れていると、力強い黄原の男根を通して銀子の体内の隅々に暖かい生命のエネルギーが注ぎ込まれる様に感じられた。

まるで互いに愛し合う夫婦のように黄原の上になって挿入したまま体を密着させている間

に、沢田から与えられた心身のダメージが徐々に消えて行くのを感じていた。

ベッドの中で慈しむ様な黄原の愛を感じた銀子は、行為を終えた後、布団にくるまり、寄り添う様に黄原と体を接しながら、

「ねえ！・・・あなた本当は目高組の幹部なんでしょ？今岡照組と目高組とは大変な事になっていると言うじゃない？こんな所に居て大丈夫なの？」

と、黄原の目を覗き込みながら心配そうに尋ねた。

「へへ・・・知ってたかい？今どんどん焚き付けている所さ・・・」

「呆れた！やっぱり貴男が張本人だったのね？」

「そうさ！今最後の手の準備中さ！・・・その結果、岡照組と目高組は大戦争となる。その隙にお前をここから助け出してやるぜ！」

「私の事は良いの・・・抗争になって貴男が傷付いたら、私は生きて行けないわ！」

不安そうに黄原を抱き締め、厚い胸に顔を埋めた。

「俺がそんなドジをするようなタマかよ・・・」

不敵な笑みを浮かべて、怯える銀子の背を優しく撫でながら応えた。

「何？目高組の幹部の黄原が此处に来ているって？」

「ああ、偽名を使って会員に成り済ましているが、あの顔は間違いなく目高組の黄原だ！」

「糞！ふざけやがって！ふて一野郎だ！見つけ出して袋叩きにしちゃえ！」

煙草を買いに自販機の置かれた廊下に出た銀子の耳に、階下から男達が怒鳴り合う声が聞こえて来た。

慌てて部屋に戻ると、

「大変よ！貴男の事がバレているわよ！男達が此处に来るわよ！」と、真っ青な顔をしてベッドに潜り込んだままの黄原に告げた。

「おい！銀子！此处を開けろ！」

男達の怒鳴り声とドアを激しく叩く音が聞こえた。

押し黙ったままの銀子に腹を立てた様に、一層大きな声で、「早くドアを開けろと言ってんだよ！」と、内側から施錠されたドアをガチャガチャ押し引きしながら激昂した声を上げた。

「糞！誰か合い鍵を持って来い！」

やがて、合い鍵でドアを開いて、武器を手にした五人程の男達が部屋に雪崩れ込んで来た。  
部屋の中は灯りが消されて薄暗く、銀子一人がベッドに横たわっていた。  
男の一人が照明のスイッチを入れて、部屋が明るく照らし上げられた。  
ベッドの中の銀子は、灯りが点けられて、目が醒めたという様な驚いた表情を浮かべた。  
男の一人が怒りを露わにした表情で、銀子の傍に歩み寄ると、銀子の後ろ髪を驚掴みにして乱暴に起き上がらせた。

「オイッ！銀子！何故開けなかった？」

「ご免なさい！お客さんに余りにも激しく責められて、気を失う様に寝込んで仕舞っていたのよ。」

その間にも他の男達が部屋にいる筈の黄原の気配を探して部屋の中をあちこち嗅ぎ回っていた。

「オイッ！目高組の黄原って野郎が此処に来ていたろう？何処へ行った？」

銀子の後ろ髪を掴んだまま、乱暴に頭を揺すり立てて問い詰めた。

「何て言う名前か知らないけど、お客さんならもう帰ったわよ・・・」

グイグイと髪を締め上げられる苦痛に堪えかねた様に言った。

「本当か？嘘を吐きやがるとタダじゃ置かないぞ！」

と、ベッドに腰掛けた銀子を蹴倒す様にベッドから下ろすと、布団を捲って中を検めたり、大きなマットを持ち上げて中を確認したり、ベッドの下を覗き込んだりした。

その間にも他の男達も部屋中を嗅ぎ回ったが黄原の痕跡すら見つけることは出来なかった。

「糞！本当に一足違いで逃げられたか？全く運の良い野郎だぜ！」

忌々しげに一言吐き捨てると、ゾロゾロと部屋から出て行った。

銀子が震える手でベッドの脇に置かれた煙草に手を伸ばして、口に咥えると火を点けた。

まるで深呼吸する様に肺の奥まで煙を深く吸い込み、フーッと一息に紫煙を吐き出した。

銀子の赤い唇から吐き出された煙はゆっくりと上に上って行った。

煙の立ち上る天井を見上げて、

「大丈夫よ・・・もう出て行ったわ・・・」

と、一言呟く様に言った。

浴室の天井に設けられた点検口の蓋がゴソゴソと開いて、用心深げに黄原が顔を覗かせた。

ヒョイト天井から下に降りながら、

「単身敵地に乗り込むんだ、いざという時に何処に身を隠せば良いか、最初から考えて置くものさ！」と、口元に不敵な笑みを浮かべて言った。

「呆れた人・・・」

黄原の大胆さの中にも用心深さと慎重さを秘めた行動を目の当たりにして呆れた様に呟いた。

「兎に角、俺の正体がばれてしまった以上、此処は危険だ！暫くお前の所に来れなくなる。・・・今度来る時はお前を助け出す時だ！」

銀子の両の二の腕をしっかりと握り締め、強い目の光を浮かべて銀子の瞳を覗き込みながらキッパリと言った。

「その間、連絡は此処にしろ・・・」

と、懷から何かを取りだして、銀子の手握らせた。

それは、最近普及を始めたばかりの携帯電話であった。

「こんな高い物を・・・」

女性用のピンク色した携帯電話を見詰めながら銀子が呟いた。

「使い方は判るか？俺の携帯の番号は、短縮登録してあるからな・・・」

黄原が銀子の手を取り、使い方を教えた。

「それと、スタンガンだ、いざという時の護身用に使え。」

バチバチと高電圧を発生させ相手を気絶させるスタンガンを手渡した。

「良いか？見つけられない様に隠して置くんだぞ！」

と、言う和黄原は窓際に設けられた小さな窓の方に向かった。

それは人一人がやっと体を乗り出せる程度の小さな窓で、隣のビルとは僅かな空間を空けて接しており、換気に使うぐらいしか使い道の無い窓であった。

「でも、貴男はどうやってここから逃げ出すつもりなの？廊下には殺気だった男達がいっぱい居るのよ！」

「なに・・・大丈夫さ！」

窓を開くと、下の様子を確認める様に身を乗り出した。

向かい合うビルとの間に作られた僅かな隙間は薄暗く階下は霞んでいた。

窓から半身を乗り出した黄原は、壁の感触を確認める様に向かいのビルの壁に手を着いた。

「ちょっと！止めてよ！此処はビルの7階なのよ！落ちて死んでしまうわ！」

今にも窓から体を出そうとする黄原に銀子が慌ててしがみ付いた。

そんな心配そうに抱き締める銀子を黄原は優しく抱いて、慈しむ様に背中を撫でると、怯える銀子の唇に唇を重ねた。

銀子が落ち着いたのを見計らって、銀子の瞳を覗き込みながらニッコリと微笑んだ。

「敵地に乗り込むんだから、隠れる場所や逃げる方法くらい最初から考えてあるさ・・・」  
と、言い残すと、肩がやっと通る位の狭い窓から体を折り畳んでビルの外に出た黄原は、両手と両脚を二つのビルの壁の間に突っ張ってスルスルとビルとビルの狭い隙間を降りて行った。

「まるで蜘蛛みたい・・・」

窓から身を乗り出して、下降して行く黄原を目で追いながら銀子が独り言の様に呟いた。  
昔し、香港製のカンフー映画で、二つのビルの間の壁に両手両脚を突っ張ってビルを登って行くシーンを見た様な記憶があるが、登るより降りの方が幾分楽とは云え、本当にこんな事を出来る人間が居るんだと感心した様に見詰めていた。  
銀子の見守る前で、黄原の姿が夜の闇の中に消えて行った。

## 誘拐

「お前達！私は岡元の女房なんだよ！こんな事をしてタダで済むと思っているのかい！？」  
コンクリートを打ちっぱなしにした倉庫と思しき建物の中にデブプリと太った40歳半ばと見られる中年の女が黄原の部下に引き立てられて連れ込まれて来た。

その後には岡元組長の妻の護衛に当たっていた組の暴力団員3人が後ろ手に手錠を掛けられ部屋の中に押し込まれた。

岡元の女房である珠代は、不気味な男達に拉致され、見知らぬ所に連れ込まれた恐怖を打ち消そうとする様に、肥満した体をくねらせ虚勢を張ってヒステリックな声で叫び続けた。

「そうかい？それは知らなかったぜ。俺はまた養豚場から逃げ出して来た豚かと思っていたぜ。」

部屋の奥でゆったりとした大きなカウチに脚を組んで座っていた黄原が、笑いながら声を掛け、その場にいた黄原の部下達もつられて低い笑い声を上げた。

ここに居るのは黄原が信頼する手駒の部下達で、これまでの岡照組と目高組の離反工作は全て黄原とこの男達が密かに実行していたものだった。

「そうすると、後ろの三人は差し詰め養豚場の肥育員というところか？」

拉致してきた岡照組の組長の妻と子分を取り囲んだ男達が笑いながら言った。

黄原は長年暴力団員として修羅場を潜る経験をして来たので、どんなに虚勢を張っても人間の内面の強さ弱さを見分けることが出来た。

目高組の大姐は、女侠客になるために生まれてきたと言っても良い、度胸も据わった真に強い女であり、一喝で男達を震え上がらせるだけのカリスマ性を持っているが、一方、この女はたまたま暴力団の親分の妻となっただけの女でしかないーこれまで暴力団員の中に囲まれて虚勢を張って来ただけの弱い女で在る事を見抜いていた。

一緒に拉致してきた岡照組のチンピラ達に取っても、この女に自分の命を捧げるだけの忠誠心を感じておらず、親分の女房というだけでイヤイヤ従って来た事が見て取れ、もしもの時は、容易に裏切るだろうと確信していた。

「おい！豚のくせに何で偉そうに人間様の服を着ているんだ？」

黄原の声で男達が、淫靡な薄笑いを浮かべながら女に群がった。

無数の手が、四方から珠代の体に伸び、抵抗する女の手脚を押さえ付け、服のボタンを外し始めた。

一斉に襲いかかった不気味な男達に、厚化粧した女は悲鳴を上げて身悶えたが、男の力には敵わず、派手なブランドのワンピースは引き裂かれる様に剥ぎ取られて行った。

部屋の中にはプロのカメラマンが使用するような照明器具が並べられ悲鳴を上げて泣き叫ぶ珠代の姿が明々と照らし上げられていた。

この様子は黄原の部下達によって克明にビデオに収められていった。

護衛の部下達も部屋の隅に縛り上げられて身動きも出来ず、姐さん！姐さん！と悲痛な声を上げて歯ざしりしながら、カメラの前で裸にされて行く組長の妻を身悶えて見続けるしか無かった。

次々と豪華な着衣を奪われ、後にはデブプリと肥満した体にまわり付いた脂肪に食い込む様な黒いシルクのパンティとブラジャーが搗きたての餅の様な柔らかな白い裸身を隠すのみとなっていた。

「お前、豚のくせに随分いやらしいパンティを履いているじゃないか？まるで若い売春婦

の様だぜ！」

一人の男が、レースに包まれた大量の脂肪により形の崩れた巨大な柔らかい尻を撫でながら笑った。

シルクの布越しに突然尻たぶを撫で上げられて、ヒッ！と珠代が身を震わせた。

「大方、亭主の気を引きたくて、こんなケバイ物を履いているんだろうが、止せ止せ、まるで似合って無くて、逆に漫画みたいで滑稽だぜ。」

「豚なら豚らしくさっさと素っ裸になりやがれ！」

と、珠代の抵抗を排して最後に残っていたパンティとブラジャーも力尽くで奪い取った。身を守っていた最後の盾を奪い取られて珠代の悲鳴が部屋の中に響いた。

「何だ！これは！脂肪が付き過ぎて肝心な部分が隠れて見えないじゃないか！」

デロリと下腹に向かって垂れた腹の脂肪と両太股の脂肪で股間は見えなくなっており、タップリと脂肪を置いた滑らかな白い肌を晒す股間には黒い剛毛がびっしりと覆っていた。今や珠代の体には首に巻かれた豪奢の真珠のネックレス以外身に纏う物は無かった。

「ヘッ！豚に真珠とは良く言ったモノだぜ！」

男達の輪の中で背中を丸めて両手で顔を覆って羞恥に咽び泣く女を揶揄し続けた。

「おい！お前達も親分の飼っていた豚の裸姿は今まで見たことが無いだろう？良く見せて貰ったらどうだ？」

と、部屋の隅に縛り上げられて血走った目でこちらを見詰める岡照組の三下ヤクザに声を掛けた。

男が女の背を蹴り上げて前に向かって押し倒した。

全裸に剥き上げられた女は男達の暴力の前に先程までの虚勢は消え失せ、啜り泣きしながら、恐怖と羞恥に肥満した身体をブルブルと震わせ、男達に命じられるままに、大人しく床の上に四つん這いの姿勢を取らされた。

床に向かってダラリと大きな乳房と肥満した腹が垂れ下がった。

「おい！この雌豚が今まで世話を焼いてくれたお礼に自分のマ●をお前達に見せたいって言うてるぜ！良く見せて貰ったらどうだ？」

と、部屋の隅に固まっている男達の方向に尻を向けさせると、タップリと贅肉の載った尻たぶを左右に押し広げた。

秘部を厚く覆っていた臀肉が押し広げられ、秘められた場所に冷たい外気が触れるのを感じ

じて、羞恥の余り悲鳴を上げた。

「アアーッ！イヤ！見ないで！」

これまで自分が顎で使ってた子分達に、女である部分を目撃されると言う、恐怖とも羞恥ともつかない感情に襲われ体をブルブルと震わせた。

「へへ・・・豚■■■■コのご開帳だぜ！」

ボリュームのある臀肉を押し広げられ、その秘裂の狭間にたたずむ柔らかな肉襞が乱暴に押し開けられ、赤く充血した奥の院の中心に在る、女であることを証明する肉の孔が丸見えとなった。

「アアーッ！イヤ！指を入れないで！」

男達は秘裂を晒しただけでは飽き足りないのか、露出した肉孔に無理矢理左右から人差し指を挿し入れた。

突然男の太い指の侵入を受けて、女が腰を震わせて悲鳴を上げた。

「何だこれは？ガバガバのユルユルじゃないか？」

湿り気を帯びた肉洞内にあっさりと指が沈み込んだことに呆気にとられた様に言った。

「アアーッ！痛い！其処を広げないで！ アアーッ！痛い！裂けるわ！」

女の悲痛な声を無視して、男はねじ込んだ両手の指に思い切り力を込めて左右に押し広げた。

二本の指に押し広げられて、赤黒い内部が正面に居る岡照組の男達に向かって赤ら様に晒された。

「へへ・・・臭い豚■■■■コの臭いが漂って来たぜ！ おおー！臭せえや！」

珠代の肉孔を押し広げている男が、顔を蹙める様に言った。

「お前達も親分の飼い豚のオ■■■■の臭いを嗅いでみたいんじゃないか？もっと近くで嗅いで見ろよ。」

股間を丸出しにした状態で珠代の事を、子分達の方に無理矢理、押しやりながら黄原の部下達が面白そうに笑い声を上げた。

自分達の組の大姐が陵辱されているのを何も出来ず、間近から見詰めるしかできない歯がゆさに苦しそうに顔を歪めた。

「待て、大姐が素っ裸なのに子分達が服を着ていたら不公平だろう。」

黄原に命じられて男達が、後ろ手錠をされて壁に縛り付けられていた岡元組の男達に群が

りズボンを脱がしにかかった。

対抗する組の手に落ちて、護衛していた大姐も守ることが出来ず、すっかり意気阻喪していた岡元組の男達は裸に抵抗も出来ず、ズボンを脱がされ更に下着を剥ぎ取られた。

上半身は服を着たままなのに下半身を丸出しにされた男達の股間から醜い肉片が垂れ下がっていた。その滑稽な姿に黄原の部下達が指を指して笑い上げた。

珠代の膣孔から指を抜き取った男は、膣内の体液で濡れた指を肥満してダブダブとした尻で拭き、もう一人の男から差し出された特大のクスコを手にとった。

そして、無言のまま男の力で思い切り押し広げられだらしなく緩んだ穴にクスコを押し込んだ。

ズブズブと根元までステンレス製の嘴状の物体を押し込まれ、その冷たい金属片を肉洞の中に感じて、珠代はイヤ、イヤと譫言の様に呟き尻を震わせた。

最奥までクスコを入れ終えた男はねじを回して、嘴を開きに掛かった。

「へへ！随分と開くじゃないか？流石はユルユルガバガバの豚コだぜ！」

膣孔周辺の襞を左右に押し開き、どんどん開孔していく様子にクスコのネジを回す男も驚いた様に声を上げた。

「アアーッ！痛い！それ以上開けないで！」

秘部を襲う苦痛に珠代が涙を流しながら叫んだ。

後ろ手錠にされ抵抗を封じられた岡照組の子分達が、大きく開口した珠代の股間の傍に引き据えられた。

「どうだい？お前達、今まで大姐の此处を見せて貰ったことなんか無かつたろう？」

意気消沈した男達の首根っこを押さえて、珠代のパツクリと開いた膣孔に触れそうになるまで見せ付けた。

上気した珠代の体温が男の頬に触れ、胎内から滲み出る性臭が男の鼻腔を刺激する様であった。

男達は異常な環境下で神経が麻痺してしまい、珠代の胎内から漏れ出す艶めかしい女臭に当てられ男性の本能を呼び覚まされたのか、血走った目で大恩在る親分の妻の大きく開いた股間を見詰めた。

「アアーッ！イヤ！見ないで！」

男の熱い視線が秘部を焼き、荒い息が開いた秘部に触れるのが判るのか、珠代が羞恥に腰を振って叫んだ。

「へへ・・・可愛らしい声を出す様になったじゃないか？組に居た時は男達にかしずかれて偉そうにふんぞり返っていたんだろ？・・・なあ？」

食い入る様に自分達の親分の妻の股間を見詰める男達に同意を求める様に声を掛けた。

「ほらほら・・・もっと中まで良く見せてやるぜ・・・」

と、懐中電灯を持ち出して、クスコにより拵げられた内部を照らし上げた。

「どうだ？奥に見える丸いのが子袋の入り口だ！イヤらしい色をしているじゃないか？」  
懐中電灯に照らされて男達に内部まで見られているという羞恥に涙に咽びながら腰を悶えさせた。

捕らえられた岡照組の男達は、どうせこのまま無事に組に戻れたとしても、指を詰めるぐらいでは済まない制裁を受けることになるのだから一と、腹をくくったのか、目の前に引き出された肉の割れ目に血走った目を向け続けた。

この様子を黄原の部下が克明にビデオカメラに収めていった。

「お前、岡元親分からもう何年も愛されていないんだろ？この熟れた女盛りの体が悶えて仕方無かったんじゃないか？」

男が淫靡な笑みを浮かべて、乳牛の様に垂れ下がった大きな乳房を撫でたり、脂肪を載せた柔らかな白い背を撫でたりしながら聞いた。

男の言う通り、岡元と珠代の間には10年以上性交渉は無かった。

岡元は珠代の肉体に関してすっかりと興味を無くしており、外に何人も愛人を作ってそちらの方に入り浸っていたのであった。

まだ女盛りの体で旺盛な性欲は在るが、組の大姐として暴力団の男達に取り囲まれているため、他に男を作ることも出来ず、一人悶々として欲求不満をオナニーと食欲で紛らわせるしか無かったのであった。

「お前さんをこれで慰めてやるぜ！」

珠代の目の前に巨大なバイブを見せ付けた。

その巨大で禍々しいモノを見せら、恐怖を覚えたのか体をブルブルと震わせた。

「大き過ぎると言うのかい？お前さんユルユルのガバガバコにはこれ位無いと足りないぜ！」

と笑いながら目の前に差し出すのであった。

バイブは耳障りなモーター音と共にクネクネと淫靡に振動をしていた。

男の言う様に、長年に渡って男から抱かれたことの無い熟れた女体は、慢性的に性に対して欲求不満状態であり、ふとしたことでも性感を掻き揚げられそうになることがあるが、そんな時は、一人自室に籠もってバイブや様々な性具を使って肉欲を満足させていたのであった。

自分達の組織に敵対する組織の者と思われる見知らぬ男達に拉致され、不気味な男達の前で全裸にされるというこれまでの異常な環境下で神経が変な方向に振れてしまったのか、恥ずかしい姿を男達の目に晒されるという羞恥心が、不可思議な被虐の欲望の様なモノに変化して来て、思わず目の前に差し出された太いバイブに物欲しげな目を向けてしまうのであった。

バイブの発するモーター音が何時も自分の自慰の時に使うバイブのモーター音の記憶を呼び覚まし、条件反射を起こした女体が勝手に反応始め、肉奥の深部からドロリと熱い樹液が流れ出た。

女芯を埋めていたクスコを取り外していた男が、珠代の変化に気付いて大きな笑い声を上げた。

「どうだ？お前達の飼っていた雌豚はもうこんなに濡らしているぜ！まるで発情期の雌豚じゃないか？」

珠代の股間から抜き取った、淫液に艶々と塗されたステンレスの器具を嬉しそうに、囚われの男達に見せ付けた。

岡照組の男達は、まだ珠代の体内から抜き取られたばかりで湯気の立つ様な熱い愛液に濡れ輝る女性用医療器具を目を見開いて見詰め続けた。

「大事なクスコをこんなに濡らしやがって。綺麗にしろ！」

男は珠代の股間から抜き取った、まだ温もりが残るクスコを唇に押し付けた。

珠代は何も言葉を発せず、うつすらと目を閉じて、肉厚の唇を開きそれに舌を舐め始めた。

珠代の従順な態度に満足した様に、バイブを手にした男が背後に回ると、ペッと唾をバイブに吹き付け、長時間開け放たれて閉じる力を喪失した様に半開きになったままの秘孔にズブリと突き立てた。

その瞬間、ペリカンの嘴の様なステンレスの器具を口の中に納めたまま、ウッと呻いて背

中がビクッと動いた。

男は巧みにバイブを操り、的確に性感部分を探り当て、珠代の陰情を掻き揚げていった。強く押しはゆっくりと引き、珠代の泣き所を一つ一つ探る様に、グルグルと掻き回しながら敏感な箇所を責め上げるなど、男の巧みなバイブの操作により、長年に渡って秘められて来た肉欲が掻き出されて来たのか、男の操作に呼応する様に尻を振り、込み上げる性感に鼻を鳴らし続けた。

岡照組の男達は、敵方の男の手により秘裂を責められ、陰情に敗れて腰を悶えさせ続ける大姐の姿を惚けた様な表情で見詰めていた。

「へへ・・・凄い流しようじゃないか？そんなに良いのかい？」

野太いバイブをいっぱい頬張ったまま、ドクドクと愛液を放出する女陰を見詰めながら、驚いたような声を上げた。

黄原がピンポン球の様な丸い玉を幾つも繋いで棒状にした性具をバイブを操る男に渡した。男は肯いて、股間から滴り落ちる陰水をそれに絡ませ表面を潤滑すると、快感でヒクヒクと息づく様に収縮するもう一つの孔にその先端をあてがった。

「ああ・・・イヤ・・・そこはイヤ・・・」

臀肉を突き破る感触に珠代が、か細い悲鳴を上げた。

「へへ・・・こっちの方は初めてだと言うのかい？その割にはこの大っきい球がスルスルと入って行くじゃないか？・・・今から前と後ろから堪らない気分させてやるぜ！」

男が言う通り、片手でバイブを巧みに操作し珠代を悶えさせながら、長さが30センチ程ある軟質の樹脂で出来た陰具を次々とアヌスの内部に押し入れて行った。

直径が3センチ程ある樹脂製の玉が菊門を通過する度に周囲の肉がその周りの淫靡な皺を伸ばして大きく開き、また閉じるを繰り返した。

恐怖と羞恥と込み上げる性感に意識がおかしくなりそうになりながらアアーイヤ、アアーイヤと譫言の様に繰り返し、太い玉が肛口を通過する度に、眉根を蹙めウッウッと腰を振るわせた。

とうとう根元まで押し込んだ事を確認すると、おもむろにカチッと握りの部分に付いたスイッチを入れた。

先端の玉にだけはバイブが組み込まれており、深く埋め込まれた腸内で激しく振動を始めた。

下腹を内側から襲う二つの振動に珠代が悲鳴の様な声を上げた。

男は二本のヒ首を肥大した臀肉に突き刺す様に、二つの性具で珠代の二つの性感を深々と貫き一層珠代の性感を掻き揚げた。

巨大なパイプで前から性感を煽り立てられながら、アヌスを貫いた性具をゆっくりと出し入れされる度にめくるめく様な甘美な快感が珠代の脳髓を貫いた。

「尻穴は初めての割には、随分お楽しみの様じゃやないか？元々こちらの方も素質が在ったんじゃや無いか？」

まるで噴水の様に愛液を撒き散らして快美感に身悶える珠代の様子を楽しそうに見詰めて言った。

今や珠代はまともな神経を失ったのか、誰に憚ることも無く肉欲にのたうち、快感に敗れて大声で泣き叫んでいた。

珠代の悲鳴の様な甘美な涕泣は部屋中に響き渡っていた。

「おい！此奴ら自分達の組の大姐の悶える姿を見て大事なモノを押っ立てているじゃないか！」

上半身は服を着たままだが、下半身を剥き出しにされた岡照組の若いチンピラの股間から男のモノが大きくそそり立っていることを発見して黄原が笑い声を上げた。

デップリと脂肪を載せた大きな尻に、まるで尻尾の様に二本の性具を突き立てられて、ブルブルと腰を震わせて身悶える淫らな有様を示す股間の直ぐ傍に正座させられた子分達の股間からまるでキノコが生え出る様に突き出している様子を見つけたのだった。

見ると隆々と隆起した肉茎の鈴口からは先走りの透明な液が溢れ出していた。

「そりゃお前達は未だ若くて元気盛りなんだから、大姐の飛沫<sup>しぶき</sup>が掛かる様なカブリツキでこんな凄いのを見せられたら変な気分にもなるだろう・・・」

「お前達もこのままじゃ気分が収まらないだろうから、大姐に始末して貰え！・・・その大っきく反り立ったモノを大姐にしゃぶって貰え！」

黄原の命を受けた部下達が、珠代の下半身の傍で正座する岡照組のチンピラ達を立ち上がらせて前に回らせた。

珠代の欲情に塗れた淫らな姿に思わず劣情を覚えた男達であったが、今四つん這いになった大姐の顔の正面立つと、組に居た時の記憶が蘇り、厳しい目で見詰められると気後れして激しく勃起していたモノが力を失い萎えていくのであった。

「おい！どうした？大事なモノが縮んで行くじゃないか！・・・承が無いな・・・それじゃ、

大姐の口の中に突っ込んで大きくして貰え。」

大姐の正面に立たされたチンピラ達は、珠代の鋭い視線を受けて、青ざめ益々萎縮していくのであった。

後ろに回った黄原の部下が真ん中に立つ男の腰を押して、珠代の唇に男の股間のモノを押し付けようとした。

これまで顎でこき使っていた子分の肉片が唇に触れて、不潔なモノが触れた様に顔を背けて、アアッ、イヤと呟いた。

男も大姐をここで穢してしまったら、組に帰った後の仕置きを想像して必死に腰を背けようとした。

「承が無いな・・・こんな役立たずのチンボなら男として持っていても仕方が無いだろう？切り落としてしまえ・・・」

と、匕首を手に男の肉片を今にも切り落とそうとその付け根にあてがった。

匕首の冷たい刃先が下腹に触れて、恐怖の余り悲鳴を上げた。

「どうせこのまま組に帰っても、指の一本や二本では済まされない程の責任を負わされるのだ。今更チンボの一本や二本どうってこと無いだろう？」

と、笑いながら陰茎に当てた匕首の刃先に力を込めた。

男の口から大げさな悲鳴が上がった。

そのまま匕首を引けばすっぱりと切れる所であったが、上から力を入れて押し付けただけであったので怪我は負わなかった。

「どうだ？やるか？」

恐怖に真っ青になった男を見詰めながら聞いた。

若いチンピラは返事もせずに、

「姐さん！勘弁して下さい！」と、大声で叫ぶと珠代の口に力を失って小さくなったモノを押し付けた。

子分の不潔な肉茎を押し付けられて、アアッイヤと顔を背けた。

「お前も可愛い子分の命を救うためだと思ってしゃぶってやれ」

と声を掛けられても顔を左右に振って泣き叫んで拒絶するのであった。

「承が無いな・・・あれを使え・・・」

脚を組んでカウチに腰を降ろす黄原が手下に命じた。

へえ、と黄原の命令に肯くと、何やら金属で出来た長い棒の様なモノを持って来た。

それは電気棒と呼んでいる拷問道具で、金属の棒の先から高電圧を発生させるのであった。  
棒の先端を脂肪をだぶつかせる尻に押し当てると、握りのスイッチを入れた。

ヒッ！悲鳴が上がり珠代が腰を震わせた。

「早くその汚いチンポをしゃぶるんだ！」

男は金属の棒を何度も尻に押し当て電撃を加えた。

その都度体を痙攣させて悲鳴を上げたが、泣き叫び顔を振りながら、子分のモノを口を使って愛撫することを拒み続けた。

業を煮やした様に黄原がカウチから立ち上がって、電気棒を男の手から取り上げた。

「脂肪は電気を通さないからな・・・こんな厚い脂肪に覆われているんだ、蚊に刺された程にしか感じないさ・・・こうやるんだ！」

と、言うのと秘孔に突き刺さっていたパイプをズボッと抜き取りその後に電気棒の先を埋め込んだ。

不気味な金属の棒が膣孔に埋め込まれる感触に珠代が怯えて悲鳴を上げた。

深々と電気棒の先が下腹に埋め込まれた事を確認してから、手元のスイッチを入れた。

凄まじい悲鳴が上がり珠代の体が飛び跳ねた。

白い目を剥いて、そのまま仰向けに横たわると電撃のショックでビクビクと体が痙攣し続けていた。

それから少しして、しどけなく開け放たれた股間から、レモン色の液がまるで噴水の様に飛び出して来たのを見て男達が笑い声を上げた。

ビシャビシャと床を叩いて激しい放水を続け、その勢いが次第に弱まってくる頃、珠代も漸く意識を取り戻し始めた様であった。

「どうだ？やるか？」

電撃の恐怖を嫌と言う程思い知らされた珠代は薄い目を開けて小さく肯くのであった。

「おい！大姐はお前のモノをしゃぶって下さる様だ。気が変わらない内に早く嘗めて貰え！」

黄原の部下に促された男は、「姐さん！勘弁しておくんない！」と、進退窮まって、泣き声の様な声を上げると、そのまま仰向けに横たわった珠代の顔の上に股間を預ける様に覆い被さって行った。

「そうだ！口を開けて男のモノを含むんだ！」

横に位置した黄原の部下が、指導した。

「そうだ！棒付きキャンディーを口の中で嘗める様に舌で転がすんだ！」

男達に声を掛けられ、目を白黒させながら慣れない口技を強要される珠代であった。

最初の内は恐怖で小さく萎縮していた男根であったが、珠代のグッショリと湿った暖かい口中で丁寧に嘗められている内に若者らしい性本能が呼び覚まされ、舌の上で大きく成長を始めていた――

――その後長時間に渡って、後ろの二つの陰門を黄原の部下の操作する責め具に責め立てられながら、三人の子分達が代わる代わる珠代の口内に怒張を突き立てて行った。

二つの性具の巻き上げる激しい性感に最早まともな神経は失った珠代は、今は拒むことも忘れ、積極的に子分のチンピラの股のモノを味わった。

子分達も性具に責められ堪らない快感の嵐に呑み込まれ、淫らな呻き声を上げながら、全身に玉の汗を浮かべて腰を悶えさせる大姐の姿に、激しい性欲を掻き立てられ、恩義在る親分の妻を穢すという背徳の快美感に頭は痺れた様になり、甘美な珠代の口技に煽られ、感極まった大声を発して、何度も口内に白濁した液を噴出した。

岡元から拒まれ、長い間男との性交体験が無く、熟れた女体を持て余していた珠代は、一切の障害が取り去られたように、今は一匹の性の獣と化し、女の本能と欲望の赴くままに、男の陰肉を舌先で扱き上げ頬を窄めて吸い上げ、拒むこともなく口内に放出された生臭いドロリとした液を喉を上下させて飲み下して行った。

「どうだ？こんなに美味しい生ジュースを味あうのは久しぶりだろう？」

必死に男のモノを口内に収め舌を絡める珠代を黄原の部下達がからかったが、今は一匹の性獣の様に燃え上がった珠代はそんな嘲りの言葉も耳に入らないのかウンウンと鼻を鳴らして男のモノと対峙していた。

性の快美感に狂った珠代には、男の熱く滾る様な精液がより一層性感を掻き上げるのか、男の精に当てられ夢中になって、頬を膨らせ淫靡に舌を蠢かしてより激しく男のモノを吸い上げるので在った。

ポルノビデオ

「遅い！珠代は何処に行ったんだ？」

岡元が屋敷の中で苛々と彷徨き回りながら怒鳴り声を上げた。

周囲の子分達も岡元と目を合わさない様に、恐る恐る俯いて無言のままだった。

珠代が三人の子分を護衛に付けて屋敷を出てから既に二昼夜経っていたが、何の連絡も無かったのであった。

もはや夫婦間の交流は無く、岡元に気兼ねすることなく自由気ままに行動する珠代は行く先も告げず何処かに出かけて、一晩家を空けることは珍しくなかった。

後でボディガードにあたった子分を問い詰めると、大概ホストクラブで一晩飲み明かしたりするのが常であり、珠代に最早愛情を感じていない岡元にとって家に帰らないからと行って気にすることは無かったが、今は目高組との間で非常事態であり、この様に無断で二晩も家を空けることは無かったので、非常に気になっていたのだった。

「親分！何時の間にか郵便受けにこんな物が！」

一人の男が慌てて大きな角封筒を手し、岡元の前に駆け込んで来た。

封筒を閉じていた紐を解くと中に入っていたのは、一巻のビデオテープであった。

「ええ・・・と、・・・何々？・・・何とか豚の・・・何とか育記録・・・？」

小学校程度の漢字の読みも出来ない無教養の男が、ビデオテープに張られていたラベルに印字された文字を辿々しく読み上げた。

不吉な物を感じた岡元が男からビデオテープを引ったくる様に奪い取ると、ビデオのラベルには『或雌豚の飼育記録』とワープロの文字で印字されていた。

益々胸騒ぎを覚えた岡元は慌てて自室に駆け込むと内側から鍵を掛けた。

ビデオデッキにテープをねじ込み大急ぎでテレビをオンにした。

画面が明るくなって、其処には一人の肥満した女と三人の若い男が登場した。

犬の様に床の上に四つん這いの姿勢を取るデブプリと肥満した女の上半身は黒皮のボンテージスーツで緊縛され、艶やかなエナメル革の紐がタプタプした脂肪に食い込み、まるで乳牛の様に巨大な乳房がボンテージスーツに括り上げられて、デロリと下に垂れ下がっていた。

女の口にはゴルフボールの様な猿轡がねじ込まれていた。

緊縛された女を取り囲む様に立つ三人の若者達は皆、上半身裸で引き締まった腹筋が映し出されていた。

半裸の男達は、先が何本にも別れた皮の鞭を手にして、身動き出来ない女を前後左右から打ち据えていたのだった。

先程から長く鞭打たれていたのか背中や尻に幾つもの赤い鞭跡の残る女の体は汗に塗れ、鞭打つ男達も引き締まった身体に汗を浮かべてハアハアと激しく息を吐いていた。

岡元は、手を握り締め血走った目付きで画面を睨み付けていた。

其処に映っている肥満した女は紛れもなく自分の女房の珠代であり、鞭打っている若い三人の男は、珠代を護衛して一緒に行方不明になっていた木下と張と曹の三人であった。

画面の中の四人の居る場所は、六畳程の場所を残して周囲を白い幕で覆い、床面にも安いカーペットが敷かれ、撮影場所が特定されない様になっていた。

「この雌豚め！今まで偉そうに威張りくさりやがって！何とか言ったらどうだ！」

張が鞭を大きく振りかぶるとカーペット打ち据えた。

先が幾つにも分かれた皮鞭が女の体の上で勢い良く跳ねて、弛んだ脂肪がブルッと震え、皮膚に溜まった汗が飛び散った。

絨口具を嵌められ女の口から激しい悲鳴が上がった。

この雌豚め！豚女め！と木下達が前後左右から容赦無く鞭を振り下ろし続けた。

男達の猛威の前で為す術も無く、激痛に体をくねらせて悲鳴を上げ続けていた。

男達が決して手加減せず、力いっぱい打ち据えている事は、鞭打たれた衝撃がタツプリと脂肪を載せた肌の上を波の様に伝わって行く様子から、ありありと映っていた。

たちまち女の白い身体が鞭打たれて赤く染まって行った。

女は激痛に身を振り、堪らず床の上に崩れ落ちた。

「ほら！何をオネンネしているんだよ！」

床の上に俯せとなりアルマジロの様に身体を丸めたまま、苦痛に身体をブルブルと振るわせ、荒い息を吐き続ける珠代の横腹を曹が靴先でグイグイとこじり上げた。

たちまち柔らかな脇腹の中に流行の先が尖った革靴の爪先がめり込んだ。

「ほら！大事な所を打ち据えてやるからよ！仰向けになって、その汚い股をおっ払げるんだ！」

情け容赦無く、珠代の横腹に埋め込んだ硬い革靴の爪先で肥満した女の巨体をひっくり返そうとこじり上げた。

男達に背を向けた姿勢から身体を返せば、鞭を手にした男達の目に無防備な乳房や柔らか

い腹を晒す事になる恐怖に怯えて曹の理不尽な暴力に抗し続けたが、脇腹を責められる余りの激痛に負けてゴロリと仰向けに体を返した。

まるで蛙の様に無様に白い腹を見せる女の姿に男達から失笑が漏れた。

親分の女房をいたぶる快美感に突き動かされた様に張が仰向けに横たわる珠代の下腹を靴底で踏みしめると、

「こっちは親切にお前の薄汚いマ<sup>ぶ</sup>を鞭で打ってやると言ってるんだよ！ささっと両脚<sup>あんよ</sup>を広げないか！」

と、下腹に踵を載せてグリグリとねじ上げた。

珠代の目は恐怖で見開かれ、ボールギャグにより言葉を封じられた顔を激しく左右に振った。

珠代の不服従の態度に怒りを露わにした張は、「早く広げるんだよ！」と、大声を上げると、容赦無く下腹に載せる脚に力を込めながら、剥き出しの乳房に鞭の嵐をくれた。

柔らかな乳房を鞭打たれる激痛に身を振ったが、女の急所を男達の手にする鞭で打ち据えられる恐怖に珠代は股間を堅く閉じ続けた。

業を煮やした様に山下と曹が珠代の両足首を掴むと、力尽くで左右に大きく押し開いた。

男の力に抗し切れず、無理矢理股を押し開かされながら、珠代が目に涙を浮かべて哀願する様な悲鳴を上げた。

男達の腕力の前に大きく開いた股間目掛けて張が頭の上まで大きく振りかぶった鞭を思い切り振り下ろした。

鞭の先は過たず、珠代の敏感な股間の中心部を直撃した。

急所を直撃される激痛に体を硬直させて引き攣った悲鳴を上げた。

珠代の悲鳴にも拘わらず、いや、その悲鳴に刺激を受けた様に張は益々激しく鞭を振り続けた。

激痛に白目を剥いてガックリとした珠代の股間から突然黄色い水が噴出を始めた。

「また小便をちびり始めたぜ！・・・全く此処の穴の緩い女だぜ！」

張が珠代の下腹に載せた踵でグリグリと捏ねた。

デブプリ肥満した下腹に踵が沈み込んだ。

張が上体を屈めて脚に体重を載せる度にビュッビュッと小水が飛び出た。

傷付いた秘部に小便が滲みるのか、尿を漏らす度に珠代が悲痛な叫び声を上げた。

自らの体から滲み出た汗と尿に濡れた股間をだらしなく開いたままグッタリとした珠代を

取り囲む男達は、見下ろして、額に流れ出た汗を拭った。

木下の手によりグッタリとしたままの珠代の口を塞いでいた猿轡が取り外された。

ボール状の絨口具にまとわり付いたネットリとした唾が糸を引いた。

画面の端から誰かの手が見えて、曹に何やら手渡した。

それは、バイブやローターであった。

「ほら！何時まで気持ち良さそうにオネンネしているんだよ？・・今からもっと良い気持ちにさせてやるからな！」

男達は意識の薄い珠代を上体を抱え起こすと、目を醒まさせる様に揺すり上げた。

うっすらと瞼を開けた珠代が、「ああ・・もう許して」と力無く呟いた。

男達は薄笑いを浮かべると、バイブのスイッチを入れた。

ブーンと虫の羽音の様な音を上げて振動を始めたバイブやローターを汗の浮かんだ珠代の体に押し当てた。

珠代の半開きの口から甘い悲鳴の様な声が上がった。

巧妙に操作されるローターの振動に刺激され、乳房の先端で乳首が固くなって行く様子が画面にありありと映し出された。

クリトリスの周囲や全身の性感をローターで責められて珠代が身を震わせ甘い声を上げる様になっていた。

「ほら、これが欲しいんだろ？」

ブルブルと振動する野太いバイブを珠代の目に見せ付けた。

「ああ・・お願い・・許して・・」

珠代は濡れた瞳でその醜猥な器具を見詰めていた。

「へへ、嘘を言いやがれ・・今からもっと良い気分にならせてやるからな・・」

と、言うヒクヒクと痙攣する秘肉に押し当て、巨大なバイブがズブズブと股間に埋め込まれて行った。

バイブのもたらす甘美な刺激に珠代が引き攣った様な悲鳴を上げて腰を震わせた。

「糞！そんな所まで！」

血走った目で画面を睨み付けていた岡元がテレビに向かって苛立たしげに声を上げた。

曹が二本目のバイブを手にして裏の陰孔を突き刺した瞬間だった。

「アアーッ！イヤ！そこイヤ！」

菊門を割られズブズブとパイプを埋め込まれながら、珠代が体を震わせて悲鳴を上げた。

「嘘を吐け！ここがお前の最も感じるポイントだと言うことは知っているんだぞ！」

と、太いパイプを根元まで突き刺し、カチッとスイッチを入れた。

その瞬間、ヒィ！と小さく悲鳴が上がり、珠代が腰を震わせた。

デップリとした臀肉から二本の角の様に飛び出したパイプを張と曹が巧みに操った。

曹が指摘する通り、後門は珠代のウィークポイントの様であり、パイプを細かく早く出し入れする曹の動きに煽られる様に、激しい涕泣を漏らし、夥しい愛液を溢れさせていた。

まるで温泉を掘り当てた様に次々と溢れ出す熱水に、前門を責める張が目丸くしていた。肛門を責められ随喜の涙を流す画面の中の珠代を食い入る様に見詰め、岡元は腹立たしい物を感じていた。

既に夫婦間の愛情は無くなっている状態であったが、自分の知らなかった秘密の箇所を他の男に開発され、あられもなく身悶える珠代の姿を見せられると、何か裏切られた様な気持ちになるのであった。

親分の妻を犯す事に興奮した男達は、何時の間にか全員全裸となっていた。

その激しい劣情を示すように、男達の股間からは醜いモノが鎌首を擡げ、ピクピクと上下に揺れ動いていた。

「ほら！啜えるんだ！」

木下が珠代の後ろ髪を掴んで顔を引き起こすと、自分の股間から猛々しくニョッキリと立ち上がったモノを喘ぎ声を上げ続ける口に押し付けた。

陰情に敗れ、肉欲を極限まで昂ぶらされた珠代は、まるで熱病に冒された様なトロンとした目で、目の前に差し出された、隆々と屹立する肉棒を口の中に含んで行った。

今や一心不乱に生身の肉棒をしゃぶり続ける珠代の姿に劣意を搔き立てられたのか、後ろの穴からパイプを抜き取った曹が自分のいきり立ったモノを挿入していった。

「アアー！そこはイヤ！」

不潔な穴に興奮で熱く滾った男の肉茎を埋め込まれる羞恥に思わず、木下のモノを吐き出して珠代が悲鳴を上げた。

木下が珠代の後ろ髪を掴んで再び口の中にねじ込んだ。

「何言ってやがる！前の穴はユルユルガバガバじゃないか！ここ位が丁度良いぜ！」

曹が快美感に打たれる様に腰を打ち付けた。

「後ろに一本入っていれば、少しは前の絞まりも良くなるだろうぜ！俺は前から頂くぜ！」と、珠代の下に張が潜り込んで、前門に自分の怒張を押し当てた。

今や全身三箇所穴を三人の子分に貫かれ、激しく鼻を鳴らし、全身を汗塗れにして、歓喜に身を振る珠代の姿があった。

そして三人の男達はこれまで平身低頭して仕えていた自分達の大姉を穢すことに痛烈な快感を覚えるのか、歓喜の雄叫びの様な声を発し、喜悦の表情を浮かべて腰を振り珠代の柔らかい肉の孔に自分の男のモノを打ち込み付けた。

珠代の髪を鷲掴みにして激しく顔を動かして、口中に肉塊をピストン運動させる木下の顔にも後ろの二つの穴に突き立てる曹と張の二人の顔にも、何か恍惚の表情が浮かびフィニッシュは近いと思われた。

不意に、そして、同時に三人の男が腰をビクッと痙攣させた。

それに併せる様に珠代もウッと背筋を痙攣させた。

男の熱い体液が珠代の体内に注ぎ込まれた瞬間であった。

思いの丈を放出して、少し硬さを失った肉茎が珠代の体からズルッと抜け落ちた。

そして、男の支えを失った珠代の体がまるで象が倒れる様に床に崩れ落ちた。

ハアハアと忙しく息を吐く口元からも、股間の二つの穴からも、男の放出したモノと珠代の体液が混じり合った白濁した液体が流れ出ている。

珠代も男達の乱暴な行為を受け入れ、快美感の極地を極めた事は、その貌に浮かんだ法悦の表情からも窺い知れた。

陰情に敗れた珠代の姿を晒す画面に睨み付ける様にして、

「糞！お前達！捜し出して全員なぶり殺しにしてやる！そして、珠代！お前もだ！」

激昂した岡元がテレビに向かって吐き捨てる様に叫んだ。

溜まりに溜まった欲情の丈を柔らかな女体に放出して、一心地が付いたのか、横たわる珠代の周囲に添い寝する様に三人の男が寝そべり、柔らかな脂肪に覆われた肌を愛撫する様に撫で回していた。

まるで相撲取りのお腹の様に肥満した珠代の腹を撫で回していた木下が、脂肪が厚く積み重なってタプタプする腹を掌で押しながら、

「一体この大きな腹の中には何が入っているんだ？」

と、呟いた。

「それは面白い！腹の中のモノをヒリ出させてやろうぜ！」

と、添い寝していた二人の男が面白そうに声を上げた。

画面の隅から手が出て、大きな硝子製の浣腸器を手渡すのが見えた。

そこには既に浣腸液が満たされている様であった。

「ほら、そのデカイケツを上げるんだ！」

相変わらず黒革のボンデージスーツに上半身を拘束されたままの、珠代の尻を蹴り上げて、天井に向かって双臀を上げさせた。

そして、タププリと脂肪を載せた臀肉を搔き分けて、菊門を露出させるとその中心部に浣腸器の嘴管を深々と食い込ませた。

冷たい嘴管の侵入に、アアーッ！イヤ！と、身を振って小さく悲鳴を上げた。

「ほら！腹の中に入っていくのが判るか？」

力を込めてピストンが押し込まれ、シリンダー内の浣腸液が見る見る珠代の腹の中に注ぎ込まれていった。

腸内に外部から咥え続けられる圧力に、眉根を蹙めて苦しそうに呻き声を上げた。

「へへ・・・タププリ300ccご馳走してやったぜ・・・」

空になった浣腸器を乱暴に珠代の肛門から抜き去ると、ポイッと床の上に投げ出した。

画面の隅から再び手が現れて、透明の浣腸液を並々と満たした新しい浣腸器を手渡した。

一度の注入に終わらず、再び腹内に薬液を押し入れようとする男の姿に、珠代は怯えた表情を浮かべたが、男はそんな珠代の姿に躊躇すること無く、乱暴に肛口に嘴管をねじ込んだ。

男の乱暴な動作に抗議する様に悲鳴を上げたが、そんな悲鳴を無視して男は硝子製のピストンに力を込めて、腸内に生ぬるい液を流し入れていくのであった。

「へへ・・・立て続けに浣腸器を突っ込まれてココも随分と柔らかくなって来たじゃないか・・・」

3本目の浣腸器を深々と突き立てながら男が何の抵抗も受けずにガラスの管を受け入れ始めた珠代のその部分を見詰めて感心した様に呟いた。

珠代は、額にビッシリと汗を浮かべ、早い息を吐き、床に敷かれたカーペットを搔き毟る様に固く指を閉じながら、腹内に込み上げる圧力と戦っていた。

男達の行為は果てる事が無いかの様に、次々と新しい浣腸液が無慈悲に珠代の腸内に注入

されて行った。

2リットル以上腸内に注ぎ込まれた後、浣腸器を引き抜いた瞬間、張り詰めた腸内圧力に負けたのか、注ぎ込まれた浣腸液を噴水の様に噴き出した。

「こいつ！ケツの穴の緩い女だな！もっとケツを締めろ！」

「折角そのボテ腹に入れてやった薬が出てしまったじゃないか！」

珠代の前に腰を下ろしていた曹が、腹立たしげに珠代の頬を力いっぱい張り上げた。

「ああーっ！ご免なさい！」

曹に頬をビンタされたり、他の二人の男達から高く擡げた尻を蹴られたりしながら、泣いて詫びるのであった。

「前の口も閉じておかないと、後ろの口にも力が入らないんじゃないか？」

親分の女房を陵辱するというサディステックな行為にすっかり興奮した曹が、血管を浮かべて、いきり立つ自分の肉塊を珠代の目の前に押し付けた。

すっかり観念した珠代は何も言わず、隆々とそびえ立つ陰茎を口に咥えて行った。

新たに薬液を注ぎ込まれながら、口中に突き立てられた肉塊に縋る様に啜り続けた。

その後も次々と1リットル以上注入され、最後は張がピストンを押し込んでも体内に入っていかず、逆にピストンを押し戻す様になった。

「まるで妊婦のボテ腹じゃないか！」

大きく迫り出した腹を木下が楽しそうに撫でまわした。

珠代は、風船の様に膨らんだ腸から込み上げる苦痛に声も出せず、尻にガラスの管を突き立てられたまま悶絶していた。

これ以上の注入は無理と判断した張が浣腸液を半分残したままの浣腸器を抜き取った。

その瞬間、破裂する様な音を発して、肛門を大きく拡げて液を拭きだした。

「おお！出る出る！まるで栓の壊れた水道だな！」

「いや、下水管だろう！」

悲鳴の様な声を上げながら注ぎ込まれた大量の浣腸液を放出し続ける珠代の様子を面白そうに眺めながら男達が笑い合った。

珠代の体内から噴き出した汚水は、足下から3メートル以上に渡って飛び散り、床を汚していた。

褐色を帯びた液が床の上に所々水溜まりとして残り、黒褐色の固形物がその中に混じって

いた。

「このアマ！派手に床の上に撒き散らしやがって！」

と尻をビシッと叩いた。

男の暴力を受けても床の上に尻を高く擡げた姿勢を取らされたままの珠代は、曹のモノを口に含んだまま、ただ苦しげに無きじゃくるだけであつた。

「それにしても、この臭いはどうだ！・・・エエーッ！何とか言ったらどうだ？」

珠代の口から抜き取った曹が、髪を鷲掴みにして、乱暴に揺すぶった。

男の揶揄を受けながら、涙に咽ぶ珠代が、苦しげに顔を蹙め、ウウッ・・・と呻いた。

天井に向かって擡げたままの双臀の間に菊花が、忙しなくピクピクと蠢いていた。

「へへ・・・このアマ、味噌汁のスープの次は、味噌汁の具をお出しになるそうだけ！」

「それじゃ、見ててやるから出して見ろよ！」

男達が珠代の尻の周りに集まり、ゲラゲラと高笑いし、双臀を撫で回したりして、親分の妻を嘲り続けた。

画面の隅から長方形のステンレス製のお盆が手渡された。

「ほら、このお盆の上に盛り上げてみな！」

と、鏡の様に磨かれた銀色の光沢を放つステンレスのお盆を尻に押し付けた。

両側から男達が股を開かせて、その間に長方形のお盆を挟み込ませた。

アアーッ！アアーッ！と、珠代が苦しげに呻いた。

菊花が内側から捲り上がり、チューブの様な口を内部から押し開くと、茶褐色の固形物が顔を覗かせ、ポロリと男達が手にする銀色のお盆の上に産み落とした。

「へへ・・・出て来たじゃないか・・・」

排便を始めた珠代の尻の周りを取り囲み男達が嬉しそうな声を上げた。

男達の見守る前で、まるでウインナソーセージの様な個体がポロリポロリと溢れ落ちた。

男達の持ち添えるお盆の上に、幾片かの排泄物が残されていた。

「何だ？これっぽちか？」

「このデカイ腹の割には随分少ないじゃないか？」

「日頃ご馳走を腹一杯喰ってやがるくせに、これっぽちな訳無いだろう？」

「お前、出し惜しみをしているんじゃないか？」

「親分もケチな男だったけど、お前もケチだな！」

珠代の排便が終わり、お盆の上に残された汚物を見詰めながら物足りなそうな表情を浮か

べた時、押し殺したような声が上った。

「アアーッ！まだ出ます・・・」

苦しげに眉根を蹙めて、腸内を掻きむしる苦痛に苛まれる様に声を上げた。

それと同時に脂肪をタツプリと載せた双臀がブルブルと震え始めた。

「おお！出て来た！出て来た！」

「これは凄い！まるで蛇の様じゃないか！」

珠代の肛口を押し開いた糞便は、一筋の連続した柔らかい粘土の棒の様に次々と双臀の間から産み出され、曹達が持ち添えるお盆の上に長々と蜷局を巻いていった。

「随分と放り出すじゃないか？・・・それにしてもこの臭いはどうだ！」

珠代の産み落とした汚物から立ち昇る悪臭に顔を蹙めながら、曹が吐き捨てる様に言った。

「一体どんな餌を食べばこんなに臭い糞が出せるんだ？」

下腹を痙攣させ苦しげに排泄を続ける珠代を言葉で罵った。

男達が代わる代わる擲擲し続ける間にも見る見る汚物の山を築き上げていった。

「一体どんだけ出すって言うんだよ！ズッシリと重いぜ！」

大きな糞便の山を盛り上げたお盆を手にして、呆れたような声を上げた。

「アアーッ！ご免なさい！」

度重なる醜態に神経がすっかり混乱した珠代が泣き叫ぶ様に、お盆を手にして自分の排泄物を受け止める男に訳も判らずに詫びの声を上げ続けた。

長々と続いた排泄行為が終わり、男達がハァーと息を吐いた。

「もう良いんだな？」

と、股間に押し付けていたお盆を引き上げようとした。

その時、切羽詰まった声で、「あああー、待って！まだ出ます！」と、叫ぶ様に言った。

「何？このアマ、これだけ出しておいて、まだ放り出そうと言うのか？」

と、呆れた顔をして声を上げた。

天井に向けて掲げられた双臀がブルッと震え、ブリッと云う様な音を発して、珠代の肛孔が開くと泥の様に軟化した便がドロドロと溢れ落ちて来た。

既に山の様に盛り上がっているお盆の上に後から後から降り注いだ。

「何だ！これは！もう載らないぜ！」

「この豚女！少しは遠慮と言う物をしたらどうだ！」

男達の下劣な擲擲の声を受けながらもドロドロとした黄褐色の排泄物が流れ出す事は止ま

らず、顔を左右に振って泣き叫ぶ様にして詫び続けるのであった。

ここで画面が一旦途切れて、次のシーンが始まった。

床の上に大きな布団が敷かれ、その上に一糸纏わぬ全裸姿を晒す珠代が大きく股を拡げて仰向けに寝ている姿が上から俯瞰して撮影されていた。

男達も裸のままで珠代の周囲に薄笑いを浮かべながら座っていた。

タツプリと脂肪を置いた大腿が大きく左右に開かれ、その中央に繁茂する黒々とした繁みが画面の中央に在った。

左右に座る男達が足首を掴んで、股を閉じることを封じていた。

「へへ・・・良いか？これからこのテメーのジャングルみたいなボーボーの繁みを綺麗に剃り上げてやるぜ。」

剃毛される羞恥かカミソリを秘所にはわされる恐怖か、下腹が小刻みに震え、太股の上に厚く積み上げられた脂肪がゆらゆらと揺れた。

木下が、扇の様に大きく開いた股間の前にどっしりと胡座をかいて座り込み、珠代のこんもりと茂った春草を掻き回す様に撫で回しながら言った。

既に珠代の体を拘束する物は無かったが、これから剃毛の辱めを受けると云うのに抵抗の気力の湧かないのか、羞恥に両手で顔を覆い隠して啜り泣いていた。

画面の隅から蒸したタオルが木下に手渡され、珠代の股間に覆い重ねた。

じつくりと時間を掛けて蒸し上げた後、タツプリとシェービングフォームが痴毛の上に塗され、再び蒸しタオルで蒸し上げられた。

「これは、剃りやすそうだぜ・・・」

充分蒸し上げられ、しっとりとした陰毛を撫でながら木下が楽しそうな声を上げた。

カミソリが下腹に当てられた瞬間、珠代の体がピクリと震えた。

珠代の反応を無視して、木下がカミソリをスッと引いた。

股間を覆っていたシェービングフォームを剥ぎ取り、カミソリの通った後には白い肌が露出した。

木下が忙しくカミソリを匍わせた。

珠代の左右に控える曹と張が珠代の足首を掴み、太股を抱え込んで、上体の方に持ち上げ、赤ん坊がオシメを代える時の様な股間を大きく拡げる姿勢を取らせ、木下がカミソリを使

しやすい様に手伝った。

秘所を大きくさらけ出され、尻穴まで剥き出しにされ、周囲の毛を処理されていく惨めさに珠代が両手で顔を覆い隠して啜り泣いていた。

「へへ・・・割れ目をパツクリと丸出しにしやがってよ・・・まるで赤ん坊の様じゃないか・・・」  
女性の最も大切な部分を剥き出しに仕上げられて行く珠代の秘所を見詰めながら男達が淫靡は笑いを浮かべた。

柔らかな髭を引っ張り上げ、残された縮れ毛を一本一本処理していった。

「ほらよ！すっかり綺麗に剃り上げてやったぜ！」

用済みのカミソリを脇に置いて、蒸しタオルで股間に残ったシェービングフォームを拭い取りながら、嬉しそうに声を上げた。

かつてそこに在った飾り毛は、今はすっかり姿を消し、成熟した女の命を秘める深々とした亀裂をマザマザと晒していた。

脂肪を厚く載せた白いふくよかな陰唇の間からピンク色の髭が姿を見せていた。

そんな男の劣意を誘う淫靡な姿に、取り囲む男達は髭に指を這わせたり、剥き出しの下腹を撫で回したりしていた。

「それにしてもお前もよ一、俺たちに散々輪姦<sup>まわ</sup>されて、浣腸されてよ一、少しほっそりしたんじゃないか？」

腸内に蓄積されていた老廃物も汚物と共に浣腸により排出されたのか、凹んだ腹回りを見詰めて声を上げた。

「俺はよ一、以前親分にこの女の昔の写真を見せて貰った事があるけど、これでも若い頃は男好きのするピチピチした身体をした美人だったんだぜ！」

「ああ、若い頃は女優や歌手を目指していたって一話だぜ。場末のキャバレーで歌っている所を親分に見初められたって一噂だぜ。」

「道理で顔に似合わず可愛い声上げて鳴く訳だぜ！」

「そうかい？それじゃ、これから毎日俺たちで腕に寄りを掛けてゲッソリ痩せ細るまで輪姦<sup>まわ</sup>して、それから腹ん中が空っぽになるまで浣腸しまくって、昔の様なプロポーションを取り戻す手伝いをしてやろうじゃないか！」

「なあ、お前もその方が嬉しいだろう？」

臍の窪みに指を入れて搔き回しながら聞いたので、珠代がウッと呻き声を上げた。

「どうせ組に居ても、親分に相手にされず、一日中無駄食いするしか能が無いんだからな！」  
腹や乳房など珠代の柔らかな白い肌を撫で回しながらからかう様に声を掛けた。

剥き出しにされた秘所をまさぐっていた木下が、「こいつは柔らかくてぷよぷよしてまるで大福餅の様じゃないか？」と、大福餅と形容したタププリと脂肪を載せた二つの媚肉の峰を撫で回し、その間隙に形作られた深い谷間を上下になぞる様に指を蠢かせた。

両手で白く豊かな柔肉を押し広げ、その奥のピンク色の湿った谷間を暴き出し、その周辺を彩る淫靡な襞を指で左右に押し分けた。

「ほら・・・見えて来たぜ・・・」

テレビの画面にその部分の淫靡な佇まいが大きく映し出された。

「ああ・・・イヤ・・・」

隠し毛をすっかり喪失し剥き出しとなった、恥ずかしい部分を暴き出され、男達のイヤらしい目で視姦されながら、まるで甘える様な鼻に掛かった声で弱々しく拒絶した。

股間を覆っていた痴毛をすべて剥ぎ取られ、剥き出しになった淫靡な襞の重なり合う部分にピンクの真珠の小粒の様な肉の芽が恥ずかしそうに顔を見せていた。

「へへ・・・顔に似合わず可愛い物を持っているじゃないか」

木下が魅せられた様にその部分に顔を近付け、舌を延ばしてペロリと嘗め上げた。

ざらつく舌先で敏感な神経が集中する突起を嘗められて、甘い呻きを漏らして、ピクッと体を痙攣させた。

それに呼応する様に、頭を珠代の下半身の方に向けて、両側に寝そべった張と曹の二人が撓わに垂れた乳房を掴んで柔らかく揉み上げ始めた。

タププリとした脂肪を纏った、まるで乳牛の乳房の様な柔らかな塊は、手から溢れ落ちる程の巨大さであった。

「へへ・・・まるで赤ん坊の肌の様にしっとりとしてスベスベして柔らかいじゃないか・・・」

両側から二人の男がズッシリと重いミルクの詰まった袋の様な乳房に丹念にマッサージを続けた。

三方向から責め上げる男達の巧妙な愛撫に、何時しか珠代の女の本能が引きずり出され始めたのか、頬を赤く上気させ、ああ一つと、甘い溜息が漏れた。

そして股間の中心で小さく主張する突起と両乳房の先端の突起に熱い血流が流れ、硬く凝って行った。

子供を産んだ事が無く、色素の沈着のほとんど見られない乳首がまるで野苺の様に膨らんで行く様子に、両側に添い寝する男達が思わず口に含んだ。

まるで幼子に乳首を吸いたてられ様な感触に女の本能を煽り立てられ、舌の先で転がされる感触に、ああっと、体を仰け反らした。

全身の三箇所の子の微妙な神経を散りばめられた突起を男の口唇と舌先で愛撫され、女的情念を掻き立てられた珠代は、興奮で全身を真っ赤に染めて、強制された訳でもないのに、モゾモゾと両手を伸ばすと、両側に寝そべる男の股間のモノを探り当て、ゆっくりと揉み始めた。

珠代の真心の籠もった愛撫に、曹と張の二人がウッと甘い呻き声を上げた。

珠代の股間に顔を埋める木下の舌先は、何時しか肉の蕾から下の方に降り、肉の狭間の奥の女の祠に向かっていた。

三人の男の愛撫と舌技にすっかり官能の渦の中に突き落とされた珠代の秘園からは、女の熱い樹液が滴り流れていた。

股間に顔を埋めた木下が舌先を使って肉洞の奥まで清め、その甘露な蜜を啜り上げる音が画面を通してハッキリと聞こえていた。

やがて我慢の限界にきた様に身体を起こした木下が、隆々と屹立したモノを、愛液と唾液で濡れ輝る股間の中心に押し当て、そのままズブズブと埋め込んで行った。

男の肉塊が熱く火照った華洞に埋め込まれて行く感触に、珠代が体を仰け反らして呻き声を発した。

すっかり肉欲の虜となってしまった珠代は、張のモノを手で揉み上げながら、体を捻って添い寝する曹の肉塊に顔を押し当て、そのまま太々とした肉茎を口内に収めて行った。

ひとしきり曹のモノを腔口で味わった珠代は、今度は反対側に首を振り、張の股間に顔を埋め、唾液に塗れた曹の陰茎を手で抜き上げながら、張の怒張を味わった。

「何年かぶりに男のモノを突き立てて貰って、絞め方を思い出してきたんじゃないか？」

ゆるゆるだった黒コがキツク絞まりだしたぜ！」

背中に汗を浮かべて、ハアハア荒い息をしながら、激しい勢いで珠代の股間に自分の猛々しく隆起したモノを打ち付ける木下が感激して大声を上げた。

「姐さんのおしゃぶりも大したモンだぜ！大姐にこんな見事な芸が出来るとは思ってたぜ！」

「こんな事なら、組に居る時からしゃぶって貰えば良かったぜ！」

珠代により交互に怒張を吸い上げられながら、張と曹が歓喜に堪えない様に声を上げた。

汗塗れになって腰を振り立てる木下が突然動きを止めて、アアッと呻いた。

腰をビクビクと蠢かせて、それに併せる様に珠代の下腹も痙攣する様に蠢いた。

木下が珠代の胎内に子種を植え付けた瞬間であった。

それに呼応する様に曹と張の二人も限界まで膨らんだ肉茎の先端から、ビュッと白濁した粘液を放出した。

粘り気を含んだ男の樹液が、両側から珠代の顔を打ち付けた。

思いの丈を放出して、ハアハアと荒い息を吐く男達の真ん中で、布団の上に横たわりながら満ち足りた様にウツトリとした表情を浮かべる珠代が居た。

頬にベツリと付着した精液を指先で拭くと、そのまま口の中に指先を入れて、その甘美な味覚を楽しむかの様に微笑んだ。

「ほら！お前の体から出たモノだ、綺麗にしろ！」

珠代の股間に座っていた木下が、張を退かす様に珠代の横に添い寝した。

男達は時計回りにその位置を変えて、張が珠代の股間の前に腰を降ろした。

珠代は目の前に突き付けられた、自分の愛液と男の精液に塗れたデロリと垂れた肉塊を、潤んだ瞳で見つめていたが、やがて何も言葉を発せず、上体を傾けて、その汚れた陰茎を口内に含んで行った。

それを合図とするかの様に、張が珠代の股間に下腹を埋めて行った。

曹が珠代の激情を燃え立たせる様に、乳房を揉み上げ、柔らかな肌に唇を匍わせた。

疲れを知らない若いヤクザ男達は入れ替わり立ち替わり、溜まりに溜まった男の精を自分の親分の女房の体に植え付けて行った。

ここで再び画面が途切れ、直ぐに新しい画面が現れた。

そこには、直前のシーンのまま床の上に敷かれた大きな布団の上に全裸のままの珠代が、まるで蛙が白い腹を上に向けて横たわる様に、だらしなく太い大腿を左右に大きく開いていた。

男達による陵辱が終わったばかりなのか、全身をうっすらと桜色に染め上げ、潤んだ瞳が焦点の定まらないまま天井の方に向き、白濁した精液で濡れた半開きの口から甘い呻き声を発していた。

男達の手により繁茂を奪い取られ、大きく露出したままの開け放しになった狭間からは、男達が放出した精液と珠代の胎内から溢れ出た愛液が混じり合った粘液が滴り落ちていた。いまだに激烈な性交の余韻が残るのか、時々ピクッと身体が痙攣し甘美な声が上がった。空ろな表情のまま、ゆっくりと右手を自らの乳房に延ばすと、激しかった性交の余韻を楽しむかの様に自分で乳房を揉み上げ、左手を開け広げられた股間に匍匐せ始めていた。自らの指で大きくさらけ出された秘部を慰めながら、時折指先を秘奥の中に差し入れ、まだ其処に残された粘っこい残滓を掬い上げ、自らの口に運び男の味覚を味合うように、ウツトリと目を閉ざし、濡れた首先を口内で嘗め回すのであった。自慰に耽る珠代の周囲には精を出し切った男達が恍惚の表情を浮かべて添い寝する様に寝そべっていた。

画面が仰向けに横たわる珠代の顔をアップで捕らえた。

頬を赤く上気させ、ウツトリとする様な満ち足りた表情を浮かべる珠代がカメラに向かって何か囁く様に喋り始めた。

「あなた・・・珠代は、短小で早漏なあなたなんか大嫌い・・・これからは若い曹さん達と一緒にいて行って、毎日楽しく暮らします。・・・だからもう珠代の事は探さないで・・・」ここまで珠代が画面に向かって告げるとビデオは唐突に終了した。

何も映し出さないテレビに対峙していた岡元が顔を真っ赤にさせて立ち上がった。

立ち上がりざまに怒りにまかせて手にしていたビデオのリモコンを床に叩き付けた。

ケースが割れて中から飛び出した乾電池が床の上で跳ねた。

「糞！此奴ら見つけ出して必ず八つ裂きにして殺してやる！珠代！お前もだ！」

激しい憤怒に身悶えながら、吐き捨てる様に叫んだ。

既に何年も前から自分の妻に対して愛情を持っていなかった岡元であるが、自分の持ち物だと思っていた女が、下っ端の自分の子分に抱かれて歓喜に悶える姿を見せ付けられて、言いようの無き怒りが込み上げて来た。

このビデオを黙って見ていると、部下の若いヤクザ男達が自分達の親分の女房を輪姦したビデオにしか見えない。

しかし、画面には姿を出さないが、性具を手渡したり浣腸器を手渡す人の手が映っていた。そして、何よりカメラを操作したり撮影用の照明を操作する人間が其処かに居た事は明らかであった。

張達が珠代を責める画面の奥からは下卑た男の笑い声が聞こえていた。

これが目高組の犯行であるとの証明は何も無かったが、現在の状況から目高組以外に疑うべき犯人は居なかった。

巧妙なやり方だと思った。松岡が惨殺された時も目高組の犯行を示す証拠は何ひとつ無かったが、目高組の犯行だとしか考えようが無かった。

何の痕跡も残さず易々と自分の肺腑を抉る様に仕掛けを廻らせて来る巧妙なやり方に益々怒りを燃やすのであった。

例え、愛情は感じていないとは云え、珠代は自分の歴とした妻であり、この渡世の世界では岡照組の大姐として通っている女だ。

もし、このビデオがヤクザ社会の間に回ったら自分は二度と立ち直れない程の大恥をかかれ、メンツは丸潰れになる。

「糞！待ってろ、奈和！お前の恋女房も同じ目に遭わせてやる！・・・そして、その後、戦争だ！・・・目高組を一機に捻り潰してやる！」

怒りにまかせて顔を真っ赤にして、吐き捨てる様に叫んだ。

成る程、目高組は超武闘派組織で組員は出入りに慣れた一騎当千の強者揃いだ・・・しかし戦争で最後にものを云うのは人数だ！俺の悪知恵で稼いだ金で雇い上げた兵隊の数は目高組より遙かに多く、拳銃の数でもずっと多い！これまで目高組との友好関係で目高組に牙を向ける事は無かったが、その気になれば目高組なんか一捻りだ！

一人自室に籠もり岡元は今後の策を考えていた。

そして、奈和の女房の晴江だ！

あの女は女侠客に成るために生まれて来た様な強い女だ。

そして、超武闘派の荒くれ男に常に取り囲まれる緊張感からか、歳を感じさせない凛とした美しさを持っていると思った。

奈和との良好な付き合いの中でこれまで何度も遭った事が在るが、細面で柳腰の色香が漂う姿態とキリッと引き締まった白い顔は既に40歳に入っているはずで在るが、表面上は10歳以上も若く見えた。

何の緊張感も持たず、ブクブクと肥満してしまった自分の女房とは大違いだと何時も思っていたものだった。

奈和はそんな美人で気の強い晴江に真底惚れ切っていて、これまで他所に愛人を作った事が無いとの噂である。

空手や合気道などの武道で鍛えられて、男を相手にしても決して後れを取らないと言われるあの強い美女を素っ裸にひん剥いてヒイヒイいわせれば少しは溜飲が下がるだろうと、淫靡な思いを巡らせる岡元であった。

## 戦争勃発

「大変だ！お嬢が誘拐された！」

奈和親分の娘の暁美を学校に迎えに行った組員が青い顔をして、組事務所に駆け込んで来た。

話によると、何時もの様に暁美の通う女子高に車で迎えに行った組員が、家に帰る途中の道で岡照組の組員に待ち伏せされ、前後を岡照組の車に塞がれると、車から降りて来た男達に拳銃を突き付けられ、あっという間に暁美を奪われ、相手の車に押し込まれるとそのまま連れ去られたと言う事であった。

馬鹿野郎！手前<sup>てめ</sup>え一何してやがったんでえ！と、幹部の男達が運転手の男を取り囲んで腹立ち紛れに蹴り上げた。

この様子を見ながら、目高組の大姐である晴江が困った事に成ったと呆然としていた。

そして、迂闊であったと今頃になって後悔していた。

この岡照組との諍いの中であるから、普段にも増して警戒を嚴重にすべきであった筈である。

大学に進学して海外留学中の息子の身の上は、まさか大丈夫と思うが、手元に暮らす娘を何時もと変わらず学校に送り出してしまったのは、自分の責任であったと、自責の念に駆られるのであった。

生憎、奈和親分は今回の岡照組との騒動について相談するため、自分達の組織が所属する村崎會の大親分である村崎の元に訪問しており留守であった。

親分の留守中は、奈和に成り代わって自分が組の仕切りをしなければいけないと、この非常事態の中で気丈な決心をするのであった。

「姐御！大変だ！岡照組の親分から電話が入ってます！」

一人のチンピラがコードレスフォンを手に慌てた様子で、晴江の元の駆け寄って来た。

晴江が男から引ったくる様に電話器を受け取って、「もしもし・・・」と、動揺を隠せずに受話器に話掛けた。

「おお！これは晴江姐さんかい？元気にしてたかい？」

電話機を通して岡元の濁声が漏れ聞こえて来た。

「岡元親分！内の娘を何処に連れて行っただですか？」

「娘？知らねーなー。何かい？お前んとこの娘が家出したのかい？」

岡元の白々しい態度に憤怒で唇をグッと噛みしめる晴江であった。

「まあ、年頃の娘にはフラッと家から飛び出す何てのは、良くある話さ。・・・お前も人の親なら心配な事だろう・・・何なら相談に乗ってやっても良いんだぜ。これから一人で俺ん所に来るんだ。良いな！誰も連れて来るんじゃないぜ！・・・お前も娘が可愛いだろうからな・・・」と、一方的に言うと言がブツリと切れた。

姐さん！と、晴江を取り囲み不安げに様子を窺っていた子分達が一斉に声を掛けた。

「良いかい？お前達。私や、これから岡元の屋敷に行ってくるよ！」

「姐さん！行っちゃいけない！これは罠だ！」

周囲を取り囲む子分達が声を上げた。

「大丈夫だよ。岡元親分と内の奈和は昔一つ屋根の下で暮らし、同じ釜の飯を食い合って、兄弟の杯を酌み交わした中さ・・・腹を割って話し合えば、これまでの経緯が何かの誤解だったって、きっと判って貰えるさ・・・」

奈和の留守中は自分が組を仕切らなければならない。自分が動揺して、組員に不安を与えてはならないときっぱりと決意するのであった。

そして、心の隅には岡元と奈和は古くからの友情で結ばれた中であり、面と向かって話し合えば、きっと穏便に解決するとの希望的な思いがあった。

「良いかい？この事は旅先の奈和には知らせるんじゃ無いよ！」

と、言い残すと子分の運転する車の後部座席におさまリ、目高組の事務所を後にした。

岡元親分の屋敷に送り届けた運転手の男が最後に目にしたのは、何時も通りの着物の上に組の印半纏を鯔背に羽織った晴江の後ろ姿であった。

晴江の来訪に気付いた岡照組のヤクザ達がワラワラと屋敷から飛び出て来て晴江を取り囲んだが、気丈な晴江は動じる様子も無く、「心配しなくて良いから帰りな。」とニコリと微笑むと、運転手を促して組に戻させたのであった。

男達と共に岡元の屋敷の中に消えた晴江の様子は窺いようも無かった。

目高組に戻った男が一部始終を目高組の幹部達の前で話した。

喧嘩慣れした幹部連中も今度ばかりはどうしたものかと、思案に暮れるのであった。

そして、大姐からは、絶対に親分に知らせるんじゃ無いよと、厳命されていたが、やはり奈和親分に報せるべきと決まり、村崎會を訪問中の奈和に電話を掛ける事になった。

「馬鹿野郎ー！何故一人で行かせた！」と、電話機から奈和が怒鳴る声が聞こえた。

そして、「直ぐこれから帰る！」と、焦った声で伝えた。

奈和が旅先から大急ぎで立ち戻り、S市に着いたのは夜の10時を回っていた。

迎いの男の運転で組事務所に向かいながら、奈和組長は車窓から眺めるS市の様子の変化に驚いていた。

否、変化したというのは間違いである。一街を歩く人々の間には何も普段と変わった所は無い。

おりからのバブル景気に浮かれて暢気に酔った男が千鳥足で歩いていたたり、若いアベックが嬉しそうに手を組んで歩いていたたり、普段の平和な繁華街の通りそのままであった。

恐らくこの車を運転している男も何も気が付いていない事だろう・・・しかし、自分には判るのだ！それは長年抗争に明け暮れ、血腥い世界に生きて来た男の、野生の肉食獣にも似た感覚の様なものであった。

それは、これから始まる抗争に向けて目高組事務所を取り巻く不気味な殺気であった。

運転手は何も気が付いていないようであるが、奈和には通りを行き交う人々の陰で組事務所の様子をじっと窺う男達を容易に見分ける事が出来た。

二人・・・三人か？言葉に出さずそれらの男達を数えた。恐らく別の通りからも様子を窺っている男はいる事だろう・・・

今夜、岡照組の殴り込みがある！と確信すると、これまで余りにも無防備であった自分の不覚を責めた。

そして、この期に及んでは、最早、岡元の事を親友として一方的に信用してはいけ無い！急いで戦争の準備をしなければならない！と覚悟を決めたのだった。

組事務所に戻ると幹部達を集めて、テキパキと指示を下した。

倉庫から拳銃や刀剣を出させて組員に配った。

居合わせた組員達も異様な事態を理解して、顔を強ばらせ生唾を飲み下しながら武器を受け取った。

目高組が事務所とするビルは、1 階が怪しげな不動産業、2 階が高利の金融業の事務所となっていたので、事務所の机やキャビネットなどをかき集めて窓際にバリケードの様に積み上げた。

これらの作業は外部から見張っている岡照組の組員に見つからない様、内部から慎重に行った。

取りあえず、打てる手は全て打ったが、現下の情勢を見ると自分達の組が圧倒的に不利な状況に在る事は明らかであった。

現状では外部から見張っている岡照組の男達に自分達が襲撃に気付いていると覺られない様にして、相手を油断させて、先ず相手の先制攻撃をしのぐ事が、一番の方策と考え部下にもその様に作戦の指示を与えた。

「しかし、親分！姐さんとお嬢を人質に取られている状況では、最初の攻撃をしのいでもこちらが圧倒的に不利だ！恐らく岡照組も殴り込みに人数をさいて、岡元の野郎の屋敷の警備は手薄かも知れない。これから自分の手下を連れて岡元の屋敷を見張り、もし隙があれば闇に紛れて岡元の屋敷に忍び込んで姐さんとお嬢を救出して来ます。」

黄原が奈和に申し出た。

本来なら自分が救出に向かいたい所であるが、今自分が此处を離れれば、一機に浮き足立って岡照組の殴り込みの前に目高組が崩壊してしまうであろう事は自覚していた。

自分は此处で組員を鼓舞して陣頭指揮をするしかない。

そこで黄原の申し出の通り、二人の救出は黄原に託す決心をしたのだった。

此处で目高組ナンバー 1 の古参幹部である赤石が口を尖らせて異議を申し立てて。

「なんで黄原の様な軟弱野郎に大事な姐さんとお嬢の救出を任せるのですか？ここは俺にやらせて下さい！」

古くから奈和の片腕として荒っぽい事を実行して来て、目高組を此处まで大きくしたと云う自負を持っている赤石は、大姐とお嬢の救出という大役を自分を差し置いて黄原に任せられた事が、自分の沽券を傷付けられた様で我慢出来ないのであった。

奈和組長も赤石の強さは良く分かっていた。

この男に得物を持たせたら 5～6 人の敵と対峙しても決して負けないだろう。

しかし、今回は場合が違う。

彼は後先を考えず暴走してしまう事が多い。もし、彼が救出部隊を指揮したら、一人勝手に猪突猛進してしまい、助かる命も助からなくなる可能性がある。

やはり、ここは沈着冷静に判断出来る黄原に任せるべきだと考えた。

「赤石、お前がそう言ってくれるのは嬉しい！しかし、今直ぐにでも岡照組の襲撃を受けるかも知れない！お前が此处に居てくれないと組を護る事が出来ない。これはお前しか出来ない事なんだ！」

と、説得され、組の防衛はお前しか出来ないとお竜<sup>おだ</sup>てられて、単純な赤石は嬉しそうに組に留まる事を合意したのであった。

「親分！私も姐さんとお嬢の救出に加わります！」

居並ぶ男達をかき分けて、まだ20代の終わりか30代の始め位の若い着物姿の女が奈和の前に進み出た。

「おお！お竜！お前も行ってくれるか！」と、奈和が嬉しそうな顔をした。

敵方の手に落ちた自分の妻と娘の事を考えると、野卑な男達の眼前で裸にされて、女として屈辱的な責めを受けている事が当然想像された。

そんな時、組の男の手で救出されて、恥ずかしい姿を見られてしまったら、仮に無事救助出来たとしても、その後の組の運営に影響が出るのでは無いかと心配したのであった。

この場合、男の手で救出されるより女の手で助け出された方が良いのでは無いかと思ったのであった。

お竜の本名は、鮫島常子と云う名前であるが、左右の肩から上腕に彫られた昇り龍と下り龍の彫り物で‘二つ龍のお竜’としてこの世界では名が通っている女だった。

空手と柔道の技を身に付け、荒くれ男どもを相手にしても怯むことの無い男勝りの気っぶの良さと度胸が見込まれ、若いながらも目高組の経営する賭場の管理を任されている幹部級の女侠客であった。

裏方として賭場の経営に携わるだけでなく、自らも盆莫蔭に立ち、肩肌脱ぎとなって、上腕の見事な彫り物を見せながら壺を振るのであったが、お竜の壺振り姿から垣間見える、滴る様な妖艶さが、客の評判を呼び‘壺振りお竜’の呼び名でお竜目当てに賭場に通う男達は多かった。

そのお竜が緊急事態の連絡を受けて、急遽賭場に立つ着物姿そのままに駆け付けてくれて、

救出隊への参加を申し出てくれた事に嬉しく思う奈和であった。

昔、お竜の振る壺で大負けして破産した男が、お竜を恨んで賭場から出てく来るお竜に背後から短刀で斬りかかった事があったが、素早く身を交わして逆に短刀を取り上げ、その場に投げ倒したという武勇伝があり、お竜なら並のヤクザ男には引けを取らないと考えるのだった。

「親分！自分も救出部隊に加えさせて下さい！困難な任務とは判りますが、これまで姐さん達から頂いた恩義の少しでも返したいと思います！」

奈和を取り囲んで立っていた人の輪から、まだ20代半ばの若い男が抜け出して、奈和の前に片膝着いて頭を下げた。

「おお！青沼！お前も行ってくれるか！」

青沼はまだ駆け出し中の若い組員であったが、他の組員から一頭抜きんでた所があり、以前から奈和が気に掛けていた男であった。

まだ若いが度胸と腕っ節はあり、その上、急場でも沈着冷静に判断出来る男だと見ていた。その様な所が、自分の若い頃に似ていると、奈和は常に目を掛けて来たのであったが、その青沼が申し出てくれて嬉しく思うのであった。

余り多人数で岡元の屋敷に忍び込むと目立つという黄原の提案で、お竜、青沼、黄原と黄原の信頼する腕の立つ部下の合計8名で決死隊が編成された。

表を見張る岡照組の組員に気付かれ無いよう、時間を置いてバラバラに別方向に組事務所を出てから、落ち合い場所に集合して、労務者を作業現場に運ぶ時に使う大型のワンボックス自動車に乗って岡元の屋敷に向かう事に決めた。

無事全員を拾った車が岡元の屋敷を目指していた時、突然黄原の携帯が鳴った。

着信を見ると銀子からの発信であった。

「どうした？銀子！」

慌てて黄原が携帯に話し掛けた。

「黄原さん、大変よ！目高組の大姐とお嬢が此処に連れ込まれているわ！今日は店を臨時休業にして女達には自室でじっとしている様に言われているわ。岡照組の男達が大勢集まって来て『目高組の大姐を素っ裸にひん剥いて大股揚げさせて臓物の中まで見てやる！』って、まるでお祭り騒ぎよ！」

電話口から聞こえてくる銀子の言葉に黄原の顔が強ばって行った。

「良く教えてくれた！有り難う！これから直ぐそちらに向かう！お前は何とか入り口を開けるようにしてくれ！」

「判った・・・何とかやってみる・・・」

と言うと電話が切れた。

「オイ！行く先変更だ！」

黄原が運転している男に声を掛けた。

「もう姐さんとお嬢は岡元の屋敷には居ない。居るのは一」

黄原の命令を受けて道を飛ばしていた車は、向きを変えた。

## 奇襲

銀子が黄原に連絡する少し前から、目高組の大姐の晴江と娘の暁美は岡照組の経営する秘密会員制ソープのあるビル内の一室に連れ込まれていた。

晴江達母娘を奪還しようと目高組の男達が動く事は予想出来ることであったので、自分の屋敷より護りが厳重なこちらの方が安全と考えたのだった。

普段はこの秘密ソープを運営する暴力団員の詰め所となっている事務所の中に連れ込まれた二人は、周囲を岡元組長を始めとする岡照組の男達に取り囲まれていた。

事務所に置かれていた机は隅に寄せられ、そこに作られた空き地に、囚われの母娘は互いに抱き合うように床に腰を着き、その周囲をヤクザ者達が幾重にも輪を作って取り囲んで居た。

囚われの女達の周りに群がる男達は、飢えたハイエナが獲物の柔らかな肉を目にしたように淫靡なギラ付く目で晴江達を見詰めていた。

岡元は囚われの母娘の姿に交互に視線を配りながら、二人とも実に美しい女だとじっと陰湿な目で眺めていた。

晴江は40歳を幾つか過ぎている筈であるが、目高組の親分の女房として常時荒くれ男に取り囲まれている緊張感からか、その容姿には一部の隙も無い、研ぎ澄まされた美しさを何時も持っていると思っていた。

何の緊張感もなくデクデクと肥大してしまった珠代とは大違いだと、じっと晴江を見ながら思った。

潇洒な着物を粹に着こなし、美しくアップに結われた黒髪と襟足の間から見える白く細いうなじがそこはかたない色香をたたえていた。

そして、その隣には、名門私立女子高の制服に身を包んだ、可憐な、まるでフランス人形の様に日本人離れした均整の取れた少女が怯えた瞳で母親にヒシと寄り添って居た。

まるでハーフのアイドルの様に色白で彫りの深い顔に、恐怖で見開かれた大きな目をしているが、何時までも見飽きない美形だと暁美の青白く怯える顔を繁々と見詰めながら思った。

長身で無駄な肉の無い細い体ではあるが、胸のあるべき所はちゃんとボリュームがあり、ウエストはしっかりとくびれ、尻周りは男の視線を引くように申し分無く張っている事が清楚な制服の上からでも見て取る事が出来た。

子供のいない岡元にも、もし自分にこんな娘が居たら溺愛してしまうに違いないと、奈和の娘に対する強い愛情が判る気がした。

珠代の恨みを返すべく二人を誘拐した訳ではあるが、未だに心の何処かに奈和に対する友情の様な気持ちが残っているのか、この無垢な娘を毒牙に掛けるのは気が引ける思いがしていた。

しかし、晴江に対してはキッチリと復讐をしておかなければヤクザとしての落とし前が付られないと心に誓う岡元であった。

「岡元親分！これは一体どういう事なんですか？」

二人の美女を取り囲んで下卑た薄笑いを浮かべる男達の視線を無視して、恐怖に青ざめて震える暁美を抱き寄せながら、キッとした視線で岡元を睨み据えて、毅然とした態度で訊いた。

敵方の中に捕らえられ、緊張した晴江の白い細面の顔には、鋭い刀剣の輝きが見せる妖美な美しさにも似たものがあり、見詰める岡元の方が思わずドキドキしてしまうのであった。

晴江の気迫に気押されている様子を覺られないように、一つ咳をすると

「どうもこうも無えー！俺は目高組を叩き潰す事に決めたんでえー！今頃殴り込み部隊が目高組の組事務所に向かっている所だ！ここで殴り込みが終わるのを楽しみに待ってな！」

岡元の声聞いて晴江の顔色がサッと変わった。

そして、自分達がこの卑劣な男を一方的に信じ込んでいて、余りにも迂闊であった事を悔やんだ。

奈和親分は、今は旅先であり、自分は此処に捕らえられた状態では、岡照組の不意打ちを受けたら、如何に超武闘派として知られる目高組と云えども、留守の男達は動揺してしまって、誰も組員を采配出来る人間は居らず、今の組の状況では一溜まりも無いと思うのであった。

「これから殴り込みが終わって部隊が此処に帰って来たら、功績のあった野郎にお前達を抱かせる予定になっているからな！・・男達が帰って来て直ぐに抱けるように少し風通しを良くして置こうか・・」

岡元が淫靡な目の色を浮かべて晴江の方をじっと見詰めた。

こと此処に至り完全に自分達の敗北を認識した晴江が何としても自分の娘だけは守らなければならないと悲壮な決意をするのであった。

「判りました。親分さん。その責めは晴江一人が引き受けます。どうか娘には手を出さないで下さい。」

と、哀願する様に岡元の目を見詰めた。

「良いだろう・・だけど、もしお前が嫌がる素振りを少しでも見せたら直ぐに娘に代役させるからな！」

お母様！と、暁美が目には涙を浮かべて叫ぶのを、大丈夫よ！あなたの事は私が守るからーと、ニッコリと微笑むのであった。

「それじゃ、着ている物を脱いで頂こうか。お前が嫌なら何時でも娘に代役をさせても良いんだぜ・・」

岡元が顎をしゃくりながら命じた。

もし自分一人なら、死に物狂いで暴れ回って、取り囲む男達が手にする武器を奪って、例え自分が殺されるような事があっても、岡元と差し違える位は出来るだろうーと、思ったが、親分が溺愛する大事な娘を巻き添えにする訳にはいかない・・暁美を人質に取られている状況ではどうしようも無いと観念する晴江であった。

かつての友情をかなぐり捨て敵方となった男達の目の前で裸身を晒すのは、気も狂わんばかりの屈辱であったが、今はどうしようも無いと諦めると、羽織ってた組の印半纏を肩か

らスリりと脱ぎ落とした。

組の代紋を染め上げて黒い半纏が床にフワッと落ちた時、岡元の目には目高組が崩壊した瞬間の様に感じた。

「おい！カメラ！しっかりと取っておけよ！目高組の大姐が裸姿を晒すところをはっきりとビデオに収めて全国の親分さんに配るんだからな！」

岡元が後ろを振り向きビデオカメラを構える組員に声を掛けた。

自分を裸にするだけでは飽きたらず、その屈辱の姿を全国の暴力団に配ろうという岡元の意地の悪さに歯がみする晴江であった。

「何をグズグズしているんだ！さっさと着ている物を脱がないか！」

男達の淫猥な視線に取り囲まれて、裸になるのを躊躇している晴江に声を掛けた。

岡元に怒鳴られ、大事な娘に危害が及ぶ事を恐れ、諦めた様にふっと溜息を吐くと、帯に手をかけた。

キュッキュッと衣擦れの音をさせながら帯締めを解き終えると、地味な色合いの着物の上にアクセントを作っていた華美な帯をクルクルと解き始めた。

帯を失って前が開いた着物の間から薄いピンク色の襦袢が姿を覗かせた。

岡元が無言で顎をしゃくってそのまま着物を脱ぐように命じた。

全てを諦めたように薄く目を閉じた晴江の体からはだけられた着物が足下に滑り落ちて行った。

足下の豪華な着物に取り囲まれ、薄いピンク色の長襦袢姿の晴江が立っていた。

長襦袢姿で立ち尽くす晴江の姿を繁々と見詰めながら、薄い布越しに体の線が垣間見える無駄な肉の付いてない均整の取れた小柄な女を惚れ惚れと見続けた。

憤怒をかみ殺して唇をグッと結び、下着を止めている紐を無言で解いている熟女であったが、そのか細い体からは暴力団の組の中で荒くれ男達を従わせて来たオーラの様な物が漂い出ており、見ている岡元の方が<sup>けお</sup>氣圧されそうな思いになるのではあったが、糞！こんな女に負けるかと！と思い直すのであった。もう直ぐこの女は俺の目の前にみっともない姿を晒すようになるのだ・・・

フワッと長襦袢を脱ぎ落とすと、その下は白い半襦袢と薄い水色の腰巻き姿であった。

薄い下着を通して女の体の線がより一層見える様になって来た。

最後の素肌を隠す下着姿を敵の男達の目に晒す惨めな母親の姿に晝美が悲痛な声を上げた。

青ざめた顔を強張らせ、心配そうに見詰める娘の方に顔を向けた晴江は安心させるように

ニコリと頬笑みかけた。

「さて、自慢の騎竜観音の彫り物を見せて貰おうか・・・」

岡元が乾いた声で言った。

「常々奈和の野郎が恋女房の彫り物を自慢していたが、みんなも目の保養に拝ませて貰ったらどうでい・・・」

岡元が左右を見交わして笑いながら言った。

岡元の方に背を向けた晴江が肌襦袢を脱ぎ落とすと、其処には背中一面に描かれた色鮮やかな刺青が現れた。

「おお！これは見事なもんじゃないか！」

背中中央には龍の頭に正立する観音像が描かれ、そこから派生する図柄が肩に回って上腕まで彫り込まれ、両脇腹を通って前に回っており、下は腰巻きの中に消えていた。

敵方の男達の前に裸身を晒す羞恥に背を丸めて剥き出しになった乳房を両手で隠すのを、

「ほら！前の方も見せて見ねえー」と、こちらに正面を向かせるのであった。

背中から左右に前に回った色鮮やかな彫り物は喉元から下腹に向かう体の中央部の手前で止まり、其処には白い女の地肌を見せていた。

「ほら！その手を除けてオッパイを良く見せて見やがれ！」

好色な笑いを声を上げて岡元が要求した。

自分の夫の無二の親友と信じていた男に乳房を見せる羞恥に襲われたが、曉美の方をチラチラと見る岡元の様子に諦めて、両胸を覆った手を退かせた。

小振りだが形の良いお椀の様に盛り上がった乳房を菊の花模様が覆い、乳首の根元まで色鮮やかな模様が彫り込まれていた。

野卑な男達に裸身を直視される羞恥に晴江の白い顔に朱が注していた。

「ほら！最後の物も取っちまいな！」

岡元に促され怖ず怖ずと腰巻きの紐に指を掛けて解き始めた。

ピッタリと閉じ合わされた両の大腿の上を滑るように水色の布地が落ちて行った。

その瞬間男達からオオッ！と言う歓声が上がった。

今時の女には珍しく、古風な着物生活を愛する晴江は腰巻きの下には下着を穿かない習慣だった。

一瞬股間の仄暗い佇まいを見せ、一糸纏わぬ全裸姿を野卑な男達の目に晒してしまった母親の惨めな姿に曉美の口から泣き叫ぶような声が上がった。

満座の男達の目の前に全裸姿を晒す羞恥に堪えかねたのか、晴江は体を落として、立て膝で股間を男達の中から隠し両腕で乳房を抱え込んだ。

「流石の晴江姐さんでも男達の目に裸姿を晒すのは恥ずかしいか？そんなにしっかりと大事な所を隠そうとしてよ・・・」

男達から少しでも自分が女で在る事を示す場所を隠そうと、しっかりと膝を合わせ、両手を前に交差させて、乳房を隠す姿を見て笑い声を上げた。

「何と言っても、男を男とも思わないような、男勝りの晴江姐さんじゃないか、此所に居る男共にハッキリと裸姿を見せてやれば良いじゃないか？」

「ああ・・・悔しい！今まで夫の無二の親友だと信じていたのに・・・」

体を小さく抱え込んだ姿ではあったが、目は激しい敵意に燃え、刺す様な視線で岡元の方をキッと睨み付けた。

晴江の鋭い視線に一瞬たじろいだ岡元であったが、娘を人質に取られ、男達の目の前で素っ裸になってしまっただけでは、いかな噂の女侠客でもどうしようも在るまいと落ち着きを取り戻して好色な目で小さく体を抱え込む晴江を上から下までネットリとした視線で嘗め回して、晴江の後ろに立つ内田に目配せした。

「そうかい？悔しいか？お前さんは、この後、恥ずかしそうに必死に隠そうとしているオッパイもオ●●も丸出しにされるんだぜ！せいぜい悔しがったり、恥ずかしがったりするが良いや！」

岡元の目の合図に小さく肯いた内田が、麻縄の束を抱えて、晴江の背後から近づいた。

そして、蹲る晴江の傍の床にドサッと幾つもの麻縄の束を投げ落とした。

ふと、床の上に投げ出された、毛羽立ち変色した麻縄に視線を落とした晴江が悔しそうに唇を噛みしめた。

「ほら、手を後ろに回すんだよ！」

麻縄の縄頭を手にして内田が、乳房を覆い隠していた手を掴んでグィと乱暴に背中にねじ上げた。

曉美さえ人質に取られていなければ、こんな男などねじ倒して血路を開くことは容易な事であると思ったが、逆らう事も出来ず、大人しく背中で両腕を縛り上げて行くのであった。

「何しろお前さんは、空手やら合気道やら少林寺拳法やら色々な武術の達人らしいからな！こうやって両腕を縛り上げておかないと、突然頭に血が昇って襲い掛かって来たら俺

たちじゃ歯が立たないからな・・・」

晴江の両腕を固く高手小手に縛り上げ、余った縄を胸前に通して乳房を括り上げる様に縄掛けする内田が嬉しそうに独り言を言った。

岡照組の幹部として、目高組との交流も多く、晴江とも見知りがあった内田は晴江の強さを熟知しているのだった。

内田が言う様にこうして雁字搦めに縛り上げられてしまっでは、流石の晴江でも身に付けた格闘術を駆使することも出来ず、容易に男のおモチャになってしまうことは明らかであったが、今の晴江の置かれた状況では、どうすることも出来なかった。

何の抵抗も出来ず、縄掛けされていく晴江の様子を岡元が舌なめずりしながら眺めた。

二本三本と胸の前に回されて行く縄が鮮やかな菊の花の刺青を施された乳房を上下から括り上げ、首から前に回された縄が乳房の谷間を上下に通って、形の良い乳房を前に突き出した。

幾重にも絡み付いた麻縄によって搾り上げられる様に縛り上げられた乳房の先端で乳首がツンと突き出していた。

柔肌に食い込むように熟れた女体をきつく緊縛されたことにより、より一層妖艶さが増した様に岡元には感じられた。

結婚以来、何の緊張感も無くブクブクと肥満してしまった珠代の姿を思い浮かべると、何時までも美しさを保ち続けるこんなに良い女を女房にして何時でも好きに抱いていたのかと奈和夫婦の夜の営みを想像すると、これまで親友として付き合いしてきた男に対して嫉妬心の様な物が沸々と込み上げて来た。

畜生！この女を色責めに掛けて、ヒイヒイ泣き狂わして何度も何度も気を失うまで汐を吹かせてやるーと、どす黒い欲望が込み上げて来るのであった。

「ほら、出来たぜ！」

何本もの麻縄を継ぎ足し晴江の上体を雁字搦めに縛り上げ、キッチリと縄止めを終えて、ホッとしたように息を吐いた内田がソロリと剥き出しの尻を撫で上げた。

瞬間、内田のイヤらしい指使いに晴江の体がビクッと収縮した。

そんな晴江の反応に満足した様に立ち上がると、晴江の左右に陣取った男達に目で合図した。

上半身裸になった筋骨逞しい二人の男が先が幾つにも分かれた皮鞭を手にして、床の上にしゃがみ込む晴江に左右に立った。

そして、手にした鞭を大きく振りかぶると、鋭い風切り音を立てて晴江の柔肌に鞭を叩き付けた。

鞭で打ち据える毎に晴江の体で幾つにも分かれた皮鞭が跳ね、鋭い音を立てた。

男達は、「松岡の兄貴の仇だ！」とか「どうだ！思い知ったか！」とか叫び声を上げながら交互に晴江を打ち据え続けた。

男達に鞭打たれても唇を固く噛みしめ、晴江は悲鳴を上げることも敵に哀願することも無かった。

ところが、そんな晴江に代わって暁美が、母親の体に鞭が飛ぶ毎に、まるで焼け火箸を押し付けられた様に激しい悲鳴を上げた。

自分さえ捕らわれていなければ、こんな男達などはね除けてこんな責めを受ける事も無かったろうと思うと、申し訳ない気持ちが込み上げ、居たたまれず叫び声を上げてしまうのであった。

泣き叫び、思わず母親の元に駆け寄ろうとする暁美を、何人もの男達を取り押さえ、背後から羽交い締めにし、両腕をガッチリと掴み抵抗を封じている状態であった。

「こうやかましくては、気分が乗らないな・・・」

絶叫を上げ続ける暁美にうんざりした様に岡元が言った。

「おい！お嬢を何処かに連れて行け！」

と、暁美を取り押さえる男達に声を掛けた。

鞭打ちのジンとする苦痛を押し殺して、晴江が不安そうな顔で暁美の方を見つめた。

「何、心配することはねえ。お前さんさえ大人しく俺たちのお仕置きを受けたら、娘には指一本触れねえーよ！だけど俺たちの責めに堪え切れず、娘に代わって欲しいと言いや、何時でも代わってやるぜ！」

と、肥満した腹を抱えて笑い声を上げるのであった。

「流石は音に聞こえた目高組の大姐だな。鞭で打たれたって呻き声一つ上げんか・・・こんな男勝りの晴江姐さんには、幾ら鞭で打ち上げてもちっとも効き目が無さそうだな・・・やはり此处は女ならではの責めと行こうか？」

隠微に口元をゆがめて呟いた。

岡元の下卑た笑みと言葉に、晴江の表情がハッと変わった。

岡本が誰かを探す様に後ろを振り向いた。

おい！と声を掛けられた男がへい！と返事を返した。

「親分！それでは、この後は私<sup>アッシ</sup>にお任せ下さい。」

「ヨー！ヨー！女泣かせの色の軍師の登場か！」

居並ぶ男達から歓声が上がり、ピューピューと指笛が飛んだ。

男達の歓声を受けて山崎という男がノソリと腰を上げた。

山崎はこの秘密ソープで女達に色々な性のテクニックを教えたりしているセックス技術の指導者であり、実質、内田と二人でこの秘密ソープを支えているのであった。

山崎の指示で、事務所の隅に置かれていた磔柱が中央に運び込まれた。

それは柱の様に太い角材をX字型に組み合わされた磔柱であり、X字になった柱の四隅には、両手両脚を大きく開いて固定するための皮の枷が取り付けられていた。

普段は客の要望により娼婦とのプレイに使用する物であったが、プレイを通り越して本格的な拷問道具としても使用出来る頑丈な物であった。

磔柱に固定するため、一旦晴江の裸身を縛り上げていた縄が解かれた。

暁美を人質に取られた状態で抵抗が出来ない晴江を取り囲んで、男達が磔柱まで運ぶと両手を掴んで磔柱の上まで高く擡げさせて、隅に取り付けられた手枷に固定した。

両手を頭の上で大きく左右に広げて固定すると、次は左右から両足を掴んで両脚を左右の足枷に固定しようとした。

ここでX字型の磔柱に全裸で両脚を固定されると言うことは、股間の秘めた部分を敵方の男達の目に在り在りと晒す事であり、男勝りの鉄火女の晴江にとって耐え難い屈辱であったので、思わず両脚に力を込めて、男達に抵抗した。

「ほら！何気張っているんだよ？！、娘に代わりをさせたいのか？」

左右から両足首を掴む男達から、愛娘の事を口に出され、凄まじると、抵抗の気力が失せていくのであった。

暁美の事が気が気では無い晴江は、最早抵抗を示すことなく、両側から男達に足首を絡め取られ、大きく股間を開いて磔柱に固定されていった。

膝を着き身体を丸めて、晴江の足首を磔柱の革ベルトで固定する若い組員が、大きく広げられた股の間に在る、視線の高さの位置の繁茂する艶のある漆黒の飾り毛に気を取られ、こんもりと魅惑的に盛り上がった草むらを何度もチラチラと盗み見するのであった。

野蛮な男達によって、股間を丸出しにして磔柱に縛り付けられていく母親の姿を涙に濡れた瞳で暁美が見続けた。

今や全裸で両手両脚を大きく広げて、磔柱に大の字で固定された晴江の姿が在った。

肩から上腕、脇腹から太股に掛けて彫り上げられた見事な日本図柄の極彩色の刺青を背負った美熟女が西洋風のX字型の磔柱に縛り付けられると云う、一種アンバランスな怪しげな世界を醸し出していた。

首すじから、乳房の間、腹を通して下腹に延びる刺青の施されていない、白い地肌が左右の極彩色の刺青と強いコントラストを示し、その下腹の下端にこんもりと繁茂する黒い繁みが男達の熱い視線を集めた。

「どうだ？悔しいか？両手だけでなく両脚まで縛り付けられて締まったら、得意の足蹴りも出来ないだろう！」

と、磔台に固定されてしまい、万歳をする様に両手を高く上げ、両脚を大きく広げた姿を取らされ、羞恥と悔しさに身を振る晴江の全身をシゲシゲと眺めて、笑いながら、前に突き出した乳首を指先で弾くのだった。

「お嬢を早く連れて行け！晴江姐さんも自分の娘に見られていては、伸び伸びと良い気分には漬れないだろうからな、確か7階の銀子の向かいの部屋が、空いていたはずだから其処に押し込めておけ！」

怯えた表情を見せる暁美に、「大丈夫よ！あなたの事はきっと母さんが守るから！」と磔台に大の字で縛り上げられながらも優しく頬笑みかけるのであった。

「おい！この娘もモデルみたいな体付きに関わらず、女だてらに空手やボクシングを習っているーて、話だから油断するとぶん殴られるぜ！この間も担任教師を一発でノックダウンしたって武勇伝が在るくらいだからな・・・」

暁美を取り押さえる男達に岡元が可笑しように声を掛けた。

「ぶん殴られちゃ敵わないから、こいつで縛り上げておこう・・・」

一人の男が、晴江を縛り上げていた麻縄を手にとって暁美の方に近づいた。

「ほら！お前の母ちゃんの臭いが染み込んだ麻縄で縛り上げてやるぜ！」

と嬉しそうに両手を後ろに捻り上げ縄掛けを始めた。

晴江の時と違ってセーラー服の上からではあったが、晴江の苦痛に耐えた脂汗の染み込んだ麻縄がヒシヒシと上半身を縛り上げて行った。

自分にこれから加えられるであろう淫靡な責めよりも娘の事を気遣って不安そうな表情を浮かべる晴江に、

「おい！娘の事は心配しなくても良い！お前はこれで楽しんでヒイヒイとヨガリ声を上げれば良いんだ！」

と、扇の様に大きく広げた足下に、色々な張り型やパイプや怪しげな性具を一つ一つ晴江の目に見せ付けるように並べながら、山崎が楽しそうに笑い声を上げた。

「畜生！こんな物で・・・」

目の前に並べられた淫猥な器具を目にして晴江が悔しそうな声を上げた。

「へへ・・・これからお前は此処に並べられた医療器具で上付か下付か、穴の大きさや深さの形はどうかなんてお医者さんごっこをした後、こけし人形なんかを使って俺たちとお人形遊びをするんだぜ・・・どうだ？見ただけでもワクワクするだろう？」

と、晴江の憤怒に染まる目を見返して、舌なめずりしながら、並べられた陰具の中から毒々しいバイブレーターを手にとると、

「一度コイツをしっかりと腹ん中に納めてから、思い切り喰い絞めるんだ。濡れが悪いようだったら何時でも娘と交替させるぜ・・・」

と、晴江の目に気味の悪い動きを繰り返す器具を見せ付けながら、イヤらしい笑みを口の端に浮かべて告げた。

「それじゃ、お前のカーチャンはこれから色々お楽しみになるけど、お前が居たら気が散ってノビノビと楽しめないって、言っているからお前は、席を外すんだ。」

と、制服の上からガッチリと縄掛けされた暁美を立ち上がらせて、男達の淫靡な熱気が充満した部屋から連れ出そうとした。

何か異様な雰囲気を感じて、銀子が自分の部屋の扉を薄く開いて、外の様子を眺めた。

今日は一日休業でこの秘密ソーブランドの娼婦全員部屋から出ずに待機しているように言われているのであった。

普段の艶めかしい嬌声も漏れてこないひっそりと静まりかえった館内の廊下の向こうから後手に上半身を固く縛り上げられた若い女が、三人の若い岡照組のチンピラ達に取り囲まれてこちらの方に向かってるのが見えた。

金持ちの娘が通う名門の私立女子校の制服の上から縄掛けされて怯えた娘の様子に異常な雰囲気を感じて、「誰？その娘？」と、連行する男達に銀子が囁く様に訊いた。

「何だ・・・銀子か？駄目じゃないか！今日は大人しく部屋に居るように言われているだろう！」

言葉とは裏腹に日頃の銀子に対する親しさで、さして咎め立てすることも無く言った。

「この娘か？へへ・・・聞いて驚くなよ！この娘は目高組のお嬢さ！お嬢だけじゃ無いぜ！今こいつの母親の目高組の大姐も引っ捕らえて、下の事務所で素っ裸にひん剥かれて、山崎の兄貴の得意の色責めに遭わされている所さ！股座を思い切り押し広げられて、草むらを掻き分けられて、目高組の大姐のアソコは上付か下付かとか色々調べられたあげく、これから臭いや濡れ具合や感度なんか、肉体の性能をこつてりと調べられるところさ！俺たちも早く此奴の見張りを交替して貰って色責めに加わりたいぜ！」

新しく入った若い女に男を喜ばせるテクニックを仕込んだり、反抗的な女や売り上げの悪い女に対して見せしめのために女体を責め上げる女体のトレーナーとしての山崎の淫靡な責めは岡照組の男なら誰でも知っている。

今頃施されているであろう敵方の親分の妻に対する色責めの様子を想像して、高揚感に浸りながら男達が口々に叫ぶ様に言った。

興奮のあまり声高に叫ぶ様に銀子に説明する男達の声を項垂れながら辛そうに曉美が聞いていた。

男達が得意気にほざき上げる声を目を丸くして聞いていた銀子は、「そう・・・」と、一言言うとも部屋の扉を閉じた。

これは大変な事が起きている。これは黄原の廻<sup>めぐ</sup>らしている策の一環に違いないと思うと、隠していた携帯電話を取りだして、黄原に電話したのであった。

「もしもし・・・黄原さん！大変よ！目高組のお嬢と大姐が此処に居るわよ！」

電話の向こうから黄原の声が聞こえた。

「分かった！良く教えてくれた。・・・今からそちらに向かう！お前は何とかして入り口の扉を開けてくれ！」

厳重な電気錠となっている入り口の扉を開けないと中に入れないことを知っている黄原が銀子に依頼した。

「分かったわ・・・何とかやってみる！」

もうすぐ愛しい黄原がやって来る！しかし黄原が此処に入れるか否かの成否は全て自分が電気錠を外せるか否かに掛かっている事を理解して、事の重大さに真剣な面持ちとなって強く肯く銀子であった。

X字型の礫台に手脚を大きく拡げて固定された晴江の前にどっしりと腰を降ろして胡座を

かいた山崎が、上機嫌に鼻歌を鳴らし、目の前に大きく広げられた秘部に手を伸ばしながら囁く様に喋りかけた。

「もうすぐ俺たちの殴り込み部隊がお前達の組をぶっ潰して、目高組も今夜限りさ！・・・でも心配しなくても良いぜ！目高組がぶっ潰れてもお前の事は、内のソープで雇ってやるから、これから先の生活の面倒は全部見てやるぜ！そのためにはお前の体が売り物になるかどうかを確認させて貰わないとな・・・何しろ内は、会員制の超高級ソープで女達も美人でテクニシャン揃いで通っているからな・・・」

晴江を言葉で罵りながら、柔らかに豊かに茂った黒草を逆撫でにさすり上げた。

秘毛を撫でられながら晴江が悔しそうに唇を噛んだ。

「柔らかくて良い毛並みじゃないか・・・さて、次は・・・」

存分に柔らかな春草の感触を楽しんだ後、指先で痴毛を左右に掻き分けるようにして、奥に秘められた肉の深い狭間を露わにした。

「へへ・・・色素の沈着も無え一まるで処女みたいな綺麗なワレメチャンじゃないか・・・」  
艶々とした漆黒のジャングルの中から現れた薄い桜色の秘裂の様子に山崎が感心したような声を上げた。

「ワレメも前からハッキリ見える位置に在るし、これは見事な上付のマ███で間違い無い様だぜ！」

余りの羞恥にブルブルと打ち震える熟女の柔らかな亀裂を左右に押し開き、露わとなった襞を丁寧に捲り上げながら、一々女の秘められた場所について周囲を取り囲む男達に聞こえる様に大声で評した。

亀裂に沿って山崎の指がソロリと匍った瞬間、晴江の体がビクンと痙攣した。

晴江の反応に満足した様に薄笑いを浮かべると更に何往復も指先で秘裂にそって上下させた。

こんもりと茂った春草を掻き分けて、その繁みの奥を探っている内に、突然、山崎が笑い声を上げた。

「何だ！これは！随分と、どでかいクリちゃんじゃないか？」

と、驚いた声を上げて、周囲を取り囲む男達にも良く見えるよう、濃密な繁茂を左右に掻き分けた。

取り囲む男達からも露わになった陰核を見詰めて、ドッと笑い声が上がった。

「何て大きさだ！まるで男の子の様じゃないか！」

「流石は、目高組の大姐だぜ！」

男達は剥き身にされた肉芽を指差して、盛んに囁し立てた。

自分の恥ずかしい秘密を暴露されて、晴江が唇を噛み締めて顔を左右に振りたてた。

「ココがデカイのは感度が悪いと言うが、どうかな？」

と、良いながら肉の芽をむき出しにして、親指と人差し指で摘むように揉み上げた。

堪らず、晴江は悲鳴の様な声を上げて、身体を仰け反らせた。

「どうして、どうして、なかなか感度も良いようじゃないか？」

と、満足そうに肯いた。」

山崎の淫靡な指先の動きに固定された体をくねらせる晴江に対して、次は両手の指先で左右の肉襞を摘んでそのまま左右に押し開き、二つの肉の丘に隠されていた、溪谷の奥の秘密の谷間を露わにし始めた。

「あーイヤ・・・」

顔を真っ赤に染めて晴江が小さく叫んだ。

羞恥に身悶える晴江の姿を生唾を呑み込み血走った目で見詰めていた男達から笑い声が上がった。

「アアーン！イヤン！だってよ！」

「男勝りの晴江姐さんも随分と色っぽい声を出すようになったじゃないか！」

そんな周囲の男達の歓声も気にせず山崎は事務的に女の値打ちを見定めようとするかの様に、秘孔を花卉の様に覆っている柔らかな肉襞を解す様に開いて行った。

剥き出しになったその部分に鼻を近付ける様になると、

「へへ・・・良い匂いがするじゃないか！此处が臭い女もいるけど、お前のは、男を思わず夢中にさせる、いやらしい牝の臭いがするぜ・・・」

と、開け広げられた女の最奥の部分に顔を近寄せながら満足げに肯いた。

「どうやら娼婦としての素質は、充分に在りそうだぜ・・・少し磨けば客が喜ぶようなプロに成れるぜ・・・元目高組の大姐が岡照組のソープ嬢になったと聞いたら噂が噂を呼んで客で大入りになること間違い無いぜ・・・」

そのまま露わになった秘孔に指を差し入れ様としたが、敵方の男達を前にした緊張感ですっかりと潤いが無くなった晴江のその部分は指一本通さない程、固く閉ざされていた。

力尽くで挿入しようとするれば出来たが、無理矢理押し込んでその柔らかな部分を傷付けることを恐れて、「こんなに乾いていたんじゃ承が無いな・・・」と、小さく舌打ちをした山崎は、

「これは何だか解るか？」と、X字型の礫台に両脚を扇の様に大きく広げた晴江の股間の前に並べられた怪しげな道具の中から、何やら乳白色のドロリとしたクリームのような物が入ったガラス容器を手にしてニヤリと笑った。

「こいつはとっておきの催陰クリームさ！コイツを塗られたらどんな不感症の女でも其処がムズムズして来て、ヒイヒイヨガリ声を出して、タツプリと濡らす様になるぜ・・・」

「さてと、先ずコイツをタツプリと此処に塗り込んで貰おうか・・・」

と、広口の蓋を開け、三本の指先で粘<sup>ねんちよう</sup>帖な油の様なクリームをタツプリと掬い取った。そして、左手の指先で大きく押し広げたままの秘部に淫猥なクリームを擦り付けた。ヒンヤリとした気味の悪いクリームがベツトリと纏い付く感触に、ヒィと小さく悲鳴が上がった。

そんな狼狽する晴江の様子も気にせず、鼻歌を鳴らしながら、押し広げられた粘膜の襞の一つ一つに丹念に催陰剤の入ったクリームを擦り込んで行った。

「どうでえ？何だか股の間がカーッと熱くなって来たんじゃ無いかい？」

何度も容器の中の媚薬を掬い取り、亀裂の中や肉丘の周囲にまで塗り込み終えて、上目遣いに晴江の様子を窺いながら山崎が淫靡な笑みを浮かべた。

山崎の言うように、股間からは何やらジワジワと熱いモノが込み上げ、全身の血がその部分に集中するように心臓がドクドクと鼓動し始めるのが意識された。

雪の様に白かった晴江の肌がうっすら桜色に上気始めた様子から、媚薬がその効果を発揮し始めた事を確認した山崎が、嵩に懸かった様に指先を駆使して、晴江の女の花園への攻撃を開始した。

両脚をガッチリと固定され、男達の目の前に恥ずかしい隠し所を大きく開陳したまま、抵抗を封じられた秘部を山崎の指先で責め馳られ晴江の体がビクビクと痙攣した。

こんな下劣な男の思い通りになって堪るか、心では刃向かって、山崎に塗り込められた怪しげな薬が威力を発揮して、股間は何かを求める様に熱く火照り、心臓はドクドクと鼓動を速めるのであった。

こうなれば、どんな男嫌いの不感症の女でもこっちの物だと、自信を持った山崎は益々指先の動きを速めるのであった。

今や全身にうっすらと汗を浮かべて山崎の巧みな指捌きの前に苦しげに息を吐きながら身悶える晴江の姿が在った。

「イヤー！そんな所まで！」

甲高い悲痛な声が上がった。

山崎が股間をくぐって指を伸ばし、催陰クリームをべっとりと塗した指先で秘められた菊の座を探り当てたのだった。

不潔な部分に指を押し当てられて気持ちの悪いクリームを塗り立てられる屈辱感に思わず悪寒が込み上げ歯がカチカチと鳴った。

「へへ・・・こっちだって大事な責め所だぜ！内の客の中にもこっちが大好きって客は大勢居るぜ！お前達夫婦はココを使った事は無いのかい？」

「おう！俺も何か手伝おうか？」

これまで横手に立って山崎の股間責めを眺めていた内田が声を掛けた。

「おう！それじゃ内田の兄貴はこの女のオッパイを揉んでやってくれ！」

山崎に指揮されて内田が嬉しそうに、良しきた！と一声上げると、両手に催陰クリームをタツプリと掬い取って、晴江の両乳房を驚掴みにした。

油の様にツルツルするクリームの感触に、晴江がヒィと悲鳴を上げた。

そして、敏感な乳房を覆う皮膚からも催陰クリームの成分が体内に染み込み始めたのか、心臓はドクドクと鼓動を強め、内田に揉み上げられる乳房が熱く火照り出し、切ない疼きが込み上げて来て、堪えようも無く身悶えてしまうのだった。

そんな晴江の狼狽ぶりを楽しむ様に山崎と内田は身動き出来ない晴江を責め続けた。

「最初はコリコリして固いオッパイだったけどよう！随分と柔らかくなって来たじゃないか？」

磔台の背後に回って、色鮮やかな刺青が彫り込まれた形の良い小振りなお椀の様な両乳房を揉み上げる内田が嬉しそうな声を上げた。

「ああー、イヤ！・・・お願いもう止めて！」

山崎と内田の執拗な性感責めに、最初嫌っていたのに身体が勝手に反応を始めている事に気付いて思わず甘い悲鳴を発するのであった。

「何言ってやがる！折角男勝りの晴江姐さんが感じ始めてきたんじゃないか？ここはしっかりとサービスして上げないとな！」

最初は敵方の男達の目の前で辱めを受けるという緊張感から固く張っていた乳房であったが、媚薬を含んだ油の様にヌルヌルとしたクリームで揉みしだかれる内に、薬の効果か柔らかく解きほぐされていくのであった。

「どうだ？良い気持ちになって来ただろう？」

背後から両手で晴江の両乳房をワサワサと揉み立てながら、内田が得意気に問い掛けた。

「アアッ・・・そんな事は在りません・・・」

晴江が顔を真っ赤に染め上げて激しく首を振った。

「嘘つきやがれ！乳首が固く前に飛び出して来たじゃないか？」

晴江の身体の変化に、内田が乳房を責めながら得意気に笑い声を上げた。

内田の<sup>てのひら</sup>掌の中で揉みほぐされ、乳房全体に施された刺青が催陰クリームを塗されテカテカと極彩色に輝き、見守る男達の目を釘付けにした。

「ほほう・・・随分と感じて来たようじゃないか？」

股間を責め立てる山崎も嬉しそうに声を上げた。

男二人に責め上げられる晴江の息が切なく漏れるようになりはじめ、上気した肌全体から女の匂いが立ち昇るように感じられた。

指先で責められる乳房の先端に位置する乳首がコリコリと固さを増し、前に向かって突き出すのが背後から責め立てる内田に見とがめられて羞恥に身悶える晴江に追い打ちを掛ける様に勝ち誇った様に笑い声を発した。

「こちらの方も勃起を始めたぜ！」

下腹部を受け持つ山崎が可笑しそうに笑い声を上げた。

掻き分けられた陰毛の間から覗く女陰の上端部分から伸びた陰核が、媚薬の効果と山崎の巧みな指技により、大きく前に迫り出していた。

「それにしても何て大きさだ！俺もこれまで色々な女のクリチャンは見て来たけど、これだけ大きなのは初めてだぜ！流石は女親分の貫禄という奴だ！」

片方の指先で陰孔の周りを責めながら、周囲を取り囲む男達に見え易いように春草を開き、感じ始めた肉芽を覆っていた包皮を剥き上げたので、男達がわっと身を乗り出した。

「コイツはデカイや！俺の小指の先くらいあるぜ！」

「男の物みみたいな立派な形をしているじゃないか？全く女親分の持ち物は違うぜ！」

とか、男達は、剥き身にされた大きく勃起した陰核を指差しながら様々に揶揄して笑い転げた。

山崎は新たに催陰クリームを指先でタツプリと掬い上げると、勃起し始めた肉芽に優しい指使いで塗り込み始めた。

外に向かって大きく屹立する陰部に塗り込められた淫靡な薬剤は、薄い粘膜を通してその奥に分布する鋭敏な神経を直接刺激した。

チクチクと敏感な神経を刺激され、その込み上げるむず痒い様な性感に思わず悲鳴を上げて腰を振りたててしまうのであった。

取り囲む男達は、音に聞こえた鉄火女が見せる尻振りダンスに、笑い声を上げ、卑猥な声を掛けるのであった。

クリームの効果に満足した山崎は、更に新しいクリームを掬うと、根元を覆っていた包皮を剥き上げ、露出した付け根にもタツプリと塗り込み始めた。

これまで外気に晒した事もない、敏感な部分から直接薬剤が染み込み、その強烈な刺激に堪えられず、晴江は身体を仰け反らせて悲鳴を上げてしまった。

男達の下劣な声を浴びせ続けられ、羞恥に身悶え続けたが、強力な媚薬と男達の巧みなテクニックにより燃え上がってしまった女体は、最早押し止める事は出来ず、内部から込み上げる激しい疼きに身悶えるのであった。

「ヘッ！偉そうに乙に澄まし込んで居やがったが、とうとう滴らせ始めたじゃないか！」

山崎が撫で回す秘裂からは何時しか熱い女の泉が湧き出し、まさぐる山崎の指を濡らし始めていた。

タツプリと塗り込められた媚薬は、晴江の脳髓を直撃し正常な判断をする力を奪い取り、まるで熱気を帯びた濃密な桃色の霧の中に追いやられた様に感じ、色の軍師と賞された山崎の指先は、的確に女の泣かせ処を責め上げ、催陰クリームの効果と一体となって、押さえようにも押さえられず、晴江を悶え狂わせるのであった。

晴江の陰裂から溢れ始めた豊富な愛液は、山崎の指によって掻き回され、ピチャピチャと淫靡な音を立てているのが取り囲む男達の耳に入った。

「さてと・・・ここが大きな女は鈍感だって話だが、お前えーはどうか？」と、愛液で充分に濡れた中指を肉洞の中に突き立てた。

その瞬間ビクッと体を震わせ、ヒィ！と悲鳴を上げた。

その晴江の様子に満足した様に、「どうしてどうして中々感じ易い様じゃないか？これは娼婦の素質が在るぜ・・・」と、口の端に淫靡な笑みを浮かべて呟いた。

中指を根元まで埋め込ませて、存分に蠢かせて、内部の様子を確かめた。

その都度晴江は眉根を苦しげに蹙めさせて呻き声を上げた。

ここで男の術中に落ちてはいけないと、自分を励ますのであったが、催陰薬の効果と山崎の卓越した指技により、ジンジンと疼く様な感情に敗れそうになるのであった。

「これは掘り出し物だぜ！俺の指をギュウギュウ締め付けてくるぜ！その気になって鍛えりゃ客が飛び付くような銘器に成るぜ！」

指先で内部の様子をまさぐりながら、山崎が感心したように声を上げた。

「それは、本当か？」

晴江の胸を揉み続けていた内田が嬉しそうに聞いた。

「ああ・・・俺もこれまで何人もの女の此処を確かめて来たが、コイツは数百人の一人位の素質が在るぜ！全く暴力団の姐御にしておいたのが惜しい様な良い女だぜ！」

「良かったな！これから俺たちが腕に撚りを掛けて、此処でナンバーワンのソープ嬢になれるように鍛えてやるぜ！」と、ほざくと一層激しく乳房を揉み上げた。

「親分！見てやって下さいよ！この女、銀子以来の逸材かも知れませんぜ！濡れ具合といい、絞め具合といい、少し磨きを掛ければ、たちまちこのソープでも売れっ子に成れますぜ！」

と、まるで堰が切れたように掻き出せど掻き出せど後から後から熱い陰水を吐出する晴江の姿に感激して声を上げた。

何？本当か？と岡元が椅子から立ち上がるとこちらの方に向かって来た。

岡元の肥満した身体が近付いて来るのを見て、激しい敵愾心が込み上げて来た。

「止めておくれ！アンタにだけは触られたくない！」

激しい言葉で毒突く晴江を無視して、山崎の隣に腰を落とした岡元は、右手の人差し指と中指を濡れそぼる秘孔にズブリと突き立てた。

その瞬間、アアーッ！イヤ！と悲鳴を上げ、身を振った。

これまで信じて来た男の指を秘裂の中に受け入れてしまい、ゴソゴソと内部を掻き回され、身体を仰け反らして恨めしそうな声を上げた。

しかし、そんな晴江の心とは裏腹に、淫風に巻き上げられた身体は、新たに挿入された指先をギュッと締め上げていた。

山崎の言う通り、まるで熱い湯を含ませた綿の様に濡れた、晴江のその部分が、優れた収

縮力を示し、名器の素質を有する事を認めた岡元は、こんな素晴らしい女を女房にしていた奈和を改めて恨めしく思い、嫉妬の炎を燃やすのであった。

抜き取った指先に塗された豊富な愛液の発する山百合の様な濃厚な芳香を嗅ぎ、この女を自分の秘密ソープの娼婦に突き落とすという、淫靡な計画に痺れる様な快感を覚えていた。例え、男嫌いで通っている強い女でも娘を人質に取られていたら、自ら進んで客の前に股を開くしか無いだろうと思うのであった。

しっかりこの女を開発せよーと、言うように山崎の肩をポンと叩くと、再び自分の席の方に戻って行った。

再び、男二人に上下の弱点を責め立てられ、今や晴江は全身を燃え立てられ、悲痛な吸り泣きの声を上げて身悶え続けていた。

「さてと・・・これ位通りを良くして置けば大丈夫だろうと・・・」と、言うとき晴江の秘孔を責め続けた指を引き抜いて、大腿でグッショリと濡れた指を拭った。

そして、目の前に並べられた性具の中から直径が4センチ位ありそうな大きな張り型を手にとった。

「今の晴江姐さんなら、これ位のモノは易々と呑み込んでくれるだろう・・・良いか？一旦腹の奥まで仕舞い込んで、ここの筋肉でグッと締め付けるんだ！」と、禍々しい性具を晴江の目に見せ付けながら醒めた目で睨んだ。

十分に濡れそぼった晴江の肉洞の入り口にそれを押し付けた。

今の身体の状態でその様なモノを突き立てられたら、この唾棄すべき男達の目の前で、どんな醜態を晒すことになるかと戦慄が込み上げ、思わず、アアーッ！イヤ！と、その剣先を逸らそうと激しく腰を揺すった。

「嫌なのかい？それなら娘に代わりに呑み込んでもらおうか？」

意地悪く山崎が口に出した。

曉美の事を出されて、晴江の動きが止まった。

晴江が大人しくなったのを見計らって、左右に大きく押し広げた陰花の中心のその先端をピッタリと押し当てると、手に力を込めてグッと押し出た。

「ほら、入って行くぜ！・・・どうでえ？気分はよ？・・・嬉しそうに涎をダラダラ滴らせながら、こんなぶっとい棒を呑み込んで行くじゃないか・・・」

陰裂の柔肉を押し開きながらその太い張り型が晴江の下腹の中にズブズブと消えて行った。

黄原から入り口のロックを外すように命じられた銀子が、タオル地のガウンを素肌の上に羽織っただけの体で、意を決して扉を開けて廊下に出た。

向かいの部屋には目高組のお嬢と岡照組のチンピラが居る筈であったが、しんとした物音もしなかった。

男達に気付かれないようにそっとドアを閉めると足音を立てないように廊下を進んだ。

まるで無人のビルの様に静まりかえった館内をそっと進んで、ようやく、入り口の在る階まで辿り着いた。

其処には目高組の大姐が淫靡な責めを受けているはずの事務室も在った。

其処だけは、これまでの静まりかえった階と違って、廊下まで男達の下卑た笑い声が漏れ聞こえ、異様な熱気のようなものが漂っていた。

幸いな事に岡照組の男達は事務室の中で、大姐を責める事に熱中しているため、事務室の前を通り過ぎても気付かれることは無かった。

事務室の前を通り過ぎると、入り口の扉が目に入った。

普段は分厚い鉄の扉の傍と、硝子窓で覆われた監視室の中とに一人ずつ二人の男が見張っているのがあったが、今日は休館で客が来る事が無いためか、扉の傍に男は居なかった。

監視室の一人だけであった。

スッと深呼吸をして銀子が監視室の扉を開けた。

そこに居たのは以前銀子が色仕掛けで、美咲を逃そうとした時に監視室に居た山本であった。

「何だ？銀子駄目じゃ無いか！今日は部屋で大人しくして居なきゃ！」

以前銀子の色仕掛けに迷い、内田達からヤキを入れられた時の恐怖が蘇ったのか、顔を引き攣らせて言った。

「ご免なさいね・・・山本さん、この間は、酷い目に遭わせてしまって・・・その後でお詫びをする機会も無くて、私もずっと済まないと思い続けていたのよ・・・」

と、しおらしい態度に艶然とした笑みを浮かべて言った。

銀子の男を引きつけて止まない蠱惑的な笑顔を見せられて、山本の喉がゴクッと鳴った。

「今日は、岡照組の他の人は、事務所で大騒ぎをしているんでしょう？可哀想に山本さんだけ仲間外れにされてこんな所に居るなんて、不公平だわ・・・」

と、優しく微笑みながら山本との距離を詰めて行った。

前回銀子の色仕掛けに嵌り、酷い制裁を受けた恐怖が残っているのか、拒否する様に手をバタバタさせたが、その目は虚空を彷徨っていた。

「せめてこの間のお詫びに慰めて上げるわ・・・ねえ、私にお詫びをさせてね・・・」

と、何時の間にか監視盤に向かう椅子に腰掛ける山本の傍に躍り寄ると山本のズボンのジッパーに指を掛けた。

また銀子が良からぬ事を企んでいるのでは無いかと、猜疑心に駆られた山本は銀子を押し退けて、両腕を掴むと部屋の奥まで後退りさせた。

ここまで電気錠の操作卓から銀子を離せば大丈夫だろうと安心したようであった。

山本の本心を理解したように銀子がニッコリと微笑んだ。

直立する山本の前に跪いた銀子が、ズボンのジッパーを降ろして優しい手付きで肉茎を取り出した。

既に何かに期待するように山本の肉塊がムクムクと屹立し始めていた。

「まあ！嬉しいわ！こんなに大きくして呉れて！」

ズボンから取り出したモノを活き活きとした目で見詰めながらニッコリと微笑んだ。

そして、その醜い肉塊に愛おしそうに指を這わせ、頬擦りした。

「まあ！凄いわ！ドクドクって脈打っているわ！」

その熱く熱を持ったモノに愛おしげに頬擦りをして銀子が微笑んだ。

そのまま、口を開くと大きく前に突き出した肉塊を口内に含んで行った。

銀子の口技の気持ち良さに山本が、ううっ・・・と感激の声を上げた。

山本が自分の舌技の前に陶醉し完全に油断し切っている事を確認した銀子が、バスローブのポケットに隠し持っていたスタンガンを手にした。

そして、銀子のフェラチオに没我状態になって、今、<sup>まさ</sup>当に銀子の口内に最後の欲望を放出しようとして股の付け根まで持ち上がった山本の睾丸にスタンガンの先端を押し当てた。

注ぎ込まれた高電圧が筋肉を一機に緊縮させたのか、限界まで興奮していた陰茎の先端から激しく噴射された濁液が、とっさに口を離した銀子の頬で跳ねた。

睾丸が激しく収縮し、その中の溜まりに溜ったモノを吐き出すと同時に、強烈な電撃が敏感な男性の急所を襲い、悲鳴を上げる暇もなく弾かれた様に床に倒れ落ちた。

感電のショックで床の上で苦しげにのた打つ山本に、獣の様に銀子が襲い掛かると銀子の唾液に濡れたままの陰茎や睾丸などに所構わずスタンガンを押し当て高圧電流を流し込み続けた。

敏感な男性器に高圧電流を次々と注ぎ込まれ続け、やがて口から泡を吹いて白目を剥いて意識を失い、死んだように床に倒れたまま身動きをしなくなった。

その山本の様子を勝ち誇った様に見下ろしながら、

「何時でもタダでやらせて貰えると思ったら大間違いなんだから！」

と、吐き捨てる様に言った。

そして、携帯電話をポケットから取り出すと、「もしもし・・黄原さん？電気錠は外したわ！入って来て大丈夫よ！」と、伝えた。

表を監視しているカメラのモニター画像に黄原達が階段を駆け上がって来る様子が映された。

電気錠のスイッチを押してドアが解錠される音を確認した。

スイッチを固定したまま、監視室から飛び出し、外部と隔てるドアのサムターンを外した銀子が、分厚い鉄製の扉を押し開いた。

黄原が先頭を切って館内に入って来た。

「銀子！良くやったぞ！」と、銀子の姿を其処に見た黄原がひしっと抱き締めた。

黄原にしっかりと抱き締められて、これまでの緊張が一機に解れたように黄原の胸の中に倒れ込んだ。

「お前を今すぐここから連れ出してやりたいが、今は大姐とお嬢の救出をしなければならない。大姐とお嬢の居場所を知っているか？」

黄原に抱き締められて一時的に陶酔感の中に浸っていた銀子であったが、現実に戻ると、

「大姐は事務所で岡照組の男達の色責めに遭っているわ。岡元組長も一緒よ。お嬢は7階の私の部屋と真向かいの702号室に閉じ込められているわ。見張りに3人の子分が付いているわ。」

「有り難う。それじゃ大姐の居る事務室に案内してくれ。」

黄原と銀子を先頭にお竜と青沼及び黄原の部下達で構成された決死隊が気付かれないよう周囲に気を配りながら廊下を進んだが、銀子の案内を受けるまでも無く、異様な熱気と興奮を発散する部屋は直ぐ解った。

音も立てず、扉の両側に目高組の決死隊が並んだ。

黄原が薄く扉を開いて中の様子を窺ったが、異様な興奮に包まれた部屋の中の人間は扉を開いた事も気付かない様であった。

部屋の中に居並ぶ男達の頭越しや隙間越しに、X字型の礫台が見え女の手が高く擡げられて礫柱に縛り付けられているのが見えた。

あれが大姐に違いないと思った。

扉の傍で黄原が小声で指示を行った。

「今部屋の中の男達は大姐を責めるのに夢中で、こちらが部屋に飛び込んでも直ぐには気が付かないだろう。中に20人くらい居そうだが、油断している所に不意打ちを食らわせれば、勝機は在るだろう」と、周囲の男達を見回しながら言った。

「青沼、下でドンパチが始まったらお嬢の身に危害が及ぶかも知れねえ。お前はお嬢の救出に向かってくれ。7階の702号室だ。見張りが3人付いているようだが、お前の機転なら3人ぐらい何とかなるだろう。」

青沼の命令を受けて事の重大さに真剣な表情を浮かべた青沼が、一瞬心の中で自分の任務を整理してから、判りやした一と、一声返事した。

そして、一足先にお嬢の救出のために仲間から単身離れた。

扉を開けて奇襲を仕掛けようとする黄原をお竜が制した。

「待って下さい。先ず私が飛び込んで大姐を助けます。皆さんはその後で飛び込んで来て下さい。」

お竜には今大姐が岡照組の男達の前でどんな責めを受けているか想像が出来た。

それは女ならではの淫らで屈辱に満ちた責めに違いなかった。

無事に大姐の救出に成功しても、その様な恥辱に満ちた姿を子分達の目の前に晒したら、大姐としての威厳に傷が付き、今後の組の運営に支障が出るのでは一と、恐れたのだった。大姐の淫らな責めに加わった岡照組の男達なら全員殺してしまえば口を封じる事は出来るが、救出に加わった目高組の男達を殺す訳には行かない。

目高組の子分達に女として決して見せる事の出来ない恥ずかしい姿を見せてしまえば、目高組の大姐としての沽券に大きな傷を残す事になる。

自分の今回の役目は、その様な不様な大姐の姿を目高組の男達の間からも隠す事だ一と、固く心に秘めて、決死隊に志願したお竜は、単身での突入を申し出たのであった。

例え、この身が部屋の中に占める男達によって切り刻まれようとも、これまでの奈和親分から受けた恩を返すためにこの命を投げ出す覚悟であった。

お竜の真剣な表情に黄原も気圧される物が在った。

20人以上のヤクザ者が居る部屋の中に単身殴り込みを掛ければ、当然無事に済むとは思われない。

我が身を犠牲にしても身を投じようとする度胸と組に殉ずる義侠心に感動すら覚えた黄原は、お竜の申し出を受け入れた。

「良いか？先ずお竜姐さんが最初に飛び込んで、大姐を救出する。部屋の中が大騒ぎになったら俺たちも応援に飛び込む。この手筈で良いな？」

死を決意したようなお竜の真剣な表情を覗き込みながら、黄原が念押しした。

お竜も強ばった表情で肯いた。

一方、事務所の中では、晴江が山崎と内田の色責めを受け続けていた。

今や山崎の繰り出す太い張り型を深々と下腹に収め、上半身を受け持った内田が柔らかく熟した乳房を揉み上げたり、鳥の羽根の先で繊細な神経が散りばめられた脇の下を擦ったりしていた。

色事に慣れた二人の男の巧妙な手管と催陰剤の効果も加算され、晴江の体は激しく燃え上がり心では反発しようとしても、燃え盛った女体は最後の喜びを男達から与えられたくて疼くのであった。

深く肉洞内に挿入された張り型を抜き出そうとする度に、その淫靡で痛切な感触を逃すまいと張り型を強く喰い絞めて腰を振ったり、張り型が深く差し込まれる時には、自らそれを迎え入れ易いよう腰を突き出すのであった。

そんな晴江の下腹の筋肉が示す動きを筒具を巧妙に操作しながら山崎が慎重に確認して行った。

そして、女の本能に基づいて山崎たちの行為に呼応するように浅ましい腰の動きを示し始めた晴江の姿に、取り囲む男達は指差して笑い転げるのであった。

そんな敵方の男達が発する下卑た笑い声や卑猥な歓声も懊悩する頭脳の中には最早届かなくなっており、男の繰り出す張り形によりメラメラと熱を発する女肉から痛烈な刺激を伴い伝達する目眩く官能の炎に身を委ねるのであった。

後少して絶頂に達すると云う間隙を捉えて、山崎は張り型を抜き取った。

さつきから晴江の表情を確かめながら、気をやる寸前で性具を肉洞から抜き去り、晴江を悶えさせるのであった。

そして、燃え上がった晴江の女肉が少し醒めてから、今度はコイツで楽しもうぜ！と、別

の張り型を手に再び晴江の官能の残り火に新たな炎を点火するのであった。

そんな山崎の寸止めの焦らし攻撃に晴江の精神は狂い出しそうであった。

最後に、性具を引き抜かれた時に、イヤ！抜かないで！と悲痛な声で叫んでしまい男達の爆笑を誘った。

へへ、俺の手に掛かったら貞淑な女で通っていた奈和の女房だろうと、そこらの売春婦どもだろうと違いは無いぜ・・・と、晴江の乱れぶりを見ながら再度思うのであった。

「へへ・・・大分血が上っているようだな？それじゃ可哀想だからこれでトドメを刺してやるぜ！」と、並べられた性具の中で一番大きな禍々しい突起が周囲に飛び出した張り型を手に晴江の目に見せ付ける様に言った。

狂おしい官能に半ば朦朧とする目で、山崎が手にする淫猥な器具を目にしても、敵方の男達の見詰める前で生き恥を晒すと云う恐怖や羞恥は最早感じず、やっとこれで楽になれるという安堵感度を覚えるのであった。

何度も絶頂を迎える寸前で、意地悪く生殺しにされ、叶えられない肉慾の疼きに下肢をブルブルと震わせる晴江の姿を見て、女好きで数々の女と経験して来た岡元には、今の晴江の状態が手に取る様に判っていた。

そして、無二の親友の恋女房を此处まで追い込んだという名状出来ない悪魔的な快美感に心が打ち震えるのであった。

奈和と自分は若い時からの付き合いであり、互いに自分の方が優れている所や相手に劣っている所など全て解り合っていた。もし、二人とも同じような能力を持っていたらライバルに成ることはあっても親友に成る事は無かったろう。

特に自分達の属するヤクザ世界では互いに敵視し合い、少しでも油断をすれば寝首を<sup>か</sup>蹴られかねない世界である。

そんな世界において無償の友情を育むなど本来有り得ない筈であった。

それは、長い付き合いを通して、自分の方が相手に優越感を持てる所や素直に相手の能力を認める所など、互いの能力を素直に認め合い尊敬し合える関係から二人の友情は育まれて来たのだと思う。

しかし、岡元には一つだけどうしても勝てない大きな違いが在った。

それは、女房の差であった。

奈和の女房の晴江は、女侠客に成るために生まれてきた様な女であり、その上美貌で歳を

重ねてもその容色は衰えること無く益々磨きが掛かってきた様に感じられた。

一方自分の女房の珠代は結ばれた当時は、岡元好みの少しケバイ所のあるそれなりの魅力の在る女だったが、ヤクザの組長の女房と云う自覚も無くブクブクと太って今や見る影もない。

晴江を見る度に、こんな映画や小説の中に登場する様な女侠客が実際に居たのかと、その姿に魅了され、この美女を女房にする奈和に心の奥深くで嫉妬の炎を燃やしていたのであった。

その晴江が今や自分の組員の前で全裸を晒し、落下無残な姿をいよいよ晒そうとしていると思うと、より一層惨めな最期を遂げさせたいと、どす黒い欲望が沸き上がって来るのだった。

最初は岡元や岡照組の男達の目の前で恥ずかしい姿を晒したくないと、強靱な意志で抑圧して来た、溜まりに溜まった性欲のエネルギーが、今は逆に焦らしに焦らし抜かれることで益々増大しており、その瞬間は当にダムが決壊する様に凄まじい物に成るであろうと思いを描いた。

そして、その瞬間を更に淫靡で惨めな物にしたいという倒錯的な欲望が巻き上がって来ていた。

山崎がその巨大なモノを晴江の奥の院にそっと触れさせると、それを待ち望んでいたように、自ら肉の祠に誘おうとするかの様に腰を前に突き出した。

意地悪な山崎は、そんな肉欲に飢えた晴江をからかうように、筒具を遠のけてしまうのであった。

「ああーっ！イヤ！意地悪しないで！」

焦らし抜かれた晴江が悲鳴の様な声を上げた。

どうしようもなく燃え上がってしまい、自ら腰を蠢かせてそれを迎え入れようとする、晴江の浅ましい姿に周囲から笑い声が上がった。

「そうかい？目高組の大姐も、とうとう敵方の男達の見ている前で無様な姿を晒したくなかったかい？・・・それじゃ今止めを刺してやるからな・・・」

熱に浮かされた様な目で、山崎の手にする陰具を見詰める晴江がそっと肯いた。

フフッと薄ら笑いを浮かべた山崎が再び、熱く熟れた秘肉の襞の奥に陰具をあてがった。

「待て！その大きな張り型を使うなら、その前にその周りの毛も剃ってしまえ！その方が

カメラにもしっかりと咥え込んでいる所が良く映るだろう？」

と、これまで山崎と内田に女体責めを任せていた岡元が口を挟んだ。

岡元に届けられたビデオの中で自分の女房の珠代が、剃毛され陵辱される場面を思い出したのであった。

この熟れた美貌の女が、男を魅了する様な蠱惑的な黒い繁茂を全て剥ぎ取られ、童女のような肌を晒し、隠す物の無くなった剥き出しの秘所に巨大な張り型を突き立てられる様子は、どの様な淫靡な絵になるであろうかと痺れる様な淫靡な快感を覚えるのであった。

岡元の卑劣な言葉にハッとした様に晴江の意識が戻った。

「へへ・・・そいつは面白いや！・・・それじゃ晴江姐さんが着物に仕込んでいた自慢の匕首で綺麗さっぱり剃り上げさせて貰いましょうかね？」

内田が晴江から取り上げていた短刀を取り出して、鞘を払い手にした。

剥き身の刃が冷たく光を発していた。

山崎がひげそり用のシェービングフォームを晴江の股間に塗り付けた。

ニヤリと淫靡な笑みを浮かべた内田が、匕首を手に晴江の股間に迫った。

「アアッ・・・馬鹿な真似は止しておくれ！」

陰毛を憎い敵方の男に剃り上げられるという羞恥に晴江が狼狽して叫んだ。

「ほら！動くとな所が怪我するぜ！」

シェービングフォームを塗られた痴毛の上を内田が手にする匕首がスーッと撫でた。

匕首が通った跡には、スベスベとした白い肌が残った。

「へへ・・・どうでい？段々頼りなくなってきただろう？」

両脚の付け根に沿って匕首を通わせ、その中心部を残すのみで、次第に残り少なくなってきた毛量をジッと見詰めながら内田が声を上げた。

その時、まるでフラッシュを焚いたような閃光と大音量の爆音が事務所の中に響いた。

黄原がドアの隙間から内部に投げ込んだ、強い光と爆音を立てるが爆発力の小さい爆弾が炸裂した瞬間だった。

突然の轟音に驚いて硬直した男達を掻き分け踏み拉きながら、お竜が部屋の中に脱兎の如く飛び込んで来た。

磔された晴江の両側に立ち尽くす内田と山崎は突然の目映い光と轟音に茫然自失状態とな

っていたが、お竜は一目散に春江の下に駆け寄り、二人の男を蹴倒すと、晴江の両手を固定していた礫台の手枷の革ベルトの隙間に匕首を差し入れて切り離れた。

床の上に崩れ落ちる様に倒れた全裸の晴江に、自分が着ていた印半纏を脱いで、急いで着せた。

「ああ・・・お竜・・・」

目の前にお竜が居る事が信じられない様に呆然とした表情を浮かべる晴江に、

「姐さん！大丈夫ですか？」と、晴江を抱き抱えながら心配そうな顔で問い掛けた。

この頃には、金縛りに遭った様に呆然としていた岡照組の男達も意識を取り戻し、事態を認識して、糞！殺っちまえ！と、武器を手の一斉に二人に襲い掛かった。

お竜はまだ礫台に両脚を固定されて身動きの取れない晴江を背に庇うようにして男達の攻撃を凌いだ。

お竜が応戦している間に、まだ痺れが残る手で足枷を解くと、近くに落ちていた自分の匕首を握り締めた。

キリッと匕首を構えると、性感の絶頂を求めて咆吼していた女は姿を消し、本能的に元の強い目高組の大姐に瞬時に戻った。

晴江も超武闘派の組を纏める女親分としての力を発揮して、阿修羅の様に暴れ回り匕首を手にも男達をなぎ倒した。

これまで散々いたぶられた恨みを返す様に、憤怒の貌を浮かべ情け容赦無く男達を切り伏せた。

「糞！この女達強いぞ！」

女と思ってなめて襲い掛かった男達も晴江とお竜の強さにたじろいだ。

その時、事務所の中で乱闘が始まった事を知った黄原達が応援のために部屋の中に駆け込んで来た。

新手の攻撃を背後から受けてパニック状態になった岡照組の男達は、争って出口の扉に向かったが、扉の外で待ち受ける黄原の部下達の襲撃を受けてバタバタと倒された。

それでも何人かの男達は、襲撃を避けて廊下に逃げ出す事に成功していた。

二人の護衛に護られた岡元も、脱出に成功していた。

逃げ出す際に岡元のボディガードが、廊下の電灯のスイッチを拳銃で撃ち抜いて破壊したので、廊下は一面真っ暗となった。

暗闇の中を逃げ出した岡元組の男達を黄原達が追いかけた。

非難灯だけが足下を照らす暗闇の中で男達の怒声が響いていた。

その頃、目高組の組事務所が在るビルでも緊張感のピークに包まれていた。

目高組の組事務所では、一階は表向き不動産の店舗となっていたが、外部からの襲撃に備えて、奈和の指示で通りに面した硝子窓には、机や書類キャビネットを積み上げバリケードの様にして守りを固めていた。

「来るぞ！頭を下げろ！」

バリケードの陰に潜む男達に奈和が声を掛けた。

その瞬間、何発もの銃弾が硝子窓を砕きバリケードの状部を掠めて部屋の中に飛び込んだ。

「危ない！部屋の奥に下がるんだ！」

本能的に危機を感知した奈和が、バリケードの下に潜って銃弾を裂けていた男達に命令した。

慌てて男達が、バリケードの陰から抜け出して部屋の奥に非難した。

その直後、トラックが猛烈なスピードで事務所の中に飛び込んで来て、机や書類棚のバリケードを弾き飛ばし、運転席が事務所の中に突き出していた。

奈和の指示が遅れて、バリケードの物陰に居たらトラックに巻き込まれて重傷を負う所だったろう。

破壊された店舗とトラックとの隙間から、散らばった瓦礫を盾にしながら岡照組の殴り込み部隊が次々と侵入して来た。

その時、奈和の制止を無視した赤石が長ドスを手に一人岡照組の殴り込み部隊に突進して行った。

鬼の形相で大段平を振りかざしてこちらに向かってくる赤石に岡照組の殴り込み部隊が慌てて拳銃を乱射したが、不思議と赤石の体に当たらなかった。

「馬鹿には拳銃の弾も当たらないものだな・・・」

この様子を眺めていた奈和が呆れた様に呟いた。

相手の懷に飛び込んだ赤石は鬼神の様な強さで、岡照組のチンピラ達を次々と撫で切りにして行った。

一方、暁美は7階の部屋に岡照組の若いチンピラに見張られて閉じ込められていた。

岡照組のソープ嬢達は、全員自分の仕事部屋を割り当てられていたが、現在この部屋を使う娼婦は居ない状態であった。

何時でも新しい女が割り当てられ次第商売が出来る様に部屋の中は、整備され、毒々しい照明と独特の雰囲気を持ったキングサイズのベッドが置かれ、棚にはソープ嬢が客との性技に使用するであろう色々な淫猥な器具が所狭しと並べられ、更に主の居ない部屋は物置代わりに使われ、そこかしこに積み上げられた段ボール箱からは、妖しげな器具が顔を覗かせていた。

まだ女子高生で男性と経験の無い暁美には、どの様に使用する物か分からない器具が多数在ったが、未知なだけに逆に不気味さを与える事になっていた。

後ろ手に縛り上げられ制服の上から上半身をきつく緊縛された暁美は、荷物で足の踏み場もないような狭い床の上に正座していた。

その周囲をほんの僅かな距離で三人の若い岡照組のチンピラ共がスツールに腰掛けて取り囲む様に座っていた。

若いチンピラ達は、直ぐ目の前に腰を落とす、まるでモデルの様な美形の暁美の顔やスタイルの良い体付きを珍しい物でも見るように繁々と見詰めていた。

男達に息が掛かるような間近からギラ付く目で眺められ、恐怖感で暁美は顔も上げられ無かった。

「俺の通ってた高校はよー、県下でも一二を争うアホアホ高校でよー、通ってる女子高生もケバいブスツアレかスケバンねーちゃんみたいなのしか居なかったぜ！」

「ヘッ！そんな県下一のアホアホ高校もまともに卒業出来なかったくせによ！」

「全くだ！県下でも一二を競うこんな頭の良い学生が通う名門女子高の生徒なんか俺たちに取っては高嶺の花で、恐れ多くて傍に近寄る事も出来なかったぜ！」

「それがよー！今は名門私立高のこんなモデルみたいに綺麗なお嬢さんと間近に居られて嬉しくって仕方が無いぜ！」

男達が緊縛された暁美の顔の直ぐ間近まで顔を寄せて繁々と見詰めた。

興奮した男の鼻息が、暁美の頬を撫でた。

こんな状態で男達に襲い掛かれては、どうする事も出来ないと、暁美の恐怖は益々募って行った。

「おい！てめえーの<sup>おかーちゃん</sup>母親はよー！今山崎の兄貴の色責めに遭っているんだぜ！」

一人の若者が暁美の表情を窺うように正面から怯える暁美の顔を覗き込みながら言った。

「色責めって、分かるか？」

棚に並べられた毒々しい色をしたバイブを一つ手に取ると暁美の目の前に見せ付けた。

思わず暁美が目を固く閉ざして顔を背けた。

そんな暁美の羞恥の姿に満足した様に、「流石はヤクザの組の娘だぜ！可愛い顔をしていてもコイツの使い方は分かっているようだな？」と、イヤらしい笑みを浮かべて呟いた。

「お前、自分の母親だけにそんな恥ずかしいザマを晒させて申し訳ないと思わないか？」

と、怯える暁美の様子を見ながら凄むように言った。

「おいおい！親分からこちらの娘には指一本出すなって言われているんだぞ！」

今にも襲い掛かりそうな男の様子に、もう一人の若者が制止に入った。

「何、本当にやっちゃいはいしないさ！ただこちらのお嬢さんのお宝を拝まさせて頂こうと言うだけさ！何、こちらのお嬢さんが口を詰むんでいてくれればバレやしないさ！」

この若いチンピラの大胆な提案に、今まで美人の女子高生を目の前にしてムラムラとしていた他の二人も乗って来た。

下では兄貴達が楽しい事をやっているんだ！自分達も少し位楽しんでも罰は当たらないだろうーと・・・

バイブを手にしてイヤらしい笑みを浮かべて正面から近づいて来た若いチンピラに恐怖にかまけた暁美が床に座ったまま思わず脚で蹴り上げた。

空手を習っていた暁美であるから、正立した状態なら相当のダメージを相手に与える事は出来たろうが、正座した状態から反射的に脚を蹴り上げたただけなので威力は減殺されていた。

それでも突然顔面を蹴り上げられた若者は後ろ向きに倒されてしまった。

苦痛の呻き声を上げ鼻から血を滴らせながら起き上がってきた。

顔面を怒りで真っ赤に染めた男が拳を振り上げて暁美を叩こうとした。

「止せ！親分からは指一本触れるなと言われているんだ！顔に痣でも残したら拙い！」

慌てて他の二人が男の腕を掴んで制止した。

「全くとんでもネエーじゃじゃ馬だぜ！男の顔を蹴り上げようとするんだからな！この借りはキッチリと返して貰うぜ！」

暁美の左右に陣取った若いチンピラが暁美の足蹴りを注意しながら、脚を掴もうとした。

最後に残された両脚の自由を奪われまいと必死に脚をバタバタとさせたが、左右に陣取る男達から両足首を掴み取られてしまった。

幾ら空手やボクシングなどの格闘技を習っているとは言え、最早こうなっては、所詮女の力では男の力には抗する事は出来なかった。

そら！どうだ？と嵩に掛かった男達が曉美の両脚を左右に大きく広げた。

暴れた拍子に制服のスカートが大きく上に捲れ上がり、その奥の清楚な下着が男達の目に焼き付いた。

凶暴な欲求に吞まれた男達はなおも曉美の脚を掴んだまま大きく左右に押し広げた。

小さい頃からバレエも習い体の柔軟な曉美の股間は、ほぼ180度近く左右に開いた。

どこまで左右から脚を広げさせても開いて行く曉美の両脚に男達は面白がって押し広げた。

男の手で固定され一直線に並んだ両脚の付け根には小さな白いショーツが覆うだけであった。

清楚な白いショーツの下でぽっこと盛り上がった股間に小丘を見詰めて男達は思わず生唾を飲み込んだ。

「へへっ・・・今から股の間をマッサージしてやるぜ！」

バイブを手にした男がスイッチを入れた。

気味の悪いモーター音を上げて、バイブが淫靡な運動を開始した。

不気味に蠢くバイブを股間に押し当てられた時、まるで熱鉄を押し当てられた様に悲鳴を上げた。

「おいおい！大げさな声を上げるなよ！おめえーのおかーちゃんはよー、今頃山崎の兄貴からこんな風にされてよー！ヨガリ声を上げて鼻をフンフン鳴らしているんだぜ・・・」

ショーツの上から股間の秘め処をバイブでまさぐり続けながら男が得意そうに言った。

薄い下着の生地越しに気持ちの悪い振動を秘所に受けて、苦しげに眉根を寄せた顔を左右に振った。

調子に乗った若者は、女の秘孔が開く場所の上にバイブの先端を押し当てると、そのまま薄い布地ごと体内にめり込む様に押し入れた。

「アアーッ！イヤイヤ！」

男の繰り出す強いバイブの圧力に曉美が激しく首を左右に振って悲鳴を上げた。

「おい！見てみろよ！何やらパンティが濡れてきたぜ！」

男が強引に押し当てるバイブの下で染みが広がって行く様子が発見された。

「へへ・・・流石のお淑やかな処女も俺様のテクニックによって感じ始めたか？」

バイブを繰り出す男が、得意顔になって叫んだ。

「おいおい？これは本気汁じゃなくて、小便だぜ！」

ショーツに拵がった滲みに指を当てた男がそのサラサラとした液体を指先に取り、臭いを嗅いでみたりして笑いながら叫んだ。

「こいつバイブを当てられておしっこを漏らしやがったぜ！」

曉美を取り囲む男達が可笑しそうに笑い声を上げた。

「オシッコで濡れたパンティを何時までも履いていたら気味が悪いだろう？今脱がしてやるからな！」

笑いながら男達がショーツに手をかけた。

野卑な男達の目に秘所を晒す事になるという恐怖に曉美が悲鳴を上げた。

その時ドアをノックする音が聞こえた。

「糞！良い所で誰だ？」

若いチンピラ達が忌々しげに呟いた。

もし兄貴分がやって来て、親分の命令に背いて曉美をいたぶっていた事がバレたらどんな仕置きを受けるかも分からないと、青くなると、慌てて曉美を責めていたバイブを隠すのであった。

青沼は、黄原の命令通り7階に辿り着き、曉美が幽閉されている部屋の前まで辿り着いていた。

恐らく下では奇襲が始まっている頃だと思ったが、まだこの階まではその騒ぎは伝わって来ていなかった。

部屋からは内部に人の居る気配が漂っていた。

意を決した青沼が部屋の扉をノックした。

中から誰だ？と叫ぶ声がした。

構わず青沼はもう一度部屋の扉をノックした。

誰が来たのか確かめようと扉の鍵を外して、首を廊下に出したチンピラを目にも留まらぬ速さで抱き抱えるように引きずり出すと声を上げられないように口を封じて、そのまま首に鋭利な大型ナイフを押し当てた。

突然の事態に声を上げる暇もなく恐怖の表情を浮かべる男に耳元に口を寄せ、声を上げるな一と、小さく囁いた。

喉元にナイフの刃先を押し当てられ、青ざめた男は小さく肯いた。

表の奇妙な様子に部屋の中から、何だ？ どうした？ と声が上がった。

「見張りの交替が来たと言え。」

青沼が硬直する男の耳元で囁く様に再び命じた。

恐怖に駆られた男は、「交替だ！ 見張りの交替が来たぞ！」と、叫ぶ様に言った。

さつきから晴江の女体責めに加わりたくて、交替が来るのをウズウズして待っていた男達は、何の疑いも持たずイソイソと部屋から出て来た。

そして部屋から廊下に出た時に、仲間の一人が見知らぬ男に背後から抱き抱えられ、喉元にナイフを突き立てられている姿を目にして啞然とした。

間髪を与えず、青沼が捉えていた男の喉に押し当てていたナイフをスッと横に引いた。

大量の血が噴き出し、呆然と佇む二人の岡照組の若いチンピラに降り掛かった。

まだヤクザに成り立てで人の生き死にを間近で見たことの無い若者達は、突然の事態に恐慌状態となり金縛りに遭った様に身動き出来なくなった。

そんな顔面蒼白で立ち尽くすチンピラ共に素早く拳銃を抜いた青沼が銃撃をくれた。

白目を剥き虚空を掴む様な仕草をした二人の男が廊下に倒れ伏した。

開け放たれた扉から部屋の中に飛び込むと暁美が床の上に茫然自失した状態で座っていた。

そして、其処に日頃見知っている青沼の顔を認めて、安心してこれまでの恐怖が一機に噴き出したのかワッと泣き声を上げた。

泣きじゃくる暁美を優しく抱き締めながら、両手を縛っていた麻縄を解いていった。

これまで必死に恐怖に耐えていた暁美が縋り付く様に青沼の胸に飛び込みワンワンと泣き声を上げた。

「お嬢、もう大丈夫ですよ！」

青沼の腕の中で堪えていた恐怖にガタガタと震え泣きじゃくる暁美を強く抱き締めながらあやすよう言った。

これまで親分の娘と言う事で畏敬の目で見っていた女性であり、女として好きとか嫌いとか特別の感情を抱いた事は無かったが、日頃荒くれ男に取り囲まれ男を男とも思わないような高飛車な娘だと思っていたお嬢が、その内面には男が護ってやらなければならない小鳥の様なか弱さが在ったのかと知ると、何やら愛おしい思いが込み上げて来て、ガタガタと震えて腕の中で泣き崩れる暁美を強く抱き締めるのであった。

一方、秘密ソープの事務所では、大勢の男達の格闘の後、事務所から逃げ出した岡照組の男達とそれを追いかける目高組の男達が去って、広い事務所には晴江とお竜だけが取り残されていた。

晴江は自分の脱ぎ捨てた着物を身に着けて身繕いをしていた。

ふとお竜の様子を見ると、激しい格闘の後で、まだ荒い息を吐いて、へたり込む様に床に腰を降ろしていたが、その右腕は深い刀傷を負ってダラダラと血を流していた。

「お竜！お前怪我をしているじゃないか？」

青白い顔をしたお竜が晴江の方に顔を向けると、ニッコリと笑みを浮かべて、

「何、こんなものかすり傷ですよ・・・」

と応えた。

「そんな！かすり傷って！・・・」

見るとお竜の右腕は10センチ以上に渡ってパツクリと傷口が開き夥しい血が溢れ出ている。

最初に部屋に飛び込んで来たお竜が裸の晴江を庇って岡照組の男達の攻撃を一身に受けている間に負った傷に違いなかった。

慌てて着物を止めていたしごきを手にとると血止めのためにお竜の腕を縛り付けた。

黄原は銀子と共に岡元の行方を捜していた。

このまま岡元の息の根を止めて置かないと、これまでの計略が露見する恐れがあると思っていたのだった。

今は相手の不意を衝いて相手方は混乱しているが、人数は岡照組の方が圧倒的に多い。

恐らく逆襲を受けている知らせが、目高組の事務所に殴り込みを掛けている子分達にも伝わって、こちらに引き返してくるだろう。そうなったらこちらの方が危ない。今は一刻も早く岡元を捜し当てて殺してしまわなければならないーと、ジリジリと焦りが込み上げて来る黄原であった。

建物の其処此处では、突然の奇襲を受けて浮き足だって統制を失って逃げる岡照組の男達とそれを追跡する黄原の部下達との間で命を賭けた乱戦が続いていた。

この秘密のソープの女達は、それぞれ自分の部屋の扉を内側から固く施錠して震えながら事態が終わるのを待っていたのであった。

ついさつきまで男達の激しい怒号や叫び声が響いていた廊下は、今はシーンと静かになっていた。

部屋の扉を僅かに開いて若い女が外の様子を窺った。

それは、裸身にバスローブを羽織っただけの美咲であった。

すると目の前に抜き身の匕首が転がっているのが目に入った。

美咲は部屋から抜け出すとその落ちていた匕首を手にとった。

再び廊下の端から人が近づく気配を感じて慌てて部屋に戻った。

薄く扉を開けて、様子を窺っていると、それは二人のボディガードに左右から護られた岡元であった。

自分の部屋の前を通り過ぎるのを待って、音を立てずに部屋から出ると、岡元の背後に忍び寄り、手にしていた匕首で岡元の背中を一機に突き刺した。

突然背中に激痛を感じて岡元が悲鳴を上げた。

見ると美咲の手にした匕首が深々と岡元の背に刺さっていた。

「糞！このアマ！親分に何て事するんだ！」

怒ったボディガードが拳銃で美咲を撃った。

銃声だ！銀子と連れだって岡元の行方を捜していた黄原が叫んだ。

続けて女の悲鳴の様な声も聞こえた。

直ぐさま銃声が聞こえた方に向かうと廊下にバスローブを着た女が倒れていた。

拳銃で撃たれたのだろう。体からは夥しい血が流れていた。

其処に倒れていたのが美咲だと気付いた銀子が思わず駆け寄った。

一あの脱走事件以来、此所で生きて行く辛さを自分に対する敵愾心に変えて、強く生きて行けるように表面上は美咲に対して陰険に当たる銀子であったが、自分の境遇とそっくりなこの少女は銀子に取って二重写しとなっており、心の中では常に実の妹の様な愛しさを抱いていたのだ。

美咲を抱き抱えながら、「美咲ちゃん！しっかりして！」と、悲痛な声を上げた。

「ああ・・・銀子さん・・・」

体からドクドクと血を流しながら美咲が虚ろな瞳で抱き抱える銀子の方を見つめた。

「憎かった・・・殺してやりたかった・・・私たち家族の幸せを引き裂いた岡元を殺してやりたかった。だから岡元を刺したの・・・」

美咲の手から血の付いた匕首が力無くコロンと床に落ちた。

「でも殺せなかった・・・悔しい・・・」

益々虚ろな表情になって行く美咲を見詰めながら、

「美咲ちゃん！しっかりするのよ！」

と、銀子が悲痛な声を上げた。

「銀子さん・・・最後にお姉さんと呼ばせて貰って良い？・・・お姉さん、有り難う・・・」

と、最後の言葉を残すと美咲の頬がニッコリと微笑んだ様に感じられた。

そして、静かに目を閉じるとそのまま銀子の腕の中に抱かれたまま事切れた。

美咲が最後に銀子の事をお姉さんと呼んだように、銀子も美咲の事を実の妹のように愛しく思っていた。

この娘の事を護ってやりたいと思っていた。そのためには何でもして上げたいと思っていた。

でも自分には何も出来なかった。

この娘の純潔も護ってやることも出来なかった。

そして、命さえ救うことも出来なかった。

悔しさが込み上げて来て、憤怒の表情を浮かべて立ち上がった。

「血の跡が付いている。きっと岡元の傷から流れ出た血だ・・・」

黄原が、廊下に点々と残っている血の跡を見つけた。

その血の跡はとある部屋の前で消えていた。

恐らく岡元はその部屋の中でボディガードから傷の応急手当を受けているのだろうと、思った。

壁に耳を当てて部屋の内部の様子を探ったが、気配を消しているのかシンとしていた。

そっと扉のノブを回すと、内側から施錠されていた。

このまま殴り込みに向かった部隊が戻って来るまで部屋に籠城するつもりだろう。急がなければならないと、黄原は決心した。

黄原愛用のコルトガバメントをドアノブの鍵に向けて発射した。強力な軍用拳銃の弾丸は一撃でドアノブごと破壊した。

しかし、これで部屋の中の人間にも襲撃が在る事を知らせたような物だから待ち構えているに違いない。ドアを蹴破った瞬間が勝負だと思った。

黄原は勢いを付けてドアに体当たりをするように体をぶつけてドアを押し開いた。

二人のボディガードは岡元を背後に匿う様にして、銃口を戸口に向けて構え、ドアが開いた瞬間に引き金を引けるように準備していた。

ドアが大きく開いた瞬間、二人は胸の高さに照準した銃を乱射した。

しかし、其処には誰も居らず、虚しく銃弾だけが通り過ぎた。

開け放たれた戸口に腹這いになった黄原が冷静に狙いを付けて、銃を連射して二人のボディガードを屠った。

強力な45口径の弾丸は一撃で男達の戦闘能力を奪い去っていた。

二人のボディガードと共に籠城していた岡元は、護衛を一機に失って、銃口を自分に向けて黄原に気圧される様にジリジリと部屋の奥まで後退していた。

部屋の奥、何時もはソープ嬢が客とプレーする時に使う大きな浴槽の前に、顔面蒼白になった岡元が逃げ場を失って立ち尽くしていた。

黄原は黙って岡元に銃口を向けた。

「待ってくれ！黄原！これは何かの間違いだ！・・・俺が悪かった、許してくれ！・・・金なら幾らでもやるから、命だけは助けてくれ！」

黄原に銃口を向けられて、岡元が見苦しい程、哀願の声を並べた。

銀子が部屋に入って来て、黄原の隣に並んだ。

「安心しろ・・・俺はお前の事を殺しはしないさ・・・」

と、一言言うと、岡元に向けていた拳銃を下に降ろした。

黄原が自分を狙っていた銃口を床に向けたので、真っ青だった岡元に顔にはホッとしたような表情が浮かんだ。

「俺は、お前を殺しはしない・・・殺すのは俺じゃなくて銀子さ・・・」

と、皮肉な笑みを浮かべると懷から、小型のベレッタの自動拳銃を取り出して、銀子に手渡した。

それは、殺傷能力は低いが、発射の反動が少なく女性でも扱い易い22口径の小型拳銃であった。

強ばった表情の銀子がそれを受け取った。

両手で拳銃を握ると岡元に銃口を向けた。

銃を握り締める銀子の目に憤怒の炎が浮かんでいるのを見て、岡元の顔色が見る見る青く

変わった。

恐怖の余り、「銀子！俺が悪かった！・・・今まで酷いことをして済まなかった！・・・」

と、必死の声で叫んだが、銀子はその声も聞こえなかった様に、

「これは、美咲ちゃんの恨みよ！」

と、一言言うと引き金を引いた。

至近距離から発射された銃弾は狙い過たず、岡元の右大腿に命中した。

悲鳴が上がって、岡元の体がガクッと下に崩れた。

「これは、ママの恨みよ！」

鋭い銃声をして、岡元の左大腿に命中した。

両脚を射貫かれた岡元が、最早立っていられず銀子の前に<sup>ひざまず</sup> 跪くような姿勢となった。

「これはパパの恨みよ！」

次の銃弾が岡元の腹を射た。

腹部から夥しい血が溢れ出し、必死で腹の傷口を押さえた。

蒼白となった岡元の唇が、銀子に向かって何か言いたそうにブルブルと震えたが、最早言葉にはならなかった。

「私は、あなたが在りもしない借金で縛り付けて、十年間も此処で働かせて来たことを知っていたのよ！」

と、悔しそうに唇をワナワナと震わせて銃口を向けた。

浴槽を背にした岡元が、恐怖に駆られて、出ない言葉に代わって、何かを伝えようとするかの様に必死に右手をバタバタと動かした。

「これは、私の恨みよ！」

最後の銃弾が岡元の眉間に命中した。

岡元の体が後ろに仰け反り、ゆっくりと背後に倒れて行った。

額から噴き出した血飛沫が、空中に大きな弧を描いた。

浴槽の縁に背を預ける様に仰向けに倒れ、満々とお湯を満たした浴槽の中に後頭部から倒れ落ち、そのまま上体がゴボゴボと沈んで行った。

硝子張りの浴槽を通して、流れ出る血で湯を真っ赤に染めて、頭を下にして胸から先を湯の中に沈めた岡元の死体が目に焼き付いた。

拳銃を固く握りしめたまま、カッと見開いた銀子の目からは、涙が流れ出ていた。

黄原は良くやったという様に後ろから銀子の肩を抱いた。

黄原に優しく抱かれた銀子は、突然クルッと身体の向きを変えると、武者ぶり付くように黄原の身体を激しく抱き締め、無我夢中の勢いで黄原の唇に自分の唇を押し当てて来た。

その熱に浮かされた様な激しい銀子の動作を優しく黄原は受け止めた。

二人の熱い唇は互いに溶け合って一つに融合していた。

銀子の目から溢れ出た涙が、まるで日照りで干上がった地面に慈雨が染み込んで行く様に、黄原の荒れた頬に吸い込まれて行った。

結局、お竜が右手に大怪我を負った意外は、大した怪我人も無く、無事大姐とお嬢の奪還に成功した。

黄原にしても、岡元を抹殺することにより口を封じ、銀子を手にする事も出来、全ては黄原の計画通りに行った。

又、岡照組の殴り込みを受けた目高組でも奈和親分の適切な指揮で、何人かの軽い怪我人は出たものの一人の死亡者も出すことなく撃退に成功した。

こうして、岡照組との抗争も終わり組も平静となり、大姐とお嬢も生還して、全ては元通りに戻った筈であるが、幾つかの点で微妙に以前とは違っていた。

女に対して異常な程の潔癖症を持つ奈和は、例えどんな美人でも、男の手垢が付いた様な女には性欲が湧かない性癖があった。

今回晴江は、岡照組の男達に犯される前にお竜により救出された訳であり、岡照組の男達から強姦され操を奪われた訳では無いが、それでも晴江が岡元等に抱かれたのでは無いかと猜疑を持っているのか、あるいは、自分以外の他の男達の目に全裸姿を見せた事に<sup>わだかま</sup>蟠りを感じるのか、それ以来夫婦の交渉は無くなっていた。

それでも晴江は組の中ではそんな素振りは見せず、奈和を助けて目高組の大姐として変わらず組員に接していた。

目高組の賭場を預かり、自分でも賭場に立って壺振りをしていたお竜は、右手の怪我により思い通りに壺を振れなくなっていた。

入ります！と良く通る声を上げて、ピンズロの丁！と、強く心に念じて、賽子を壺に投げ込み、型通り盆の上に壺を置き、勝負と！と、一声上げた。

さっと壺を退かしたが、現れたのはグニの半であった。

フウと溜息を吐いてお竜が肩を落とした。

漸く右手の傷も癒えて、賭場に立つ時の着物に袖を通し、壺振りの練習を始めたのであるが、昼頃から始めて既に深夜となっていた。

この間何度も賽の目を操ろうとしたが、全くと言って良い程、お竜の目指した賽の目は出なかった。

以前は、まるで壺の中の賽子と自分の右手が糸で繋がっているように、壺の中の様子を分かることが出来たのに、今は何の感覚も得られないのであった。

別に賽の目を操ってイカサマをやろうとする訳では無いが、今一盛り上がらない賭場を盛り上げたり、熱くなり過ぎた賭場を冷ましたりするためには、ある程度賽の目を操る技は壺振りにとって必要な技術だと思っているのだった。

イカサマ賽を使う訳では無いので100パーセント賽の目を操れる訳では無かったが、以前なら7割以上は自分に思った目を出せる自信があった。

しかし、今はまるで賽子にあざ笑われているかの様に悉く目を出す事が出来なくなっていた。

右手の傷は完全に治っており、何ら問題無く動くのに、以前の感覚が取り戻せないことに焦りを抱くお竜であった。

その後何度か壺を振ったが、お竜の目指した賽の目は出なかった。

「入ります！」と声を上げて壺に賽子を投げ込んだのだが、思わず、アッ！と悲鳴の様な声を上げた。

賽子は、壺から飛び出して盆莫座の上をコロコロと転がった。

ガックリと肩を落とし、悔しげに唇を噛み、賽子を睨み付けていた。

「お竜！まだ賽の目の練習をしていたのか？」

その時、襖を開けて奈和親分が入って来た。

「まだ傷は十分に治っちゃいないんだ！無理をしちゃあいけねえ！見なよ、傷口がまた開いて血が滲み出ているじゃないか・・・」

奈和の指摘する通り、お竜の右手に巻いた包帯には赤い血が浮き出ていた。

「賽の目を操れないって、随分気に病んでいるようだが、そんなもの傷がすっかり治ったら元に戻るさ・・・」

「親分！今度は違うんです！今度は永久にこの感覚が戻らないような気がして不安なんです！」

「別に賽の目が操れなくたって、お竜さん程の胴師が賭場に立てば、客はわんさか訪れる事さ！」

真剣に思い詰めた表情を浮かべるお竜を慰める様に言った。

「それが嫌なんです！私はこんな不完全な状態で賭場に立つ自分を許す事が出来ないのです！」

と、奈和の方を振り向いて潤んだ瞳で叫ぶ様に言った。

「ふーん、そんな物かねえ」

と、お竜の背後に回ると、お竜の背に体を密着させた。

「まあ、そんなに自分を追い込むことも無いさ・・・」

と、独り言の様に呟くとお竜の着物の合わせ目から突然右手を差し入れ、お竜の乳房をまさぐった。

予想もしていなかった奈和の行為に驚いて、激しく首を振りながら、着物の奥に差し入れられた奈和の手を振り解こうとしたが、ガッシリとした奈和の強い手は、お竜の力ではビクとも動かなかった。

そんなお竜の狼狽を無視して、背後から左手でお竜の体を強く抱き締めると、唇をお竜のうなじに舐めさせた。

奈和から体を浴びせられる様に体勢を崩したお竜は、奈和ともつれ合う様に盆墓藪の上に倒れ落ちて行った。。

「ああっ・・・親分・・・」

上から、奈和に組み敷かれたままお竜が切なげな声を上げた。

着物の裾を無理矢理捲り上げ、奈和の骨太い手が股間を襲った。

けっして器用では無い無骨な指先が、お竜の股間をまさぐった。

このまま親分から犯されるという恐怖心が沸き上がる一方、畏敬していた親分から愛されるという事に何かジーンと痺れる様な感情が込み上げ、身体が金縛りに遭った様に動かなかった。

身動きを止めたお竜の身体から帯を弛め、着物を捲り上げ、むき出しとなった白い乳房や股間の上に奈和の手が伸びた。

忙しなく指先を蠢かせ乳房と股間をまさぐられる間に、心臓が早鐘の様に鳴り響き、股間

がジワジワと湿って来るのを感じていた。

血腥い暴力社会の中で、荒くれ男達から見下され無いよう何年もの間、男に身体を許すことは無く、とっくに女を捨て去ったと思っていた自分に、まだそんな女の生々しい部分が残っていたのかと自分でも驚くお竜であった。

奈和の無骨な愛撫を受け続ける間にお竜の理性は薄れ、全身から力が抜け落ち、頭に霞が掛かったように意識が薄れて行く様に感じられた。

十分に秘部が潤った事を確認した奈和は、隆起した自分のモノを掴み出すと、お竜の秘裂にあてがった。

奈和の巨大なモノが股間を割って侵入して来た事を感じて、ウッと呻き声を上げて身体を仰け反らせた。

奈和の赤熱した鉄棒の様な熱気を帯びた硬くて太い肉塊が、ジワジワとお竜の秘奥に食い込んできた。

まるで悍馬の<sup>いなな</sup>嘶きのように荒い息を吐きながら、鋭い匕首をお竜の下腹に深々と突き立てる様に、これまでどの男にも占領された事の無かったお竜の未開の秘奥を楽しんだ。

奈和の荒い腰使いの下で心臓は早鐘の様に脈打ち、息も荒くなり、最初の奈和の巨根に切り裂かれるような痛みも感じられなくなり、頭には霞が掛かったように意識が遠のいて行く様に感じられた。

朦朧とする意識の中で、奈和に組み敷かれ犯されながらお竜が、ああ一つ、お許し下さい、お許し下さい、と謔言の様に呟き続けた。

それは、奈和の暴力に向けられたものではなく、凶らずも奈和を奪う事になってしまった大姐に対する申し訳なさから発したものであった。

この時、誰が目撃していたのか判らないが、お竜が親分の女になったとの噂は目高組の中にパッと拡がった。

当然大姐の晴江の耳にも届いているはずであるが、組の平静を保つためか、何事も無かったかのように、これまで通りの大姐として組員に接していた。

男の手垢の付いた様な不貞の女には、例えどんな美女であっても食指を動かさない奈和の女に対する潔癖性を良く知っている晴江は、自分が奈和の目から今度の誘拐事件後そんな目で見られているのかと思うと心が搔き筆られる程辛かった。

今回は、お竜の活躍により男達に犯される前に助けられた訳であるから、貞節は守った訳であるが、あえて奈和の前で弁明する事は無かった。

自分の貞節はお竜によって守られることは出来たが、結果としてお竜に夫を取られたという現実には、狂おしい物を感じ、お竜に対して今回の自分と娘の救出劇の感謝の念を感じると共に、一方では嫉妬の<sup>ほむら</sup>炎を燃やすという複雑な気持ちを一人抱くのであった。

しかし、そんな内心の葛藤をおくびにも見せず、気丈にも従来通り何事も無かったかの様に組員と接するのであった。

廊下でお竜が晴江とすれ違った時、思わずお竜は済まなそうに晴江から視線を反らせたが、晴江は何事も無かった様にこれまで通り平然と通り過ぎるのであった。

そんな大姐の後ろ姿を見送りながら、今回の件は決して自分から誘った訳では無く結果的に奈和に力尽くで肉体を奪われた訳ではあるが、その一方で奈和に抱かれて嬉しく思う女としての自分が居ることを実感し、済まないと心の中で大姐に詫びるのであった。

目高組と岡照組の双方の親筋にあたる村崎會で今回の抗争に関する裁定が行われた。

奈和親分はその裁定の結果を聞くために数日組を留守にして、今日組に戻って来ていた。

裁定の結果を報告するため、組員を広間に集合させた。

居並ぶ子分達を前にして、組員をぎょろりと一瞥すると話し始めた。

「今回村崎親分立ち会いの下に、村崎會を構成する全国の親分衆を集めて、今回の目高組と岡照組の抗争に関して話し合われた・・・」

裁定の結果は以下の様な物であった。

今回の抗争は目高組の縄張りを横取りしようとして、岡照組が始めた私戦であり、全ての責任は岡照組に在り、目高組には非が無い物と認められた。

その結果として、岡照組の幹部を始めとして全ての組員は破門とされ、村崎會を構成する全ての組は、これらの組員を受け入れる事を禁止された。

今回の事件の岡照組側からの事情を知っている幹部連中が、抗議も弁明の機会も与えられずこの世界から永久に追放されることとなった事は黄原に取って朗報であった。

全ては、黄原の思惑通りに進んでいると腹の中でほくそ笑むのであった。

「岡照組の縄張りや施設も一切がっさい目高組で引き継ぐことになった。これで目高組は一機に倍以上の縄張りを持つ事になったと云う訳だ。・・・例の秘密ソープも会員客からの再開の要望が強くて、内の組の運営で営業を始める事にした。ソープで働いていた<sup>ほいた</sup>売春婦共

もそれぞれ馴染みの客が付いているから元通り使ってやる。・・まあ再就職という奴だな・・」  
奈和が可笑しそうに笑い声を上げた。

黄原の隣に座って話を聞いていた銀子が、又あの恐ろしい売春の館に引き戻され、性の奴隷の様な生活を送ることになるのでは無いかと怯えて黄原に体を寄せた。

そんな不安げな銀子に心配しなくて良いと言うように優しく背を叩いた。

「秘密ソープを再開するのは良いですが、所で銀子はどうするんです？今回は銀子のお陰で大姐やお嬢を救出する事が出来たんでやすぜ・・」

黄原が奈和に尋ねた。

「銀子か？・・」

奈和が一呼吸おいて、「おめえ銀子に惚れているのか？」と、  
ジロリと訝しげな目で黄原を見詰めた。

その奈和の冷めたい目付きから自分の事を疑っていると感じ、黄原は顔色には出さなかったが、背中に冷たい物が流れた。

今回の事件では最初から岡元を信じていたため対応が遅れた所があったが、事件が終わった今でもまだ今回の件に疑問を残している所が在るようであった。

「安心おし！銀子に男は取らせないよ！」

その時、背後で女の声が上がった。

振り向くとお竜が立ち上がっていた。

「銀子は、私の後釜として賭場で壺を振るんだよ！良いね、銀子！」

突然の救いの手に銀子が、はい！と応えた。

「壺振りの修行は厳しいけど途中で音を上げたら承知しないよ！」

と、厳しい口調でお竜が問い掛けたが、これまで自分が受けて来た気も狂うような過酷な性の修行に比べればどんな苦しい修行にも堪えられると思って、「私、頑張ります！」とハッキリした声で応えるのであった。

その日からお竜による銀子への壺振りの修行が始まった。

賭場での作法や賭場で行われる数々の賭博の修行があったが、中でも最も時間を掛けたのが賽子賭博による修行であった。

「あなた素質が在りそうね。・・中々筋が良いわよ。ほらもう一回やって見なさい！」

「はい！・・・入ります！・・・勝負！・・・シニの丁！」

カラカラと賽子の回る音と、トンと壺が盆莫菴に伏せられ、気合いの入った若い女の声が響いた。

朝から深夜までお竜が付き添っての賽子賭博の修行が続いていた。

その厳しい修行の中でも銀子は、お竜に従って技を身に付けるため励んでいた。

時には激しいお竜の叱咤を浴びせられ、容赦無く手や頬を叩かれることもあったが、自分がこれまで積み重ねて来たおぞましい色道の修行に比べれば、この様な叱責を受けることは何でもなく、賭場での技術を身に付ける修行は辛くも何とも無い事だと自分に言い聞かせて頑張っていた。

お竜による銀子の特訓も数週間目に入っていた。

「力で壺の中の賽を振り回すんじゃないよ。壺越しに中の賽の動きを右手に感じるんだよ。賽と話をする様に、賽の気持ちを全身で聞くんだよ。・・・あんたは中々筋が良さそうだから、そろそろ賽の声が聞こえる様になって来たんじゃないかい？」

「・・・はい」

銀子の超速の進歩にお竜もそろそろ仕上げの段階に入ろうとしていたようであった。

「それじゃ、今度は私の言う賽の目を出してごらん・・・先ず、ピンゾロの丁。」

「はい！・・・入ります！・・・」

カラカラと賽子が壺の中で鳴り、トンッと壺が盆莫菴の上に伏せられる音がした。

「勝負！」

「ほら！出来たじゃない！大したものよ！」

銀子のホッとしたような溜息と、お竜の嬉しそうな声が聞こえて来た。

「いよいよ来月からあんたは賭場に出るんだよ！『壺振りお銀』の登場さ！」

賽の目を操れなくなってしまった自分に代わる後釜をやっと育てたという、お竜の明るい声が聞こえて来た。

襖越しに二人の声を聞きながら、黄原は、お竜が銀子を手元に置いて常時接しているのは、奈和親分同様今回の事を疑っていて、銀子の口から何か聞き出すためでは無いかと疑っていた。

もしそうなら、親分諸共生かしておく訳には行かないな・・・と、心の中で思うのであった。

あの事件以来、目高組の中で多くの事が変わっていた。

もう一つ変わった事と言えば、超武闘派の血の気の多い男連中の中で生まれ育ち、これまで男を男として見た事が無い様なじゃじゃ馬娘の暁美が、青沼の前だけでは妙にしおらしい乙女らしい素振りを見せる様になったことであった。

何かの本で読んだ記憶が在るが、犯罪に巻き込まれた女が恐怖の緊張感から発する心臓の鼓動が恋愛の時の心臓のときめきと似ているため、恋をしていると勘違いすることがあるとの事だ。

自分を助け出した青沼に対して、救出された時の安堵感から心が空っぽになった隙に、青沼の印象が強く心の中に残り、勘違いして、青沼に対して恋愛感情を抱くことは有り得ることだと思った。

ただ、その様な恋は長続きしないと書いて在った。

大方、気まぐれ娘の一時的な気の迷いに過ぎないさーと、考える黄原であった。

終わり